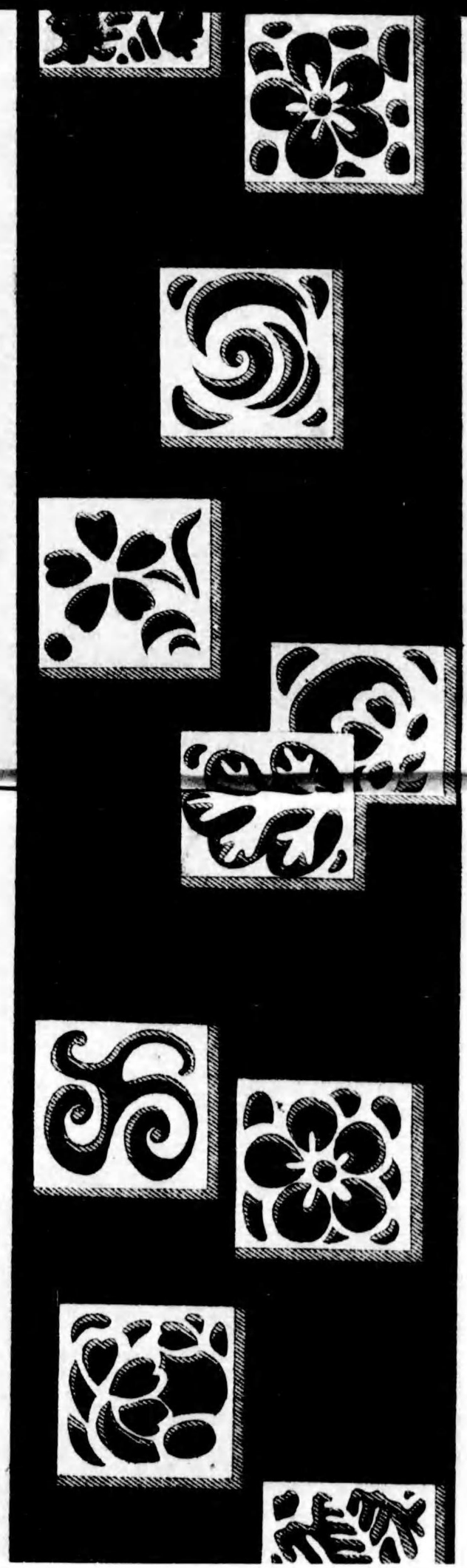
立川文庫
第百八十五編

豐臣忍術名殘黨

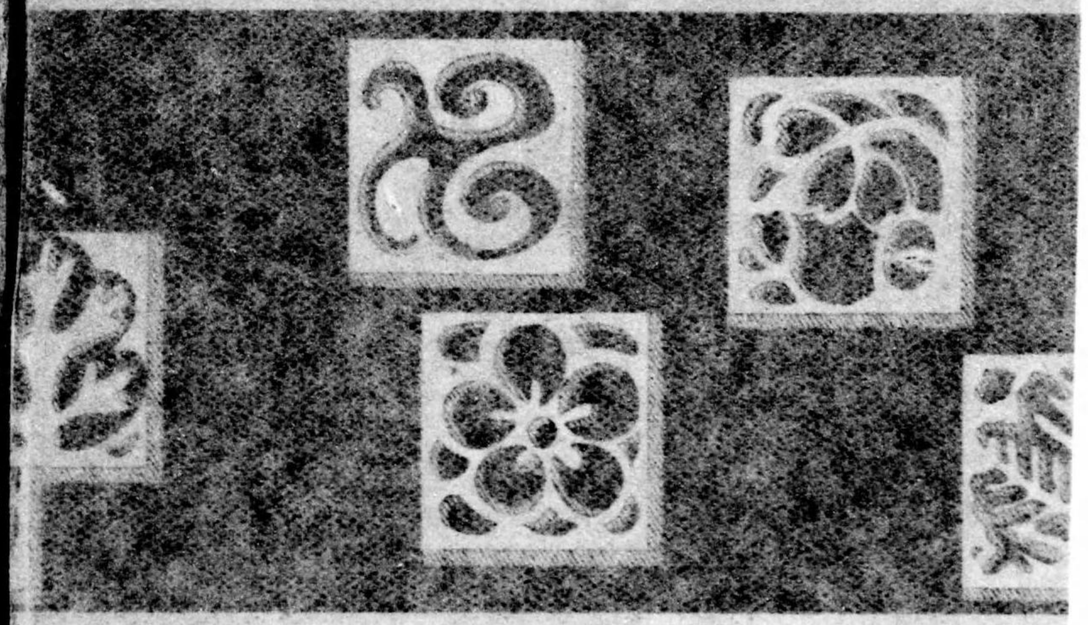
野々村新八郎

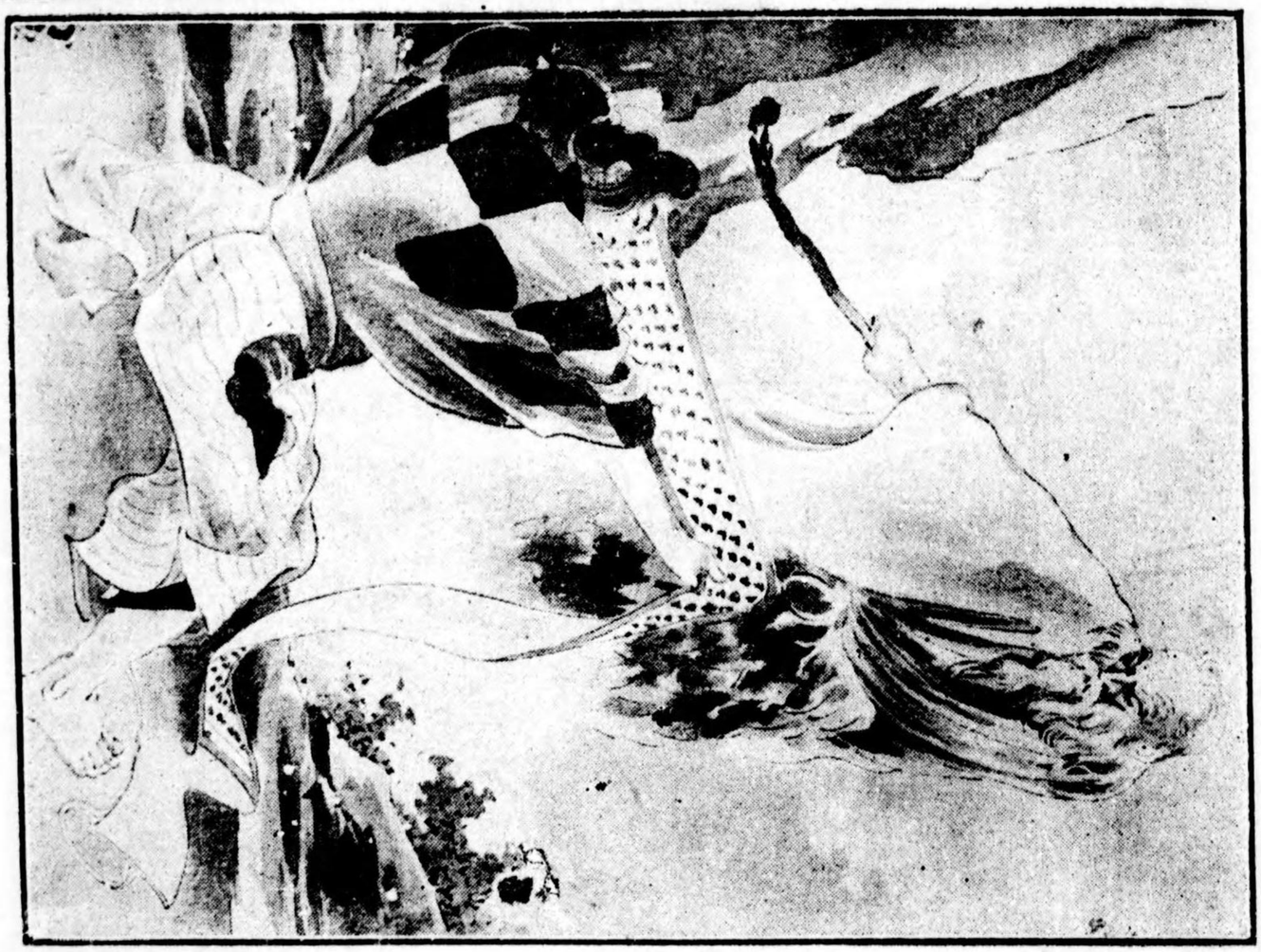
始



野々村新八郎

大正
6. 5. 22
内交





特100
20

目次

○その代り六俵の米を貰うぞ……一
○百姓なんか嫌ひだ……八
○意氣地のない奴ち……一六
○腕づくでとつて行け……二二
○首なんか斬られちや堪らん……二八
○この首が落ちると思ふか……三五
○ならば手柄に召し捕つてみよ……四二
○どうだ一勝負やらんか……四九
○南無三も四も五もあるか……五六
○漫遊に出たてのホヤ〳〵だ……六二

○拙者を御存じかな……六九
○口程にもない弱い奴ぢや……七七
○乃公は日本一の武藝者ぢや……八四
○目を丸くせんでもいゝ……九一
○貴樣等に降參して堪るかッ……九八
○助けてやらねば相ならん……一〇五
○徳川の奴等を威赫しつけてやる……一一一
○斯うみへても魔法遣ひだ……一一八
○まだヂタバタいたし居るか……一二五
○前後は乞食の供ぢや……一三一
○生意氣なことを吐かすな……一三九
○一二遍往復させてやる……一四五

○この鐵棒喰つて往生せい……一五二
○いよ〳〵怪しい寺だぞ……一五九
○蜘蛛の妖術を遣ふか……一六六
○彦左衛門といふ馬鹿老爺か……一七五
○首なんか拔かれて堪るか……一八一
○仕損じたか殘念ッ……一八八
○又さび込みアがつたな……一九五
○イザ尋常に勝負せいッ……二〇三
○又もさり逃がしたかッ……二〇九
○即座に首打ち刎ねられい……二一一
○ヤヽッ……其女は卷ッ……二二二
○これぞ冥途までの恨ぢや……二二八

○情の枷は脱することは出來ぬ……二三五

目次終

豪臣奴隷水遁の術

野々村新八郎

雪花山人

○其の代り六俵の米を貰ふぞ

戰國時代には忍術は大いに尊重され、豊公の時代には尤さもその旺盛を極め徳川治世の初期の頃には尚は多くの忍術家が天下に暴れ廻つてゐた、數あるその中で、本編は水遁の大名人野々村新八郎の凛々しき活躍振りを述べるさしやう。

世は走馬燈の廻り持ち、元和元年五月七日、さしも南面不落と誇つた大阪の名城も、朝煙と共に落城なし、天下の大權はいよ〳〵徳川家の手に落ち、豊臣

殘黨の詮議殊の外嚴しかつた、その頃丹波國福知山の城下に程近き落合村といふところに、惣助といふ百姓があつた、夫婦の間に新八、お春といふ男女の子がわり、下男の二三人も召し使ひ、何不自由なくその日を暮らしてゐた、お春といふのは當年五才、可愛らしい、百姓の子には似氣なき綺麗な優しい子だ、それに引きかへ、兄の新八といふのは三つ違ひの八つ、ムク〳〵と肥へ太り、一寸みたところ、十三四位いの骨柄、從がつて力も强く、これまで何を持つても重いと思つたこともないといふ大力、然し惡戯はこの上もなく、毎日〳〵尻を持ち込まれるので、惣助夫婦も殆んど持て余してゐた、惣「コレ〳〵新八、お前なんだつて五助を池の中へ投げ込んだりするんだ、彼處のお母さんが怒鳴り込んできたが、どうもそんな亂暴しては不可ないではないか……、

新「お父さん、不可ないではないかと云つたつて、どうして投げ込んだのか知つてゐますかい……、惣「そりア、知らんが、たとへどんなことがあつても

人樣を池の中へ投げ込む奴があるか……、新「だがお父さん、何も五助が溫和しくしてゐるのを坊が投り込んだのではない、あの五助と云ふ奴は十六にもなつて、十一になつたばかりの勘公を苛めて泣かしてゐたから、坊が五助止せ〳〵、可哀想だから少さい者を苛めるなと云つて止めたら、入らぬお世話だ、默つてゐろつてボカ〳〵勘公を毆るから、突然襟ッ髮引ッ掴んで投げ込んで遣つたのだ、それを母親は我が子の可愛さで怒鳴つてくるとは分らん奴だ、此度きたら親子諸共……、惣「コレ〳〵新八、何を云ふ……、新「何を云ふてはない、お父さん、そうでせう、この間坊に義をみてなさゝるは仁なきなりなんて教へ、まだその舌の根の乾かぬ先きに何事です、お父さんは人の難義をみて默つてゐますか……、惣「ウム……、新「サアどうです、お父さん降參しましたか、降參なら降參と男らしくお云ひなさい、惣「親に向つてそんなことを云ふ奴があるか……、新「イヤ、坊から別に云ひ出したのでない、

坊は弱いものを苛めるやうな奴は、片ッ端からドシ〳〵征伐をして遣る、それに文句云ふやうなお父さんなら勘當するからトッ〻〻出て行きなさい」大變な子供もあつたものだ、子が親を勘當すると云ひ出す、その儘ブイッと戸外へ遊びに出てしもう、惡戯もするがよく饒舌る、さき〳〵親でも何んでも遣り込めてしもう、女房お園は呆れ返り、「園」マア彼の子はなんて子だろう、親に勘當するなんて生意氣なことを云ふ……、眞實に手もつけられない子だよ、お前さん寧そ彼の子を追ひ出してしもう方がようでざんすよ、惣「馬鹿なことを云ふな、惡戯なやうでも彼奴の云ふてさには一々理屈がある、然し今にどんな奴になるだろう」と、夫婦も舌を捲いて驚ろいてゐる、新八はてんな風に親でも遣つ付けるのだから他人は勿論、弱いものを苛めてゐる奴をみると、遠慮會釋もなく池や溝の中へ投げ込む、若い奴等が手向ひしても誰れ一人として敵ふものはなく、村中の者は誰れ云ふとなく雷天狗と綽名して恐れてゐた、然し決

して新八は無闇に叩いたりぶつたりするのぢやない、何時も理屈は新八の方にある、村人も後には新坊〳〵と云つて可愛がつてゐた、新八も十才の春を迎へるやうになると、ます〳〵骨柄も立派になり、相も變らず暴れ廻つてゐる、或る日のこと新八はブラリ、我が家を立ち出で、何か惡戯をすることはないかと探しながら、鎭守の社のところまでくると、森の中でワア〳〵と大勢の聲がするので、何事だろうときてみると、大勢の若衆が集まつて、四斗俵を差したり、投げたり力比べをしてゐる、新「イヨ……遣り居る〳〵」ヒョッとみると此方でシク〳〵泣いてゐる子供がある、新「オヤ、誰だ、泣いてゐるのは……、オヽ吉公ぢやないか」この子供は吉次と云つて、村一番の貧乏人の吉藏といふ小作人の伜で、新八より三つ四つ年上だ、吉「ヤア新坊さんですか新「お前何んだつて泣いてゐるんだ、吉「イヤ、別に……、新「胡麻化すな〳〵、今泣いてゐたぢやないか、又誰れかに苛められたのか、乃公が仇を討つ

て遣る、何奴だ……、吉「イエ、誰れにも苛められたのぢやないんで……今皆が力比べをするのをみて、思はず涙が出たんで……、新「何んだ、力比べをするのをみて涙が出た、どうしてだ、仲間へ入れてくれないからか、

吉「イエ、外ぢやありませんが、私のお母があゝして五年越しの病氣で寢てゐるのに、又この頃父が病らいついて仕事も出來ねねから、もう晩に粥を搗らへる米もないのに、此處へきてみると、米を俵のまゝ皆で玩弄にしてゐるので、思はず悲しくなりまして……、新「ヨシッ分つた、そんなことで泣いてゐたのか、乃公が今あの米を五六俵分捕つて遣るから、お前何處へも行かずに待つてゐろ」と、云ひ捨てゝ、大勢立つてみてゐる後方から、人々を押し分けて這入らうとする、□「痛へエ……誰れだ、鐵の棒で横ッ腹なんか突く奴は……、新「鐵の棒ぢやない、乃公の拳骨だ、□「ナニ、拳骨……恐ろしい固い拳骨だな、何んだつて殴りアがるんだい、新「喧しい、退け〳〵……、

□「退かねね〳〵、金輪際退くもんか、ヤア坊樣ですかい、今日は……、

新「退け、○「誰れだ、豪そうに云やアがるのは……ヤア新坊さん……、」顏をみると誰れもよけて通す、新八は拳骨で突き捲りながら前へ出てみると、村の、金滿家の倅庄太郎といふのが、平生から力自慢の鼻高々に四斗俵を手玉にとつてみせてゐると、見物人はワイ〳〵稱め千切つてゐる、新「ヤイ〳〵庄太郎、皆の目には豪くみへるか知らんが、乃公からみると一寸も豪くないぞ、何んだ、たつた四斗俵の一つ位い、赤子でもあげるわい、アッハ……と、大聲で笑つたのは見物人、怒つたのは彼の庄太郎、庄「なんだ、新坊か、子供の癖に大きなことを云ふもんぢやない、子供は默つて引ッ込んでゐるもんだ、新「乃公も大概なら引ッ込んでゐやうと思つたのだが、赤兒でも出來ることを大きな面をしてゐるから、遂に云ひたくなるんだ……、庄「なんだ、生意氣なッ、村の奴等が新坊〳〵、雷天狗なんて云へば、口に稅金は入らぬと

みへて大きなことを吐きアがる、四斗俵か赤子に持てるか、新「持てるかと威張つたつて持てるから仕方があるまい、乃公なんか五六俵一緒に手玉にとつてみせる……」これには庄太郎も大いにムツとして、庄「五六俵手玉にとる……五つは愚か半俵が六ケ敷いわい……、新「論より証據、六俵手玉にとつてみらうか……、庄「ウム、とつてみろ〳〵……、新「ヨシツ、手玉にとつてみせるが、その代り六俵の米は貰ふぞ、いゝか……、庄「ヨシツ、美事六俵一度にされたら遣る……、新「有難い、これで吉公が救かつた……

庄「なんだ……、新「此方の話しだ……、見ヤア面白い〳〵……」と多くの見物人はいくら雷天狗でも廣言を吐き過ぎると内心大いに笑つてゐた。

○百姓なんか嫌いだ

新「八はズカ〳〵中央へ進み出で、新「サア皆よく聞いておいてくれ、この五俵の米を手玉にとると、乃公に庄太郎がくれるといふから、持つて行くときにゲズ〳〵云はないやうに、皆生きた証人になつてくれい……、庄「然しもし持てないときにはどうする、新「持てないことはない、みて居れ……、庄「不可ねえ〳〵、そんな大きなことを云やアがつて、持てねえと云へばそれまでだ

新「では斯うしろ、もしや乃公が持てんときには……、そうだな、打つとも踏むとも蹴るともお前等の勝手にしろ……」何しろ血氣の若者揃ひ、殊に庄太郎は先刻より小面憎く思つてゐるところだ、庄「ヨシツ、打つても蹴つても撲はんと云ふのだな……、新「そうだ……、庄「其奴は面白い、サア六俵持つてみろ、後で弱い音を吹くな、新「ウム、首が落ちても弱音は吹かんぞ、

ザア皆もみて居れ……」と、今年十才の少年とは思へぬ程の太胆拂つて、一俵の俵にヤツと片手をかけた、庄太郎始め若者等は、若「ドツコイ六俵も持て〻堪るかい、天狗の孫でもあるまいに……」と、多寡を括つてゐると、新八は輕々と俵を提さげるが早いか、ヤツと叫んでポイツと投げあげた、一同アツと驚ろく間に落ちてくる奴をヒヨイと顏で受けた、此度はそれを頭に較せたまんま、片手に一俵宛提さげて足で三俵續いて蹴あげると、頭の上に三俵並んで載る、丁度四俵積んだ、まるで頭の上に米倉が出來たやうな偉好だ、新「サアどうだ庄太郎、約束通り貰つて行くぞ……」と、云はれて一同は眼をパチリ〳〵させて呆ッ氣にとられてゐる、庄「遣ろと云つたのは嘘だ……、新「嘘だ、今更らそんなことを云つても始まるか、お前も村一番の金滿家の小伜ぢやないか、男が一旦約束し〻反古にするとは何事だ、皆の見物人が証人だ、吉公、六俵わつたら、當分は樂てろう、お前と其處にゐる六助は一俵づゝ持つて

行け、乃公は四俵提さげて行くから……」と、兩手に二俵づゝ提さげてサツザと歩き出した、吉次と六助と云ふ若者は大喜びでゴロ〳〵轉がして行く、庄太郎は四斗俵を六俵只取りにされて、開いた口も塞がらずポンヤリしてゐる一同は驚ろいて後を見送る、まんまと首尾よく六俵の米を分捕つて吉次の家へ持つてきた新八、新「待て〳〵、米は出來たが金子がなくつちや不可ん、乃公が一走り行つてさつてきて遣るぞ……」と、一散に駈け戻つて、母親に話しをして若干の金子を持つてきて與へる、吉次親子は實に地獄に佛と手を合はして喜こんだ、萬事がこの通り、十才位いの子供のすることではない、このことが村中の評判になつて、新坊は感心な子だと云つて村人はその悪戯には持て余してゐたが、新坊〳〵と云つて大いに可愛がつてゐた、早や十三四才となると、ます〳〵骨柄も大きく力も強くなり、或る日のこと父惣助に向つて、新「お父さん、私しは武士になりたいから、どうか劔術の稽古にやつて下さい」

と、云ひ出した、父惣助は聞いて喜こびかと思ひの外、惣「なんだ、武士になる……、武士なんぞになるものではない、斯うして暮らすのが一番氣樂だ、それにお前一人しかない相續人だ、止したがよい〳〵……、新「お父さん、一番氣樂だなんて、土くさい百姓相手に、百姓なんか嫌ひだ、どうしても武士になりたい、惣「それはならぬ……、新「ぢや、もう頼みません、一人で劍術の稽古をします……」その日から庭の梅の木に棒を吊して、樫の木刀を拵らへエイッヤッポン〳〵と一生懸命、一日二日と經つ内に四邊の立木を悉く坊主にしてしもう父親惣助驚ろいたの驚ろかないのぢやない、惣「コレ〳〵新八、何をするんだ……、植木を皆坊主にしてしまつて……、新「でもお父さんが劍術を習いに遣つてくれないから、斯うして獨稽古をしてゐるる……、惣「てんてをしては不可ない、てんなてをするなら山へでも行つてやるがいゝ……」と、父は眉をひそめて怒る、新八は親父の叱言が五月蠅

くつて堪らないので、それからは近邊の大高山の奥へ這入り込んで一生懸命に立木相手に劍術の稽古、腹が空つてくると家へ歸ろ、五日十日半月ばかりは熱心に通つてゐたが、或る日のこと、散々に獨稽古をして、我が家へ歸らうとポッ〳〵山を下りてきた、この大高山といふのは彼の有名な大江山の峯續き、その邊は一帶山岳重累してゐる、何處をどう間違へたものか、新八は恰かも狐にでも魅入られたやうにウロ〳〵徘徊つてゐた、新「ハテナ……、今日はどうしたのだろう滅多に間違つたことのない山路を……、どうして……、斯う……」と、云つてゐる内に一つの大きな池の側へ出てきた、新八は大いに不思議そうに立ち止まつて、四邊をキョロ〳〵見廻したとき、煙の如く雲の如く、忽然として白髭の翁が自然木の杖にすがつて眼の前に現はれ、一二間先きにトボ〳〵歩いてゐる、新「オヤッ妙な老爺が……、オイ〳〵老爺さん〳〵……、老「何んぢや……、新「此處は何んと云ふところで、

落合村の方へ下りるのはどう行くのだ……、老「ハッハ……、お前は眼がみへんのか、可哀想に……、大きな立派な眼をしてゐながら……、新「ナニ……、眼がみへん……、馬鹿なことを云ふな、眼がみへればこそ斯う歩いてゐるのだ、老「では、お前は余程ボンクラだな……、新「ナニ……ボンクラ……、老「そうぢや、それでなければ人馬鹿か、眼がみへて自分が歩いて道が分らんで他人に聞ふとは……」若年血氣の新八大いにムッとして、新「なんだ……、老爺、老人と思つて默つて居れば……、老「何も老人と思はんでもよい……、新「汝ッ……」と、突然件の老人の胸倉をグッと引ッ掴んだ、老「ハッハ……、どうする積りだ……、新「どうすると は知れたこと、貴様をこの池の中へ投り込んで遣るのだ……。老「ハッハ……、それは一寸六ケ敷い、自分が落ち込まんやうに要心しろ……、新「何をッ……」と、云ふより早やく、ヤッと掛け聲諸共投げ込もうとすると、

這は如何に、反對に自分の身体は池の中へドブーンと落ち込み、アッと驚ろいたが、新八は相當に泳げる、然し何んと云つても十一月の中旬、身体は凍る程冷めたい、早やくし岸へ這ひ上る、ホッと息を吐く間もなく、又もドブーンと投げ込まれ、新「汝ッ……、老爺ッ……」と、再たび泳ぎ上り、件の老人に組みついてかゝると、苦もなくドブーン〳〵投げ込まれ、流石の新八も五六度續けて投げ込まれフー〳〵云ひ出した、老「どうだ、子供、降參したか、新「何をッ……、誰れが降參なんかするものか」と、又も懲りずにとびかゝつてくる、老人がヤッと叫ぶと、新八はウムと唸つて、ドスーンと、打つ倒れた、老「ハッハ……ナカ〳〵強情な奴だ」と、件の老人はニッコリ笑ひ、輕〳〵新八を横抱きにかゝへて何處ともなく立ち去つた。

○意氣地のない奴ぢや

惣助の家では夜になつても新八が歸つて來ないので大いに心配し始め、下男や近所の人を頼んで心當りを探させたが少しも知れない、惣助夫婦は死んだと思はない、平生からどうかして劍術を習つて立派な武士になりたい〳〵と云つてゐるのを、惣助が叱りつけて劍術を習はせない、あんな勝氣の奴であるから、何處かへ劍術を習ひに行つたのかも知れない、こんなことなら快よく習はして遣ればよかつた、然し今に便りがあるだろうと、頻りに待つてゐたが何處からも便りがない、さては何處かで死んだのかしらと惣助狂氣の如くになつて探しても少しも知れなかつた、その内に光陰は矢の如く、二年三年は夢の間に經ち、さう〳〵惣助夫婦も新八は死んだものと諦らめ、妹のお春を大切に育て、早やくもお春は十六の春を迎へるやうになると、鳶が鷹を生んだと

でも云はうか、母親に少しは似てゐないでもないが、色拔ける程、スンヤリとした丈恰好、鄙には珍らしい美くしき小娘となり、村の若い者等はかれてれと噂さして、落合村の小町娘ぢや〳〵と騒いでゐた、然るに此處に御領主丹波天田郡福知山、三萬五千石の城主稻葉淡路守殿は、至つて武張つたことを好まれ、今日しも儘かの近侍を引き連れて領内を狩り廻はられる、そのお供の中に、神刀流の劍道遠指南番岡本助太夫といふものがあつたが、年頃は三十二三才、以前は雲州邊の浪人、不圖した緣でこの稻葉家に仕へ、その腕前が勝れてゐるので、主君の御寵愛深く何時もお側離れずお供をしてゐたが、まだ獨身者で頻りに美女を物色してゐた、或る日のこと、主君のお供をして落合村の近邊でお鷹野を催ふされ、歸途路傍で小町娘のお春の美貌を見染めて、何んと云つても主君の御供中であるから、その日はその儘引ッ返したが、小娘のことが忘れられず、その翌日、この度主君より拜領の駿馬に打ち跨がり、ワ

ザ〳〵落合村まで出かけると、途中松原でバッタリお春に出會つた、岡「オヽッ……、コレ〳〵女、待て〳〵……」と、云ふより早やく助太夫はヒラリ馬をとび降りた、何んにも知らぬお春は、春「ハイ、何か御用でございますか……、」岡「イヤ、外でもないが、其女は昨日この邊に居つたであろう……」と、問はれ、お春は妙なことを聞く武士であると思つたが、春「ハイ、毎日この先きまでお稽古に參りますので……、」岡「フム……、さても鄙には珍らしい美しいものぢや、して其女は何處の娘ぢや……、」春「ハイ……、妾しはこの先きの惣助と云ふものゝ娘でございます……、」助「ホヽオ……、ではこの落合村の小町娘と云ふのはお前であつたか、どうぢや、予の邸へきてはくれまいか……」まつすゝ妙なことを云ふので、お春は立派な武士にも似合はず嫌な素振りをする男と思ひ、春「左樣なことは妾しの了見には參りかねまする、どうぞこれで御免……」と、立ち去らうとする、助太夫はお春

の袖を捕へ、岡「コラ〳〵娘、その樣に云ふものではない、予と一緒に參るがよい、親の方へは後から宜しなに云つて遣はすから……、」春「アレ……、御免なされて下されまし……」助太夫はお春が逃げ腰になつてゐる樣子をみて、亂暴にも面倒と思つたか、矢庭にお春の腕を引ッ攫み、無理矢理に連れて行かうとする、お春は驚ろいて、早「アレ……、〳〵……」金切聲をあげたが、丁度通り合はせの人もなく、鷲に狙はれた小雀同樣、その手から逃れることも出來ないので、頻りに聲を立てゝ救ひを求めた、助「コレ〳〵、そのやうに大きな聲を出すものではない、予の邸へ參らば可愛がつて遣はすから……」余り聲を立てるので、抱へるやうにして口に手を當て引ッ立てんとしたとき、突然何ものかも知れず、助太夫、頭をポカーリプン毆つたものがある、岡「痛いッ……」と、お春を捕へた手を放して頭を押へ、岡「誰れだ……、予の頭をプン毆つた奴は……」振り返つてみると、大兵肥滿の一人

薄汚ない手拭で頬被りしてボロ〳〵の着物を着た非人体の男がノッソリ突立つてゐる　岡「ヤア、乞食奴、貴様だな、予の頭をブン殴つた奴は……、勘弁ならぬ」と、腰なる太刀の柄に手をかけ、アワヤ斬りつけんとするを、その利腕ムンツと引つ摑んで頭輪倒さ二三間投げ出した、ムク〳〵ッと起き上つた岡本助太夫、岡「汝れッ、武士に向つて猪口牙千萬なッ……」と、痛さを堪へて腰の太刀抜く手もみせずズバーリ斬りつけたが、非人は二三度ヒラリ〳〵と体を躱し、ヤッと叫ぶと忽ち相手の太刀をポンと叩き落した、助太夫はアッと驚ろき、此奴とても敵はぬと思つたか、クルリ振り返つて一目散にドシ〳〵逃げ出した、非人は別に後を追はうともせず、非「ハッハ……意氣地のない奴ちや……、オイ女、何處も怪我はなかつたか……」側にブル〳〵震へてゐたお春は、春「ハイ……何處のお方か危ふいところを有難うでございました……、非「オヽそういふお前はもしやお春ぢやないか……」と、云はれて

お春はハッと二度吃驚り、春「エヽッ……、妾しをお春さいふお前さんは……、非「オヽッ……、矢ッ張りお春か、私しぢや〳〵、新八ぢや」と、云ひながら頬冠りをりと除けた、みれば見違へる艶色も黒くなり、立派な男になつたが、何處やらに以前の面容が殘つてゐるので、お春はハッと驚ろき春「オヽ兄さん……どうして此處へ……、今まで何處に……」と、懷かしそうに新八に抱きついた、新「イヤ、これにはいろ〳〵話しもあるてさだがまづ第一に尋ねたきは……、お父さんやお母さんは御無事か……、春「ハイ、御兩親とも御無事……、兄さんの行衛が知れなくなつて、お父さんは狂氣のやうになつて探してゐられましたぞへ、早やく歸つて喜こばしてあげて下さい、よふ無事で歸つてきて下さいました……、新「イヤ、それは何より、……、サア歸ろう……オヽそうぢや、今の武士が馬を捨てゝ逃げて行つたが、コリアいゝ馬だ、家へ引つ張つて歸らう……」と、助太夫がのつてきた

馬が道傍の草を食んでゐるのを引ッ張つて、妹お春と共に睦まじげに我が家を差して立ち歸る、お春は一足先きへ這入つて、兩親へこのことを話す、兩親も夢かとばかりに驚ろいて戸外へとび出してみると、紛ふ方なき新八が無事に歸つてきたので、惣ヤア新八か……、圓よふ無事で……、早やう〳〵」と、左右からとりついて家の中へ連れ込んだ。

○腕づくで取つて行け

新八は足かけ五年の間何處にどうしてゐたかといふと、彼の大高山の裏山で、怪しの老人、これは來風道人と云ふ仙人同樣の世捨人、新八が熱心に山に登つて劍術の獨り稽古をしてゐるのをみて、賴母しき少年と思ひ、術を以つてワザと山中をウロつかせ、手の内を試めしてみると、ナカ〳〵少年に似氣なき大力、遂には我が草庵へ連れて行き、五年の間自分の手許において、いろ

〳〵と仕込んだ、この老人は以前足利家に仕へてゐた安達權六郎安經といふ武藝者、三十余才の當時、仔細あつて主家を浪人なし、この山奥へきたつて頻りに武術の奥妙を極め、殊に水遁の名人で、盃一杯の水でその身を隱すといふ不思議な術を心得てゐたので、文武の道や忍術までを悉く新八に敎へ新八も永年の間、刻苦勉勵した甲斐あつて、最早や神變不可思議なる妙術を覺へ込み、如何なる强敵に出會つても負けをとらぬ腕前となり、厚く道人に恩義を謝して山を下り、兩親の身の上を案じて急ぎ立ち歸ろうと途中までくると一人の立派な武士が小娘を苛めてゐるので、とび込んで助けてみると、自分の妹お春であつたのでその儘連れ立つて立ち歸つてきたのである、その概略を語ると兩親や妹も大いに驚ろき、惣ヘエ……、ではあの大高山の仙人さんに劍術を習つてきたのか……、新「左樣……、もう斯うなつた以上はどんな人間に出會つても負けはとらぬ、これから國々を漫遊して、吃度名をあ

げ出世するから、お父さんもお母さんも安心して下さい……、惣「それは何よりのことだが、假りに御城下のお武士を打ち叩いたり何かしたら、その儘には済むまいぞよ……」と、云つてゐると俄かに表の方がザワ〳〵と騒がしくなつてきた、春「オヤ、何事でせう……」と、お春は表の方へ立ち出でたが青くなつてさんで這入り、春「お父さん〳〵、タヽ、大變……」先刻のお武士が先き立ちになつて、十七八人も武家が揃つて來られましたぞへ、惣「エッ……、お武家が……、それは大變……、新八、早やく裏から逃げろ〳〵……」新八は少しも驚ろかず、新「イヤ、お父さん、お母さん、又お春も決して心配することはない、私が仙人から習つた腕前を一寸みせて遣るぞ……、心配しなさんな〳〵……」と、話してゐると、△「コラ〳〵、百姓惣助は家にゐるか〳〵……、○「オイ、惣助は居らんか〳〵……」と、怒鳴り立てゝゐる、スカ〳〵出てきた新八、新「ヤイ、何處の奴等が知らぬが靜

かにしろ〳〵、惣助〳〵と云つて、惣助に何か用があるのだ……」と、出てみると、なる程妹お春のいふ通り、先刻の武士が先き立ちになつて、十七八人の若武士ワイ〳〵怒鳴り立てゝゐる、助太夫はそれとみるより、助「ヤア此奴〳〵、ヤイ非人、貴樣は先刻はよくも小癪な眞似をいたし居つたな、先刻の馬を返せ〳〵……、先刻の弱虫を馬を返せと云ふのか、ヨシ〳〵、返して遣らんこともないが、非人とは何を吐かす、乃公は非人でも何んでもない、仔細あつて少し遠方へ行つて居つたが、乃公はこの家の伜の新八といふものだ、假りにも武士たるものが小娘を引ッ捕へ、厭がるを無理に連れ行かんなどゝは不埒千萬、然しそれ相應に謝罪すれば返して遣らんこともない、土下座いたして謝罪しろ……、△「馬鹿奴ッ、先生に對して土下座しろとは何事ぞッ、貴樣こそ土下座して詫び、馬を返へせばよし、さもないときには手はみせぬぞッ、新「ハッハ……そう吐かせば馬を返すことはならん、慾

くば腕づくでとつて行け……、助「ヤア吐かしたりな土百姓、それッ方々……」と、呼はると、若武士連中は心得たりとグルリ新八を押ッとり圍み

○「不埒な土百姓奴ッ……」と、バラ〳〵と打つてかゝる、新ハッハ…………、水ッ葉共、土百姓の腕前みせて遣る、サア來いッ……」と、チョイ〳〵引ッ掴んで、前の小川の中へピシヤ〳〵ッと投げ込む、助「此奴ッ……と、助太夫始め七八人の奴は早やくもズラ〳〵と太刀拔き拂つて斬りつける、新八は面白がつて小口から投げ込む、流石の若武士等もとても敵はぬと思つたか、バラ〳〵意氣地なくも逃げ出した、新八は後追ひかけやうともせず、新どうです、お父さん、私しの腕前はまづての通り……」父惣助も大いに驚ろいて、新「フム、恐ろしう强くなつたものだ、二十人からのお武家を無刀で追ひ返すとは……、新「イヤ、二十人や三十人では少しも手應へせぬ、せめては百人位い押しかけてくれれば面白いのに……」と、大言吐いてゐると、近

所近邊の百姓共、△「ヤア新坊さん、お前ゐ何日歸つてきなすつた……、

○「豪う大きくならしやつたな……」と、だん〳〵寄つてくる、其處で新八はまづ湯に這入り、母親が頭髪を括ると見違へる程立派になり、新八は分捕つた馬を引き出して彼方此方にのり廻つてゐた、然るに此方岡本助太夫始め門弟等は新八のために散々な目に合ひ、這々の体で屋敷へ引きあげたが、何しろ百姓の小倅のために主君より拜領の馬を分捕られ、その上手痛き目に會はされ萬一このことが家中に知れては面目次第もない話し、それに助太夫は額に二つばかり瘤をつくつたので、その儘病氣と稱へて引き籠つた、然るに惡事千里とやら、門弟等に固く口止めをしておいたが、このことが間もなく家中一般の評判となり、遂に主君のお耳にまでも這入つた、淡路守殿は大いに御立腹、

淡「助太夫の恥辱はこれ稱業家の恥辱、多寡が知れたる百姓の小倅、早々召し捕つて參れ、予が手討ちにいたしてくれる」と、いふ御諚、これを承はつて

郡奉行堀田清左衛門は下役人吉田宇内に命じ、落合村の名主同道、惣助の倅新八連れ参るやうに申し付け、吉田宇内は直ちに落合村の名主宅へのり込んで委細を申し入れた、名主民左衛門は大いに驚ろいて、直ちに惣助の家へ出かけ、名「惣助どん、家にか、大變だ〳〵……」と、ズカ〳〵上り込んだ。

○首なんか斬られちや溜らん

丁度惣助の家では奥の室で、親子一同寄り合つて何やら話しをしてゐるところ名主が顔色變へて、大變だ〳〵と云ひながら這入つてきたので、惣「オヽ名主どんか、大變〳〵とはどんなことが起つたので……」、名「マア沈着いて聞かつしやい……」、新「ハツハ……」、名主さん、お前が慌はてゝゐるのぢやないか、一体何事が起つたのだ、名「サア外でもないが、お前は馬を盗んだそう

だが、眞實か……」、新「盗んだ……」、怪しからん、彼の馬は云々斯々……、その儘に捨てゝ行つたから、乃公が連れてきたのだ、名「それが大變なのだ、あの馬は御城下御指南番岡本助太夫さいふ先生の御乘馬、然かも近頃先生がお殿様から拜領なすつたお馬だそうだ、それを百姓の倅の分際で盗みとるとは怪しからぬ奴、早速名主同道本城まで來い、四の五と吐かせば名主は勿論、惣助夫婦に至るまで重き刑に處す、叱度左様心得るべしさ、今郡奉行からお役人がきたのぢや」、惣助夫婦は聞いて大いに驚ろき、惣「エッ……、ではこの新八を名主さんと一緒に……」、名「そうだ、お殿様が殊の外御立腹だそうだが、さんでもないてさになつてきたものぢや……」、新「ハッハ……何事かと思へばそんなてとか、何も大變〳〵と騒ぐ程のてともないではないか、惣でも新八、お前そのやうにいふが、御領主様は至つて氣荒らなお方、御城下へ行けば吃度打首にでもなるに違ひない……」、名「マア〳〵

私しからもよくお願ひ申してみるが、新坊、其方も一生懸命にお詫びするがよい、私しもお前を逃がしてやりたいが、もしお前を逃がせば村一同の離儀に關はること、然しマア村の重立つたものと相談してみるから、待たつしやい〳〵……」と、名主は慌ただしく又も出て行つた、後に夫婦さお春は大いに心配して、園一折角久し振りで歸つてきた、ヤレ嬉しいと思ふ甲斐もなく……春「妾しのために兄さんがお城下へ連れて行かれるとは……、惣困つたことになつたものぢや、相手が御指南番と云へばとても無事には納まるまい、

新　ハツハ……イヤ、お父さん、お母さん、妹、決して心配することはないお殿様の前へ連れて行かれると云へば宰はひ、あの指南番さやらの不埒を述べて屹度無事で歸つてくる、惣　イヤ〳〵、それは思ひもよらぬこと……、然し斯うなつてはとても行かずには濟むまいが、改めてお前にいふて聞かせることがある、マアよふ聞けよ」と、いひながら、父親惣助は戸棚の行李なと

り出し、その底を探つて、一振の短刀と守袋を持ち出し、惣　實は新八、お前は私し等夫婦の子ではない……」と、聞いて、新八はエヽッと聲をあげて驚ろいた、惣　サアその驚ろきは尤とも……思ひ出せば十六七年以前、用があつて隣村まで出かけ、丁度夕暮れ過ぎて四邊も薄暗くなつた頃、家路を差して村外れの庚申堂のところまでくると、アレー〳〵と女の悲鳴、今ではその通り老ひ込んでしまつたが、その時分には年も若し、村角力の一つもとつた私し、ハヽア又村の若い奴等が小娘を苛めてゐるのであらう、どりア助けてやろうと聲を知る邊に駈けつけてみると、パタ〳〵と彼方へ逃げ出す人影、後には年若の一人の女が倒れ、その側に赤兒が火のつくやうに泣いてゐる、これは驚ろいて、まづ赤兒を抱きあげると泣き止み、どうした……何處のお方と聞いて、みるが、女は肩口深く一刀浴せかけられ、もう殆んど虫の息、よく〳〵みると、この邊には見も慾れぬ立派な二十前後の色白、これは何んでも御

城下のお武家の奥様に違ひないと、いろ〳〵介抱したが、赤兒を頼むといふのであらう、手を合はして拜むやうな恰好したまゝ息は絶へ、私しも途方にくれたが、平生から夫婦の間に子がないので、神々様にお願ひ申してゐたが、それは神様が授けて下すつたのに違ひないと、抱いッ歸つて名主どんに話して女の死骸は村の仙光寺といふ寺へ葬むり、いろ〳〵と手がゝりを探したが少しも知れず、名主どんと一緒に守袋を開いてみると、木札に野々村新八郎と書いてあつたが、これは屹度お武家の胤に違ひないと、名も新八とつけ、我が子として育てゝきたが、間もなくこのお春が生れ、行末はこのことを本人に打ち明け、お春と夫婦にする考がへであつたが、不圖其方の行衛が知れず、此度久し振りで歸つてきたと思へばこの始末……」と、永々物語つた、ヂッと聞いて新八、新初めて知つた身の素性……それにつけても今日まで長の御養育、受けた御恩は決して忘れはいたしませぬ……」と、話してゐるところへ

名主民右衛門が歩つて參り、名「ア、どうしてもお聞れ入れのないのには閼はつてしまつた……、新イヤ〳〵、一同の方、決して御心配は入らぬ、サア名主さん、一緒に參りませう」と、云ふので、惣助夫婦、妹お春は、到底新八が生きて歸るまいと何れも涙を溢したが、新八は、いろ〳〵慰さめ、着物を着換へ、生母の片身といふ立派な匕首を帶の間へ挾み、名主民右衛門と共に城下を差して急いだ、早やくも福知山城の大手門前までくる、新サア名主さん、もう此處までくれば、もう歸つてもいゝ、民だが新坊よ、お役人の前へ出たら、なるだけ謝まつて打首にならないやうにせよ……、新イヤ、悪いてともしないのに、首なんか斬られて堪るかい……、民「ソ、それが不可ないのだ、長いものには巻かれろといふてもわろ、謝まるに若くはないのだ……」と、いつてゐる内に、先きに立つた新八、早やくも門へ這入ろうとした、門番は眺めて、門「コラ〳〵此處へ通ろ〳〵……、新ヤア門番か、御

苦勞〳〵、乃公は落合村の百姓、惣助の悴新八、名主と一緒に出かけてきたから、その旨取次いでくれ、門「コラッ……土百姓奴、門番とはどうだ、新「門番だから門番さいふに何んの差し支へがある、グズ〳〵吐かせば歸るばかりだ、サア名主さん、歸ろう〳〵、門「コラ〳〵待て〳〵、少時其處に扣へて居れ……」一人の奴は駈け出して門内へ這入つたが、少時すると二三人の若武士が出て參り、武「アイヤ、それなる兩人が、落合村の名主民右衛門、又惣助の悴新八と申すか」民右衛門はその場に平伏して、民「ハイ〳〵、お召しによりまして、新八を同道いたしましてございます……、武「ウム、神妙〳〵、その方はもう立ち歸つてよい、コレ者共、新八に縄をかけい……下「ハッ……神妙にせい……」と、二三人の下役人ヒシ〳〵と新八に縄をかけた、民「では新坊よ、なるだけ我儘をいはぬやう……お詫びをしなされよ……、新「ハッハ……名主さん、決して心配しなさるな、何も悪いことも

もないのに、首なんか斬られちや堪らん、直きに歸るから皆によろしくいつてくれ……」と、いひ捨てゝ、自分から先きに立つてズカ〳〵門内へ這入り込んだ。

○此の首が落ちると思ふか

城内大廣間には太守楢葉淡路守殿御出座、右左には家の老臣勇士始めスラリと居並んでゐる、やがて新八は多くの役人に警護せられて庭前へ通り、設けられたる荒莚の上へ引き据へられた、新八は少しも悪びれず悠然と座して、頭も低げずチロ〳〵四邊を見廻してゐる、側にゐる役人は、役「コラ新八、主君の御前なるぞ、低頭せい〳〵……、新「イヤ、捨てゝおけ〳〵、何奴が殿様か分らん……、役「コラッ……、何奴とは何を申すぞッ、扣へいッ……」主君淡路守殿はチーッと、新八の風貌を御覽になると、大兵肥満

天ッ晴れ凜々しき面構へ、百姓の子とは思はれざる風体、淡「ヤヨ新八さやらその方は不埒な奴なるぞ、如何なる仔細で、予が家來を手込めになし、剩つさへ馬を盗みしぞ……、新これれば怪しからん、馬を盗んだなどとは身に覺へなきことを存はるものかな、其處にゐる岡本といふ奴が、我が妹を苦しめ居つたから打ち懲らしてやつたところ、馬を捨てゝ逃げ歸つたれだ、馬も不憫と思ひ、我が家へ連れ歸つたのである、岡「默れッ、土百姓、誰れが貴樣の妹如きに目をかくべき、汝横合より不意にとび出し、突き落したのではないか

新「ハッハ……、何れにしても、武士たるものが土百姓のために、馬よりつき落さん、その馬を捨てゝ逃げ歸ることは笑止千萬……、岡「ウムッ……吐かしたりな土百姓、御前体をも憚からず……、淡「ウム、無禮極まる土百姓助太夫、手討ちにしてしまへッ……、岡「ハッ……畏まりました」と、岡本助太夫は大喜びで、太刀提さげてズカ〳〵庭前へ下り、岡「ヤイ土百姓、我

が主君の御前に於いて、よくも粗暴な言葉を遣ふよな、イテ拙者が手討ちにしてくれる、有難く思へッ……」と、太刀スラリ引き拔いて新八の眼前へ突き出した、新八は平氣の平左、新「ハッハ……、貴樣等如き細腕でこの首が落ちると思ふか、馬鹿者奴ッ」と、いふより早やく一間ばかりもとび退つて突立つた、岡「ヤア此奴ッ……」と、斬りつける、新八は縛られながらもヒラリ〳〵体を躱し、やがて助太夫の弱腰をポンと蹴あげると、助太夫は脆くもアッと叫んでコロ〳〵、□「ヤア狼藉者ッ……」と、その邊の小者共總立ちとなつてさし押へんとするが、指南番でさへ苦もなくやられる位いだから、四方八方にポン〳〵蹴飛ばされる、それとみて淡路守殿は大いに御立腹、淡ヤア土百姓の分際で、予が庭前を荒し居るか、それッ早やく召し捕つてしまへ……」と、いふ御命、若武士等は心得たりとバラ〳〵ッとび下つてさり押へやうとするが、ナカ〳〵手に合はない、その内に新八はバラ〳〵ッと逃げ出

した、△「それ逃がすな〳〵……」と、一同追ひかける、新八は身を躍らして泉水の中へ、ドブーンと、とび込んだ、×「ヤアとび込み居つたぞ〳〵、逃がすな〳〵」一同池の周圍をグルリ押ツとり圍んで水面を見詰めてゐると、

新「ヤア〳〵卑もなき我れを成敗せんとは心得ず、イデヤ召し捕れるものならば召し捕つてみろ」と、いふ聲が聞へると思ふと、小口からドブーン〳〵と投げ込んだ、みれば何時しか八重十文字にかけてあつた繩は解けてゐる、新八は彼方此方に暴れ廻つて、瞬たく間に三四十人苦もなく池の中へ役げ込んだ、それとみて豪氣活潑なる稲葉淡路守殿、淡「ヤア面倒ぢや、飛道具を以つて打ち取れ〳〵……」と、烈しき御命を下すと、鐵砲組は心得て、忽ち二三十挺の銃口揃へ、甲「ヤアどうだ、狼藉者、神妙に縛につけばよし、さもないときには飛道具を以つて容赦なく打ちさるぞ……」と、筒口を差し向けた、

このとき新八はカラ〳〵と打ち笑ひ、新「ハツハ……、僅か一人を召し捕ることも出來ず、飛道具を以つて打ちさらんとするか、ヨシツ、サア打つてみろッ……」と、大膽不敵にも方彼の方に當つて大手を擴げて突立つた、これをみて鐵砲組は大いに怒り、甲「それッ……」と、いふ一人の相圖に、二三十挺一時にドヤーンと打つて放した、硝煙濛々と四邊をとめ、咫尺を辨ぜずといふ暗さ、然したしかに手應へあつて狼藉者はバツタリ打つ倒れた樣子、少しく煙の晴れるを待つて近づいてみると、這は如何に、何時の間に早變りしたのか、狼藉者と思ひの外、側にあつた石燈籠に彈丸の跡が蜂の巣のやうにかすつて倒れてゐる、△「ヤアこりアどうちや……」と、一同ワンダリイ

主君淡路守殿はます〳〵御立腹、何處〳〵までも探し、詮議して召し捕れといふ御諚、人々は四方八方新八の行衛を探した、然るに此方新八は彼の道人より授かつた水遁の術で城内を荒して悠々と我が家へ立ち歸つた、家では名主もきてゐて一同新八の身の上を心配してゐたところ、ヒヨツコリ無事で歸つ

きたので大喜びで、惣ヤ、新八よふ無事で……、民「マア〳〵無事で歸つて來られて何よりちや……、新イヤ、實は云々斯々、罪もないのに首斬られやうとしたから、逃げてきたのだ……、民「エッ……逃げて……、それは大變……、新「ついてはお父さん、お母さん、私しも五年の永の年月風來道人から武術を習ひ、如何に領主とはいへ無法にも首刎ねられては堪らぬ、これから諸國を漫遊して立派な武士になりたいと思ふ、どうか三四年の間お暇が願ひたい……、惣なる程、それもよからう、逃げてきたといへば又お役人が、追ひかけてくるに違ひない、お前さへゐなければ何んとでもいひ譯をする……てではいふ通り漫遊とやらに行くもよからう、新「イヤ、有難い、それではこれから直ぐに……、惣ヤア待て〳〵……、何處へ行くにも金子なしでは行かれぬ、お園や、あの金子五十兩ばかり……、園「ハイ〳〵……、惣それについて新八、もうお巻も十六、豫ねてから夫婦にさせ

る積りで育てたのだから、お前が修業に出る前、祝言の盃だけはしてやつてくれるやうに……、丁度名主どんも居られることだから……」と、いはれて新八も、今更ら厭といふ譯にもいかず、先づ假りの盃をあげることゝなつた、お園、お春の喜びはこの上もなく、早速盃の用意いたし、仲人役は名主民右衛門、双方三々九度の盃をとり交し、惣助は引出物として、先祖から傳はる備前兼定の太刀を新八に與へ、名主民右衛門は、民ヤア芽出度い〳〵では新坊、一日も早やく無事に立ち歸つてくるやうに……」と、いつてゐるところへ、下男の杢助、慌はたゞしく這入つてきたり、杢「旦那樣大變だ〳〵馬にのつたお武家が七八十人役人を連れて、新坊さんを召し捕るんだと歩つてきましたぞ、民「エッ……役人が……それは大變〳〵……サア新八、早やく〳〵……、新「イヤ、逃げるにも及ばぬ、漫遊の首途、木ッ葉役人共を追ッ拂つてやる」と、父より貰つた金子を懐中なし、兼定の太刀引ッ摑んでメ

カ〜表口へ立ち出でた。

○ならば手柄に召し捕つて

郡奉行堀田源左衛門下役人七八十人を召し連れ、是非とも新八を召し捕らんとのり込みきたり、奉「ヤア〜惣助の倅新八、早々此處へ立ち出でゝ御縄頂戴いたせ、グズ〜吐かさば踏み込んで召し捕るがどうぢや〜」と、大音聲に呼はつてゐる、新「默れッ木ッ葉役人、土百姓とは何を吐かすぞ、天下の豪傑野々村新八郎だ、貴樣等如き木ッ葉役人に召し捕られるものでないサアならば手柄に召し捕つてみよ、奉「何を土百姓が……、それッ……」と、命を下すと、大勢の捕手の役人、下「御用だ、神妙にせいッ……」と、打つてかゝつた、新八忽ち傍にあつた長さ二間半もあろうといふ杉丸太押ッ取り、新「サア來いッ、ガラタタ共奴ッ……」と、ビユー〜横殴りに打つ

拂ふ、一薙きに三五人バッタ〜と打つ倒れ、下「ヤア、手剛いぞ〜……」と、弱音を吹き出す、奉行堀田源左衛門は大いにもどかしがり、奉「ヤア手に參らば鐵砲で打ちとれ〜……」と、下知を下すと、十五六人の鐵砲組は心得て、筒口を差向けドヽン〜と打ち放すと、新八は前なる小川へドブーンと身を躍らしてとび込んだ、下「ヤッ又とび込み居つたぞ、逃がすな〜……」巾二間余の小さな川、流れは堂々と急であるがさほど深くはない、兩岸に立つて召し捕ろうとすると早やその姿はみへない、甲「ハテナ……こんな淺いのに姿がみへんとは妙だ……、乙「何處へ逃げ居つたのだろう、たしかにとび込んだに違ひないが……」ウロ〜探してゐると、怪しやゴー〜異樣の響き、ハッと思ふと、流れは逆に流れて、ドーッと逆巻き立つて兩岸に溢れた、△ウワーッ……大水だ〜……」と、バラ〜逃げ出すと、這は如何に、四方八方からゴー〜と大水が押し寄せてくる、役人共はこれはと

驚ろいて、○ウワーッ……逃げろ〳〵……」何時しか新八の妙術にかゝり、大水の襲來と驚ろいてマゴ〳〵してゐる内に、奉行を始め一同土橋の上からバラ〳〵川の中へ落ち込み、淺く川の中でアプ〳〵ヂヤプ〳〵、役「ヤア大水だ〳〵、ク、苦しい〳〵……」と、藻掻き廻つてゐたが、大勢の笑ふ聲にハッと氣がつくと、一同小川の中でヂヤプ〳〵やつてゐるので、驚ろいてと び上ると、水は尙ほもドーッと押し寄せてくるので、アッと驚ろいてバラ〳〵逃げ出した、役「いよ〳〵彼れは魔法遣ひに違ひない……」と、何れも身を震はして恐れた、淡路守殿は聞かれ、淡「魔法遣ひであろうが、何ものであろうか、召し捕らねば我が威光に關はる、誰れか彼の土百姓を召し捕つてくるものはないか……」と、仰せになつたとき、老臣の一人稲葉外記、外「アイヤ、我が主君の仰せではございまするが、承はれば彼れは幼少の當時より怪力無双、その後四五年の間姿を晦まし、近頃漸やう立ち歸つて參つたとか

殊に仔細をとり調べると別に彼れを打首になさる程の罪もなく、されば彼の罪はお許しなされ、お家にお召し抱へに相なつては如何でございます……」と申しあげると、素より暗君ではない淡路守殿、淡「ウム、然らば何事もその方に任せる……」と仰せあつた、其處で外記は家中若武士の一人山本兵馬といふ者をして、立派な駕籠を持たせ、委細を含めて惣助の家へ遣はした山本兵馬は供人を連れて早やくも惣助方へくると、人々は驚ろいて、△「ヤア又來居つた〳〵……」と、騒ぎ立てる、兵馬は進み出で、兵「アイヤ新八どのさやら、拙者は稲葉家の臣山本兵馬と申すもの、御家老稲葉外記殿の御命によつて、貴公をお迎へに參つた、何卒この駕籠に召されて御家老のお屋敷までお出で下さる……」と、丁寧に頭を低げた、ヂロリ眺めた新八、新「ハッハ……急變つたその言葉、御家老稲葉外記と云へば、稲葉家切つての智者……、ハ、ア、分つた、僅かの飯米で我れなば召し抱へんとするか、イヤ、

それは暫らくお斷はり、今より四五年の間は自由自在のこの身体……、すゝ
そうぢや、我れの身代りに……」と、云ひながら助太夫の乘馬を連れきたり
新　如何に山本様さやら、折角のお迎ひなれど、この新八は少しく旅先きを急
ぐもの、四五年の後御縁あらば御家老様にもお目にかゝらん、この馬は百姓家
にあつて用なき馬、我れの身代りに連して歸つて下され……、兵　イヤ、そ
のやうに仰せられず、どうかこの駕籠で……、新　イヤ、折角のお言葉であ
るが、又重ねてお目にかゝろう……」と、その儘彼方を差して出かけた五六
日、無理に引き止められて滯在したが、遂に兩親始め、別れを惜しむお春に暫
時とすかして落合村を發足に及んだ、兵馬も仕方なく〳〵その馬を引いて悄々
立ち歸る、外記は聞いて、外「失策つた……、可惜ら若者をとり逃したか……
……」と、その後自身落合村に出かけて參り、名主や惣助に面會して新八
の行衛を聞いたが、何處を差して往つた……こさも更らに分らなかつた、此

方新八は兩親より三四年の暇を受けて武術修業に出で、まづ仙光寺に參り、和
尚に面會して、自分の生みの母の墓を尋ねると、寺の一偶、惣助の情けによつ
て小さな墓石が建てられ、それに俗名野々村之墓と記してある、豪氣の新八も
これが自分の生みの親の墓であるかと、少時涙を流して禮拜したが、何處の
何ものとも知れず、この上は漫遊を幸ひ、是非とも身の素性を探り、何んで
も母といふ人は人手にかゝつて果てたそうであるから、その仇を討ちたいと、
涙ながらに其處を立ち退き、別に何處といふ的もなく、何時しか歩つてきた
のが丹後宮津の城下、その當時宮津は七萬五千石京極丹後守高知公の居城
の地、ナカ〳〵繁華な町であつた、城下外れの三浦蓮仙助といふ宿屋へ泊り込
んだ、翌朝になると、亭主を呼んで、新　オイ、亭主、この城下に少し位い強
い奴がゐるか、亭　ヘエ……、強い奴だと申しまして……あの將棋か碁で
ございますか、それとも博奕でも……新八は修業に出るといつても早急の

ことであるし、父惣助より五十兩の金子は貰つたが、縞の着物に太刀一本落し差し、武士とも町人とも百姓とも見分けのつかざる風体、新「ハツハ……いろんなことを申す奴ぢや、乃公の聞くのは劍術の強い武士だ、亭「ヘエ〳〵左樣でございますか、劍術もナカ〳〵強いお方がございます、まづ豪傑では御家老の雲井隼人樣、御指南番では一刀流井上五郎左衛門樣、マアこのお二人が關で……、新「フム、ヨシ〳〵、では一つのり込んで打つ叩いてやらうか……、亭「ヘエ……、何誰がでございます……、新「妙なことをいふな乃公が打つ叩いてやるのだ……、亭「ヘエ……、貴君が……、新「コラツ……亭主、乃公はこの樣な風体をしてゐるが、武術の大先生だぞ、亭「ヘエ……それではお武家樣で……、新「そうだ、乃公は一寸試合をしてきてやる」と、新八大威張りで宿を立ち出でた。

○どうだ一勝負遣らんか

往來の人に聞きながら歩つてきたのが、京極家指南番井上五郎左衛門の敷屋前この井上五郎左衛門といふのは一刀流の達人で、且つナカ〳〵の豪傑、五百石を頂戴して、家には道場を開いて、家中の諸士に指南してゐる、今日しも稽古日とみへて、奥の方からエイヤツポン〳〵と木太刀の音や氣合ひの聲が聞へる

新「ホヽヲ……やり居るな、一つとび込んで腕前を試めてやれ……」と、ズカ〳〵門を這入つて玄關正面に突立ち、新「頼もう〳〵……」と、大聲で怒鳴ると、門「ドーレ……」と、答へて門弟らしき一人出て參り、門「それは何處からおみへ……」と、ヒヨツとみると、妙な風体の年若の男だ、

新「拙者は當地通行の武者修業者だが、道場の主五郎左衛門が居つたら、一本手合はせ！ろと取り次げ……」新八は頭から大きく吹くと、取り次ぎは大

いに怒り、門「ヤイ先生を捕へて呼びつけにするとはどうだ……、新「グズ〳〵いはずと取り次げ、門「第一名を名乗れ〳〵……、新「五月蠅い奴だ、貴様は取り次ぎ、奥へ這入つていへばよいのだ……」と、猿臂を延して胸倉引ッ掴んで、ヤッと一聲奥の方へドスーンと投げ込むと、門「ヒェッ……」と、叫んでコロ〳〵、驚ろいと奥の方へ駈け込んだ、主人五郎左衛門は丁度今稽古を終つて一息吐いてゐるところ、五「どうした、鈴木……、門「ハイ、途方もない亂暴な奴が歩つて参りました、五「何んといふ奴だ……、門「ッイ、それはまだ聞きません……、五「白痴者奴が……名前を聞かずに取り次ぐ奴があるか……、取、それがその……恐ろしい權幕の強い奴で……、五「失張り武術修業者であろう……、門「ハイ、年若の妙な風をした奴で……、五「免に角此處へ通してみろ……、門「ハイ、畏こまりました……」と、起ち上ると、新「イヤ、くるには及ばん……、門「オヤ氣

の早やい奴だな……、新「グズ〳〵してゐるから拙者の方から歩つてきたのだ、ヤアこれは〳〵……」ピョイと頭を一つ低げて、新「貴公が五郎左衛門……拙者は落合村の新八といふ男だが、一本手合はせをしやうと思つて歩つてきた……ホヽオ……、大分居るな……」チロリ四方を見廻してゐる、素より豪氣の井上五郎左衛門も呆ッ氣にとられた、みれば縞の着物に太刀一本落し差し、言葉態度は頗ぶる横柄なるに大いにムッとして、五「なんだ、貴様は……、新「人間だ……、五「人間は分つてゐるが、武士か町人か土百姓か……、新「その邊は鑑定に任しておくが、どうだ、一つ勝負をやらんか、五「ウム、勝負を望むとあらば、素性も分らぬ奴なれど手合はせいたして遣はす、然し道場の規則として、まづ門弟二三人から……、新「ヨシ〳〵、誰れからでも搆はん……」と、いつてゐると、玄關の方に當つて、×「頼もう……」と、いふ大聲、早速門弟が立ち出でたが、荒たゞしくどんで這入り

門「先生、大變でございます、きました〳〵……、五「何がきたのだ……
新「あの噂さの渡邊大角齋が太い鐵棒を杖に突いて、當場の主人に一本の勝負が願ひたいと……、五「ウム、渡邊大角齋といふのがきたか、構はん通せ〳〵……、門「ハッ……」と、答へて門弟が立ち出てたが、やかてドスン〳〵足音荒く現はれ出でしは、雲突くばかりの大兵の武士、新八と、同じく頭髪は總髪で、黑の紋服に野袴穿き、鐵棒小脇に引ッ抱へ、色飽くまで黑く、虎髯喰ひ反らし、飽くまで不敵な面魂、肩怒らしてノッシ〳〵と打ち通り渡「ヤア貴殿が當場の御主人でござるか、拙者は九州の浪人渡邊大角齋といふ者、是非一本勝負が願ひたい……、五「オ、貴公が噂さに高き渡邊大角齋先生でござったか、如何にも未熟ながら相手申さん……」何んといつても渡邊大角齋といへば名代の道場破り、九州路から丹後路までまだ一回も負けたことつたこともないといふ豪の者であるから、新八などは其處退けにして話

しをしてゐる、新「コラ〳〵五郎左衛門、拙者が先手だ、オイ水膨れ、貴樣は暫暗其方に控へて居れ……」これを聞いて渡邊大角齋怒つたの怒らないのおやない、渡「なんだ……貴樣は……、當家の下郎か……、新「イヤ、そうではない、落合村の新八といふものだ、乃公が先きへ勝負しにきたのだから、貴樣は其方で待つてゐろといふのだ……、渡「ナニ、勝負しに……、下郎奴、控へて居れ、貴樣等の小童の出るところぢやない、公乃が井上氏と勝負するのだ、退け〳〵、サア井上氏、一本參ろう……、新「コラッ水膨れ、後からきて先きへやるといふ法があるか、乃公が五郎左衛門を叩き伏せて、暇があつたら貴樣を捻つてやるから待つて居れ……、渡「ヤア此奴、水膨れと何を吐かすぞ……汝れは察するところ氣狂ひはだな、グズ〳〵吐かすと、この二十五貫の鐵棒がお見舞ひ申すぞ……、五「左樣〳〵、此奴どうやら禮義作法も知らぬ狂人らしき奴ッ……、新「狂人でも何んでも、今に一同平身低

頭に及ばねばならんぞ、グズ〳〵いふことはない、早やく相手を出せ〳〵」と いつてゐるときに、又もや玄關の方に當つて、□「お頼み申す……」と、大音聲、取次ぎは驚ろいた、取「オヤッ……又きたな、どうも今日はどれもてれも恐ろしく強そうな連中ばかりだ……」と、獨言いひながら、玄關にきてみると、大兵肥滿、みわげる樣な……、然し餘程尾羽打ち枯してゐるさみへて、ボロ〳〵の涙人風体の武士、○「エヽ某しは天下の涙人、山田眞龍軒と申すもの、井上先生と一本立ち合ひが願ひたい……」取り次ぎは驚ろいて奥へ駈け込む、井上先生は何か用があつて自分の部屋へ這入つてゐたところ、取「先生、大變〳〵、お逃げなさい〳〵、グズ〳〵してゐると叩き殺されますぞ……、五「何を馬鹿なッ、どうしたといふのだ……、取「でも、先生、此度はあの鎖鎌の名人山田眞龍軒が歩つてきましたぞ、渡邊大角齋に山田眞龍軒の二人ではとても勝ちつてはありません……、五「ナニ

闘はん、道場へ通せ〳〵……、取「よろしうございますか……、五「ヨシ〳〵……、取「では直ぐに……」門弟玄關へきてみるとゐない、門「オヤッ……、何處へ往つたのだろう……」道場の方でガヤ〳〵いふ聲が聞へるのできてみると、もう眞龍軒はズカ〳〵上り込み、三人は頬りに爭そつてゐる、○「ヤア小童に涙人は後廻し、サア方々道場の規則とあれば拙者がお相手いたす……、新「ヤイ〳〵水膨れ、貴樣が先きへやるといふことであるからでは乃公が貴樣を相手にしてやるから、サア來い……、○「オヤッ……、此奴、まだ水膨れなどゝ申すか、ヨシッ、それまでに吐かせば、貴樣から先きへ叩き潰してやるぞ、「山「ウン〳〵、やれ〳〵」眞龍軒は頬りに嗾しかけてゐる、渡「コラッ……涙人、ウシ〳〵とはどうだ、マゴ〳〵するぞ打つ潰すぞッ」渡邊大角齋はブン〳〵怒つてゐる、涙「オイ、膨れ、相手は此方だ、サア來いッ……」と、横ッ面をピシヤーリブン……毆つた。

○南無三も四も五もあるか

それでなくつても怒つてゐる渡邊大角齋、渡「ヤア小童奴、武士たるものゝ横面を殴るとはどうだ、汝ッ、ての二十五貫の鐵棒喰つて往生せいッ……」と、バラリ被つてビユーッと振り下しに、門弟一同は大變なことが始まつた、定めしあの若者は渡邊大角齋のために打つ潰されてしもうであらうと、ヒヤ〳〵しながらみてゐる、何んといつても大高山で五年の月日の間武術を練磨した新八、その身輕なことは驚ろくばかり、バッと一間ばかりとび下つておちてゐた一本の木太刀を押ッさり、新「サア來い、水脈れッ……」、渡「此奴ッ……まだ水脈れと吐かすか、汝ッ……」と、ビユー〳〵振り下す、如何な新八でも二十五貫の鐵棒を眞面に受けては堪らない、ヒラリ〳〵飛鳥の如く身を躱す、大「此奴ッ、よくビヨイ〳〵とび廻る奴ぢや……」と、大角

齋フー〳〵いひながら追ひ廻す、大角齋も二十回近くも空を打たせられては堪らない、少しくその先きも鈍つた樣子、もうよからうと、大角齋急つてヤッと打ち下してくる鐵棒をパンと拂ひ退け、ヒシーリ利腕をプン殴ると、アッと叫んでガラリ鐵棒とり落すところを、ヤッと一聲諸共、ヒシーリ肩口一本打ち込んだ、大角齋はドッと尻餅つき、渡「ヤ、参つた〳〵……」、新「口程にもない弱い奴だ、サアお代り〳〵、オイ、ポロ〳〵出て來い〳〵……」、山「ナニホロ〳〵……、無禮なことを吐かすな、天下の傑傑山田眞龍軒を知らか、新「イヤ、少しも知らん、今が聞き始めだ、グズ〳〵いはずと早やく用意しろ後が支へろ〳〵……」新八鼻で扱らつてゐる、眞軒龍眞ッ赤になつて怒り出し、眞「ヤア小童奴、そんな水膨れとは少し相手が違ふぞ……」、新「能書をいふな、餘り能書をいふ奴に強い奴はない、そうだうも、貴樣の面をみても餘り感心せんわい……」、眞「汝れ、よく〳〵武士たる者を嘲弄いたすよな、許

しはおけん……、然らば井上氏、少時道場拝借……」と、一礼して、手早やく支度に及び、後鉢巻き玉襷き、背に負ふたる袋の中から鎖鎌を取り出した、一丈二尺分銅つきの鎖鎌、眞サア來いッ……」と、リュウ〳〵と振り廻した、新八もかゝる道具に出會ふのは始めだ、此方、山田眞龍軒といへば天下名代の鎖鎌の名人、壯年の頃は劍道を學んだが、後に鎖鎌の一手を編み出し、それを以つて終生漫遊して世を終つたといふ人物、尤とも後年荒木又右衛門のために伊賀の上野で打ちとられたが、劍道の神さまでいはれた荒木又右衛門でも、この眞龍軒のために稍さもすれば負けをとるところ、生涯の内にこれ程の豪敵には出會つたことがないといふ程の名人、新八は只だ一本の木太刀を以つて立ち向つた、相手は分銅でこんでくるかと思へば鎌がこんでくる油斷も隙もあつたものではない、此方もさるもの、少しの油斷もない、エイヤ……と喚き叫び、眞龍軒は分銅をとばし鎌を投げる、その業

早やいてと流石は一流の名人、新八は大事をとつてパン〳〵と引ッ拂ひ、眞龍軒は踏み込み〳〵千變萬化の秘術を盡して詰め寄る、もしその分銅で頭をやられたが最後、微塵に碎けてこんでしもう、又鎌が首を引つかけたら、首は切れてとぶのだから堪らない、分銅がピューッとくるかと思へば鎌がくる、鎌がくろかと思へば分銅がくる、稍暫時賀けず劣らず戰かつてゐたが、新八は、だん〳〵と道場の隅の方へ押しつけられる、眞龍軒心の中にもう參つたといひそうなものだと思つたが、新八ナカ〳〵參つたとはいはない、新「サアボロ〳〵シッカリ來い……、眞「オヤッ……此奴、まだ戯言をいひ居るかッ、ヨシッ、打つ潰してやるから覺悟せいッ……」と、狙ひを定めて分銅をヒューッと振りくるを、パッと身を沈めた、分銅は空を打つたから堪らない、横手にあつた柱にキリ〳〵ッと巻きついた、眞「南無三失策つた……」と、分銅を解かうとする間に、新「南無三も四も五もあるかッ……」と、パラリ潜み込

んでヒシーリ肩先深く叩きつけた、眞龍軒アッと叫んで打つ倒れる、新「どうだ、まだかッ……、眞「マイ參つた……、新「サア退け〳〵、お代り〳〵……」と、いふと、△「オヽ若僧、やり居るな、井上の代りに乃公が相手する、新「誰れでも構はん、いくらでもさんで來い、貴樣は得物はなんだ、槍か鐵棒か鐵砲か、△「ヤア此奴、大言吐き居るか、乃公を誰れかと思ふ、京極家に於いてさるものありと知られた雲井隼人なるぞ、打ち物勝負は面倒だ、組討ちで來いッ……」と、パラリ着てゐる着物を脱いだ、新「オヽ雲井でも赤井でも何んでも構はん、貴樣も大分氷膨れ組みだ、サアシッカリ來いッ……と、パラリ大手を擴げた、雲井隼人といへば京極家の老臣で、且つ怪力無双、天下名代の豪傑、至つて武術が好き、喂さへあると井上の道場へ遊びにきて若武士等を相手に武術の稽古するが、先生の井上五郎左衛門も及ばない、今しも新八の振舞ひをみて、隼「ウム、小癪な小童奴ッ、捻り潰してくれるぞッ」と

荒獅子の如き勢ひを以つてドッと摑みかゝつた、得たりや應と新八カッキと引つ組み、ドスン〳〵力足踏み鳴らして揉み合つたが、ナカ〳〵勝負がつかない、その内に双方ゴロッと諸ッ倒しになつてゴロ〳〵、道場の戸を打ち倒して庭前へドッと轉がり出た、それでも尚ほ止めない、その内にどうした機みか二人ともムク〳〵ッと立ち上つたが、隼人はヤッウーム……と唸ると、新八を目よりも高く差しあげた、隼「サアどうだ小童降參したか、グズ〳〵吐かせばての泉水の中へ投り込むぞ、新「ハッハ……離れが降參するかッ、貴樣等に泉水の中へ投り込まれるやうな老禄はせんぞ、腹ッ胴を氣をつけろ〳〵、隼「ナニ、胴腹……巫山戯たことを吐かすな、乃公胴腹は南蠻鐵の一枚胴だ……ヤッ……」と、叫ぶと、泉水の中へドブーン……、投げると同時に隼人は一歩退ぞいた、門弟共、□「ヤア、流石は雲井先生、豪い〳〵……と、稱めそやす、隼「アッハ……何もあの位いの奴に勝つたからとて稱める

程の事もない……、五「だが……彼奴はどういたしたろう……、隼「フム、目でも眩して斃去ったかも知れぬ……、五「然し確かに泉水の中へ落ち込んだやうですが、姿がみへんではございませんか……、隼「フム……それいへば妙ちやな……、五「オイ一同い方々探してみろ〳〵……、△「ハッ……」と、答へて門弟共は、庭前へ下りて彼方此方探し始めた。

○漫遊してのホヤ〳〵だ

泉水といつても廣くはない、三間に五間位い、眞ン中に土橋架つて、池の中に岩が二つ三つある、雨降り揚句で水が汚つてゐる、何んでも雲井先生に投げ込まれたのだから、その儘死んでしまつたに違ひあるまいと中には長い竹竿を以つてきて掻き廻してゐるが分らない、すると何處よりともなく、新「オイ〳〵心配せんでもいゝ、乃公は此處にゐる〳〵……」と、いふ聲が聞へる、

一同ハッと驚ろいて見廻すがそれらしいものはみへない、隼「ハテナ……、妙な奴ぢやわい……、新「此處だ〳〵、貴樣等の目にはみへんか、情けない奴等ぢや……、五「オヤッ……どうやら道場の中ではないか……」門弟等も道場へ這入つて探したが少しも知れない、隼「フム……、さては貴樣は忍術遣ひよな……、新「如何にも……マアそんなものだ……、隼「一体、何處にゐるのだ……、新「此處だ〳〵……」と、いふ聲は道場の上の方、一同天井をみあげると、新八の姿はボーッと薄く天井にみへた、△「ヤア何時の間にあんなところに……」と、呆れてゐる内に、だん〳〵にその姿は濃く、やがて身輕にヒラリとび下り、新「サア今一本……、隼「ハッハ……、珍らしき身輕な男……落合村の新八といふが、定めし少しは天下に名ある男であろう、本名を名乗れ〳〵……、新「本名は野々村新八郎……、隼「して何處の藩中なるぞ、野々村新八郎……乃公も永らく諸國を漫遊した

が、そんな名は聞いたことがない……、新「丹波の國落合村の惣助といふもの、伜、漫遊に出たてのホヤ〳〵だ……、五「然し山田眞龍軒や渡邊大角齋先生を打ち込むとは驚ろき入つた腕前……オヤ、兩人は如何いたした、×「ハツ……、何時の間にか……立ち歸つたやうでございます、隼「ナニ、立ち歸つたか、ハツハ……若者に負けをとつて面目なさに立ち歸つたか、デモ意氣地のない奴ぢや……、五「イヤ得難きの勇士……、奥の室で一杯酌むといたさん、鈴木、用意せい……、鈴「ハツ……」と、答へて門弟の一人立ち上つた、それより井上五郎左衞門は雲井隼人、野々村新八郎の兩人を奥の間に案内して酒肴の饗應をする、此處で改めて三人は酒酌み交した何んといつても雲井隼人は京極家の老臣、まだ三十前後の壯年、武勇はいふまでもなく智略に秀いでた勇士、どうかして野々村新八郎を京極家に仕官させやうと思ひ、隼「聞けばまだ主人を持たぬ樣子ぢやが、どうぢや、當京極家に仕

官する氣はないか、新「イヤ、仕官はお斷はりする、元來の武骨者、僅かの石米、膝を屈するのも本意でない、殊に是非仇を討たねばならぬ身……、隼「して仇さいふは兩親でも討たれたのであるか……、新「さればでござる、我が一二才の當時、生みの母親は人手にかゝつてお果てしところを、今の親のために助けられ、何處の何ものとも分らず、守袋に木札が這入つてゐたので、野々村新八郎さいふ名だけ分つてゐるので……、是非とも身の素性を知りたいと思つて、一つは武術修業方々漫遊に出たのでござる」と、身の上の概略を物語つた、隼「フム……それは是非なきこと、では強つてとは申さぬが、もしや身の素性が分り、何處か仕官でもいたすときは、是非この京極家に仕官してくれまいか、拙者が如何程にも推擧いたすから……、新「そのときには是非とも願ひ申す」と、倚はも頼りに酒酌み交し、雲井、井上の兩人は是非暫時は當地に滯在するやうにと勸めたが、先きを急ぐと無理に暇を

告げ、一ト先づ三浦屋へ立ち歸り、その翌一日はその邊見物して宮津城下を立ち退き、若州路差して出かけた、泊りを重ねて何時しか丹後若狭丹波の國境ひに聳ゆる三國山の麓まで歩つてきた、朝よりチラ〳〵雪が降つてゐたが、酒の勢ひでブラ〳〵登り始めた、何處をどう道を踏み違へたか、行けども〳〵同じやうな谷や山ばかり、永年山中で暮らした新八であるが、何時しか酒の醉はさめ、腹の空つてきたのには弱つた、新これは困つた……、大分四方も白くなつたが、何處か人家でもないかしら……」と、暫時岩陰げに休み、四邊の樣子を眺めてゐた、折柄突然後ろの上の上からガラ〳〵ッといふ恐ろしい物音、みると大きな〳〵石がゴロ〳〵ッと落ちてきたので、新八はパッとさび退き、上を見あげる途端に、忽然と現はれた四五尺もあらうといふ、滿面紅を塗つたやうで、全身の毛は長く眞白、兩眼の光烱々として、白い齒を剝き出した一疋の狒々、頻りにキイ〳〵云ひながら新八目がけてとびかゝらんと

する勢ひ、新「オ、出居つたな、猪口牙な奴ッ……」と、腰なる本刀の柄に手をかけ佶度なると、件の狒々はその邊に落ちてゐる枯枝或ひは小石の類を拾つて新八目がけてバラ〳〵投げつけ、隙あらばとびかゝらんとする、新八拔き打ちにメバーリ〳〵と斬りつけたが、どうしたものが、刀がツル〳〵と辷つてどうしても狒々の身体へ立たない、前に現はれ後に隱れ、飛鳥の如く隙なくとびかゝる、新八は足許不如意の故かアッといふて後ろへドーンと打つ倒れた、狒々はして遣つたりと、ドッとばつかりてくるを新八倒れながら下から横に狒つた一刀、狒々の脾腹を十分に切つた、脊中の方は毛が延びてゐるから滅多に切れないが、腹の方はそうはいかない、美事下腹を切つた、キャッと叫んで打つ倒れるところを、ムックリ起き上つた新八、咽喉の邊りブスーリ突き刺し、全身血塗れになつたがホッと一息吐いたところへ、側の小笹熊笹をガサ〳〵と押し分け、又もヌッと現はれ出でし大の狒々、これには流石の新八もハッと思

つた、一疋でさへ持て余したところへ又も出られて堪つたものではない、然し豪氣の新八、太刀押つとり直して向ふをみると、這は如何に狒々にはあらず、人間が狒々の皮を頭から被つてゐるのであつた、忽ち皮をとつて、△「オヽお武家、天晴れなるお腕前、實に感服いたしました、危ふいやうなら手前がお手傳ひ申そうと心得たが、イヤ美事な働らき恐れ入つた、天晴れ〳〵……」と、頻りに稱める、新「フム、して貴公は何人だ……、△「されば、この山中に住居する山獵師の久平と申します……、新「アヽ左樣か……、久この山中に何處からきたか北牡の狒々がゐて、どうも害してならない、一疋は私しが退治たが、一疋はどうしても退治することが出來ず、みられる通り一疋の狒々の皮を被て、山の中を立ち廻つて居ります、只今貴君が狒々に出合つたのをみて、危ないやうならお救ひ申そうと心得たが、とう〳〵一刀でお刺し止めになつた腕前、イヤもう感服いたしましたサアこの雪、比處は山中、マア〳〵

手前方へお出でなされませ、今宵は泊つて明日里へ御案内いたしませう、新「イヤそれは千萬忝じけない、ちみらるゝ通り血塗れ姿、これはどうすることも出來ない、然らば貴殿方へ案内たして貰ひたい……、久「エヽ承知いたしました、その代りどうかこの狒々は私しが頂きたい……、新「ウム、別に拙者は要用はない……、久「有難うございます……」久平といふ獵師はスラリ繩をかけ、持つてきた手槍を通して肩にかけ、先きへ立つて案内した。

○拙者を御存じかな

かれこれ七八丁もくると、谷川があつて丸太橋を渡ると向ふに些細な草庵がある、久「靜江や、今戻つたぞ……」と、いふと、靜「オヽお戻りなされましたか」と、立ち出でましたのは十五六才にもなろうといふ色白の美くしい小娘身には襤褸を纏ふてゐるが、ナカ〳〵言葉使ひも卑しからん樣子、新八はハテ

どうも合点のいかん、只だの獵師とも思へんと四邊へ心を配つてゐると、久「靜江、旅のお方をお連れ申した、足洗をとつて進せろ……、靜「ハイ……サア貴君、お洗足をこれへ持つて參りました、新「それは千萬忝じけない……」新八は足を洗つて上へあがる、久「サアサ客人、爐端へきなすつて……別に氣のおけるものはない、安心して……、血の塗いた衣類は只今娘に洗はせるから……、新「イヤ、何分ともにお賴み申す……」と、出してくれた着物を借り受け、自分の着てゐる血の塗いた衣類を脱ぎ、娘はそれを持つて次間へ立つて往く、爐へドン〳〵焚火をなし、久「サア客人、此處へきてユックリ体まつしやい、只今何か食べるものをこしらへて進せるから……」新八四邊を見廻すと、長押には槍薙刀、弓などの武器がかけてある、久作といふのは年頃五十前後、色の淺黑いキリ〳〵ッとした品のある面容、いよ〳〵これは只者でないと心得、新「さて主人、いろ〳〵御厄介になつた、拙者

は丹波落合村の住人野々村新八郎と申すものでござるか、貴公といひお娘御といひ、定めし由緒ある方と思ふが……」と、いふと、久作は、久「エ、ッ……」と、聲をあげて新八の顏をシゲ〳〵見詰めた、新「オ、オ……、拙者を御存じかな……、久「イヤ、お尋ねに預かつて恐れ入りまする、我れ等はお察しの通り、少しく由緒あるもの、時世に遲れ、當時では山獵師となつて暮して居りますが、野々村新八郎……、もしや貴君の父御は大阪方七手組の野々村伊豫守とは仰せられずや、新「エッ……拙者の父を大阪七手組の人々……、久「オ、何處やら御主人に酷似たお方と思つて居つたが、もしや貴君は若樣ではでざいませんか、新「エッ……、若樣……、マア小時、して一体貴公は何人でござるか……、久「何を隱さん、拙者こそは大阪七手組の一人野々村伊豫守の臣和泉大八郎と申すもの、戰場の死損ない、主君の御命によつてその新八郎樣といふお方の行衞を探して居りましたが、その行衞は少しも

分らず、且つ豊臣家の詮議殊に烈しく、詮方なくもこの山に登つて浮世をさけ二人の子供を相手に世を送つて居りまするが、野々村新八郎と仰しやるからは若様に相違でございません、よふ御無事で……、して母君は……、新イヤ、マア我れ等身の上から聞いて貰ひたい。我れはさるものではない、丹波洛合村の百姓惣助なるものに、今日まで養はれし者なるが、話しを聞けば、我が生母といふのは落合村の村外れ、庚申堂の側で何者にか殺され、拙者が赤兒でワア〳〵泣いてゐたところを、その惣助なるものが家に連れ帰り、母の死骸は名主及び惣助の情けによつて村の仙光寺さふい寺へ葬むつたろ由なるが、何ものゝ子とも知れず、只だ守袋の中に野々村新八郎と木札に記してあつたのと、母が最後まで持つてゐたさいふこの匕首を印しに、我が身の素性を尋ねんで斯く廻國してゐるのであるが、我れが大阪方七手組の大將レ伜であるとは、如何なる証據を以つていはれるか、和一失禮ながらその匕首を……」と、いつて、大八郎は匕首をよく〳〵みてゐたが、和オ、これそまさしく、我が主君が始終持つて居られた相州眞宗の業物、且つこの柄に丸に四ツ目菱のついたるところは間違ひなく、貴君は若様に相違なし、然らば御母君は人手にかゝつてお果てなされしか……、御幼少にて何事も御存じなからん、まづ一通りお話し申し上げん……」此處に、大阪城内には太閤秀吉公在世當時より、親衛部隊を七手に分け、七將を撰び、七手組の大將といつし、各一萬石を領し、一方の大將があつた、速水甲斐守を筆頭に、眞野豊後守、渡邊内藏助野々村伊豫守、中島式部少輔、青木民部少輔、堀田圖書頭の七人、中に一二の移動はあつたが、何れも劣らぬ豪將、いよ〳〵關東德川方に和議破れ、眞田、後藤長曾我部の諸將入城、關東方相手に戰がふことゝなり、七將は何れも一方の七將を承はり、野々村伊豫守は、最初二千の兵を率いて博勞ケ淵を固めることゝなつた、この伊豫守といふのは、七將中でも思慮に長じた人物

大阪方の評定マチ〳〵、兎角淀君大野一派の威勢烈しく、豪傑連中の計略は小しも用いられず、眞田後藤等の諸將は遠く出でゝ戰かふに若かずと出張したが、遂に大阪城に櫛籠つて關東勢を防ぐことゝなり、心ある人々は實に豊臣家の安危について心遣つた、伊豫守には正妻の間に新太郎といつて十八才の子息があつたが、自分の臣で光藤源吾といふものゝ娘光枝が、兩親に早やく死別し、野々村に暫元奉公にあがつてゐたが、頗ぶるの美人であつたところから、伊豫守は深くこれを愛寵なし、光枝は慶長十八年五月、即ち戰爭の一年前に伊豫守の胤を宿して一男を生んだ、これを新八郎と名づけて、寵愛をしてゐたが、いよ〳〵戰爭となり、新太郎は共々出陣することゝなつたが、何んといつても新八郎はまだ生れたばかり、其處で伊豫守は光枝に向ひ、汝はこれより何處かへ身を落し、我れ等不運にして討死したと聞かば、これなる新八郎を成長させ、切めては幾分なりと野々村の家を立てさせてくれるやうにと、金

子三百兩に一口の懐劍を與へた、光枝は別に身を寄せるところもなく、別れを惜んだが、何んといつても女の身、戰場の供もならず、丹後宮津在に自分の叔父が鄕士となつてゐるので、平生召し使ふ傳助といふ仲間一人を召し連れ、大阪表を出立した、その後間もなく奥方は病死、伊豫守は一子新太郎始め一族郎黨を率いて定めの部署につき、關東勢相手によく戰かひ、その勇名を轟ろかせ、一旦和議なつたが又も再たび開戰となり、一同よく戰かつたが、最早や時運の到來してゐたものか、大阪方の名ある諸將はゾク〳〵討死なし、一子新太郎も早や討死を遂げ、臣下の内でも殘るは漸やう三百ソコ〳〵、伊豫守もいよ〳〵討死と決心を定め、家の郎黨和泉大八郎が招き、最早や斯くなつては大阪方の落城も眼前にあり、死するこの身は何も思ひ殘すこともないが、只だ幼にかゝるは彼の新八郎のこと、其方はこれより丹後宮津に趣むき、新八郎を守り育て、幾分なりと家名を立てさせてくれよと仰せになつた、家臣中でも

豪の者と云はれた和泉ノ八郎、どうかその役目は余の者に命じ、私しは御主君と生死を共にしたいと願ひ出でたが許されず、詮方なくもその場を退ぞき、一旦尼ケ崎に隱しある妻子の許へ行き、姿を變へて丹後宮津の城下へ趣むき、郷士山上仙右衛門といふ人を尋ねたが、それさへ少しも知れず、その内に大阪方は散々の敗北、殘黨の詮議殊に嚴しく、詮方なくもこの山に這入り込み、山獵師となりその日を暮らし、尚ほ頻りに丹後丹波邊を限なく探したが、嘸やう山上仙右衛門といふ人は仔細あつて綾部の城下へ移轉したと聞き、ヤレ嬉しやと直ちにのり込んで聞けば、昨年一家三人悉く病死したとのこと、どうやら光枝樣も和子もまだ來られぬ樣子、その内に妻は娘を生んでこの世を去り、男女の子を相手に淋しくその日を送り、尚ほいろ〳〵探してゐる内に、倅大六が年頃となり、諸國修業旁々和子を探しに出て居ります」と、委細を永々と物語つた。

○口程にもない弱い奴ぢや

これを聞いた新八郎、新「フム、さては我れは野々村伊豫守の一子であつたか大「この短刀がある上は和子樣に相違なく……ア、話しは盡きませぬが、定めし御空腹でございませう……」と、娘が心盡しの料理を馳走した、新八郎は大いに喜こび、箸をとりながらも主從はいろ〳〵の物語り、大八郎は當時天下の形勢を話し、大「當時では德川家の勢旭日昇天の有樣、秀頼御大將も一度は大阪城と共に討死なされしと聞き及びしが、眞田後藤等の諸將の計らひで、薩州鹿兒島へ落ち延びられ、過年豊臣家の再興に付き、世間も八釜しうございましたが、この頃ではどうやら少し納まつたやうでございます、新「ウム、お家の仇、父の仇は德川家……ヨシッ、この上は我が習ひ覺へた妙術を以つて、將軍家を討ちとり、世を再たび豊臣家のものにいたしくれん……

大「それは御尤ともではございますが、今になつては到底徳川家を獨力で倒すといふことは至難なこと、それよりも御父上様の御遺言通り、幾分かにも野々村家を再興して、泉下に御在ある御主人に御安心遊ばされなさるやう……

……、それにつけても御生母を殺害いたせしは何者なるか、かの傳助といふ奴が從いて居りましたろうに……、新」して傳助といふ奴はその當時何才位いで、如何なる面相の奴であつたぞ……、大「ハイ、年頃三十前後、面長の……、たしかに右の小鬢に大きな禿のある男で、我れ等は冗談に禿助〳〵と申して居りましたが、力のある……至つて忠義ものでございました、新」フム……その當時三十才なれば當今五十才前後、生あるものならまだ存生して居ろう、その者を探し出せば、母を殺したものも分るであろう、してその者の生國は何處であるか……、大「ハイ、生國は江州邊……、言葉に江州訛りのあつたゞけは記憶して居ります……、新」ウム、そうか、斯く身の上

分つてみれば、この上はその傳助といふ奴を探すといたさん」尚は、いろ〳〵話しは盡きず、二日三日四日……と滯在してゐた、大八郎親子は主人の和子といふので下におかぬ扱かひ、新八郎は尚ほ父の身の上、又天王寺の戰かひに討死して、その死骸は大阪一心寺に葬むつてあること、又大八郎の一子大六、今年十八才の若者が父に代つて新八郎親子を探しに出てゐることを等を聞き、新八郎も自分の身の上話しを語り、早や半月ばかり滯在してゐたが、或るとき、大八郎に打ち向ひ、新「斯く身の上が分つてみれば、これから一日も早やくその傳助といふ奴、又は其方の伜大六を探すといたさん、大「然らば我れ等もお供いたしてこの山を出でん……、新」イヤ〳〵、今暫時此處に止まつてゐるがよかろう、我れ等又再たび此處を尋ねるから……、大「然し若様、當時は徳川天下の威勢擴大にして、さても僅かの人數では徳川天下を覆がへすは六ケ敷い、それよりも何處か御仕官なされて、僅かなりとも家名を立てられるが

よろしうございます、新「ウム、心配いたすな、父が一萬石を領して居つたら乃公も一萬石の知行を貰はうやうに出世する、何ればよき便りがするから待つて居れ……」和泉大八郎はいろ〳〵新八郎の身の上を氣遣つて注意を與へる新八郎も快よく聞いて、新「では暫時別れるぞ……」と、いひ捨てゝ、三國山の閑居を立ち出で、一ト先づ大阪を差して急ぎ、日を費やして大阪に入り、日本橋の大和屋吉助といふ宿に泊り込み、まづ一心寺内の父の墳墓を尋ねた。何しろ德川家の盛んな頃であるから、大阪方のもの〻墓は至つて微々たるものであつた、新「汝れ主家の仇、父の仇は德川家、どうかして覆へさでおくべきか……」と、大阪城を眺めては、大八郎より聞いた物語り、父の戰死の態を思ひ出して切齒をしてゐた、或る日のこと、相も變らず深編笠で面体包み、大阪の町をブラ〳〵徘徊ひ、丁度今しも生魂神社のところまでくると、彼方の方大勢の人集まり、新「ウム……、何事かしら……」と、メイと見物

人を押し分けて中へ這入つてみると、何んでも喧嘩らしい、新「ハヽア……又町人が喧嘩でもしてゐるのか……」と、思つてゐると、一人の乞食が二人の武士を相手にして斬り結んでゐる、甲「それッ……返り討ちにしてしまへ、乙「小癪な素乞食奴ッ……」と、身の丈六尺有余の武士か威猛高になつて左右から乞食に斬りつける、乞「何を小癪なッ……、サア來いッ……」と、乞食も一生懸命に斬り合つたが、稍ともすれば受け太刀氣味、新「どうも怪しからん、乞食一人を武士二人がとり卷いて返り討ちッか何んとか云つて……、ヨシッ、乃公が一つ助けてやろう……」と、斯う思つたので、新八郎物をもいはずヒラリ斬り結んでゐる三人の中へ割つて入り、突然二人の利腕引ッ摑んでエイヤッと左右に投げつけた、武士は驚ろいた、甲「ヤア〳〵何故なれば理不盡に譯もいはずに武士たるものを臆面もなく投げつけたぞ、乙「サア勘辨ならん、覺悟せよッ……」と、左右かも新八郎目がけて斬り込んでき

た、新「オヽ心得た、汝等は如何なる仔細あるか知らねども、二人がゝりで乞食一人を相手にするとは卑怯な奴だ、第一武士の名折れ、乃公が乞食に代つて成敗いたすからそう思へ……、甲「何たッ……入らざるところに力瘤、邪魔立ていたすと許さんぞ……、乙「何んだ、怪しげな下郎奴、觀念しろッ……」と、又も左右から斬り込む、新八郎はヒラリ〳〵体を躱し。利腕引つ摑んではドスン〳〵投げつけると、件の武士も敵はぬと思つたが、太刀引ッ攫いで一目散にバラ〳〵逃げ出した、新八郎は後追はうともせず、塵打ち拂ひ、

新「ハッハ……口程にもない弱い奴ぢや……オイ乞食どうした、怪我はなかつたか、乞「ハイ、お蔭げで怪我はでざいませねど、彼の二人の中の一人は私しの仇でざいます……、新「ナニ……仇……、フム……、そんなら逃がす奴ではなかつたに……、然し見受けるところ、足が悪いとみへるな……、マア〳〵此處では話しもならぬ此方へ參れ〳〵……」と、側の茶店

へ這入る、茶店の女共は乞食を連れてきたので驚ろいたてゐが、新「コレ〳〵女共、この乞食には少し仔細あるものだ、一寸閑靜な間を貸してくれ、女「ヱ……」と、いつてモヂ〳〵してゐたが、この茶店の亭主はナカ〳〵義氣のある男とみへて、亭「コレ、早やく御案内申せぬか、サア〳〵旦那樣此方へ……サアお孤さん、遠慮なくお上りなさい……、乞「ハイ……、有難うでざいます……」と、件の乞食は新八郎に從いて一室へわがつた、

新「亭主、氣の毒だが、何か見繕つて酒を出してくれ、亭「ヘイ〳〵畏こまりました、新「サアサ此方へくるがよい、何も遠慮は入るものか、仇さいふのはどういふ譯だ……てさゝ次第によつては、たとへ一時は逃がしても屹度討たしてやるぞ、乞「ハイ、有難うでざいます」と、早やホロリと涙を流してゐた。

○乃公は日本一の武藝者ぢや

乞食といふのは年頃は新八郎と同年位い、親切に尋ねられて早や涙を落してゐる、新「オイ〳〵泣くな〳〵、泣かずに話してみろ……、乞「ハイ、お話し申すのも永いことではございますが、マア一通りお聞きなされて下さいませ……」と、いつてゐるところへ、亭主は二品三品の肴に酒を添へて持つてきた、新八郎は盃をあげながら、新「サア遠慮なく話してみろ……、乞「ハイ、私しは奥州仙臺伊達家の臣、山田平左衛門の一子平太郎と申しまするもの同藩新參お召し抱へで島田剛太夫といふものがあり、私しの姉お露といふものに想ひをかけ、是非嫁にくれるやうと申し込んで參りましたが、父は島田の人物を嫌ひ、キツパリと斷はり、同藩の堀源左衛門の次男源次郎といふものを婿に迎へる約束をいたした、それが剛太夫の耳に入り、卑怯にも父の歸城を待

ち受け、飛道具を以つて討ちさり、父は如何せん不意のことにて太刀を抜く暇もなく、鯉口三寸寛ろげてゐなかつたので、山田家は斷絶、それを聞いて母親は病氣になつて間もなく病死、姉お露はこれ皆自分から起つたこと、是非仇を討ちたい、首尾よく仇を討つまでと養子の方は斷はつて、親戚の人々の止めるのも聞かず、姉弟國許を出立、彼方此方と仇を尋ね、丁度その翌年、信州上田城下近くに於いて仇に廻り合ひ、姉弟名乘つて斬り付けましたが、相手は名代の腕利きなる上に、三人の仲間があるので、遂に姉は返り討ちになり、私しは谷底へ蹴込まれ、既に一命のないところを、近邊の百性に助けられ、危ふき一命を助かりましたが、この通り生れもつかぬ跛足となり、何んでも彼んでも及ばずながら一刀なりとも報ひんと廻國してゐる内、全たく路銀は盡きて斯く乞食になり下り、この大阪へきて、早や半年……今日此處まで參りまするとと、彼の剛太夫が二人連れで歩つてきましたので、ヤレ嬉しやと斬りつけまし

たが、この通りの不具者、危ふく返り討ちになるところでございました……と、涙と共に永々に物語つた、聞く新八郎も憐れに思ひ、新「そうか、それは可哀想に……そうと知つたら逃がす奴ではなかつたに残念なことをいたした、イヤ、然し心配致すな、乃公が吃度討たしてやる……、サア酒でも飲んで十分元氣をつけろ〳〵……」新八郎は手を叩いて亭主を呼ぶ、亭主は恐る〳〵やつてきた、亭「ヘイ、何か御用でございますか……、新「オ、亭主か、マア此方へ這入つてくれ、亭「ヘイ〳〵、新「外でもないが、今この者の話しを聞けば誠に哀れな話し、ついては今の武士は何處のものか存じて居らぬか……、亭「ヘイ、一人のお方はみたことはございませんが、一人は強井先生の門弟衆でございます……、新「ナニ、強井先生……、そりア何ものぢや……、亭「ヘイ、鰻谷に町道場を開いてゐる名代な先生でございます、新「フム、町道場を開いてゐる奴か、ヨシ〳〵、では其處へ行つたら知れるで

あらう……、亭「イヤ〳〵駄目〳〵……、その先生のところへとび込んだからにはどうすることも出來ません、マア〳〵すると今に仕返しにくるかも知れません……、新「フム、仕返しにくるとは面白い、然し相手を逃がすと不可ん、乃公の方から其處へのり込んでやる、亭主、氣の毒だが其處まで案内してくれ……、亭「ヘエ、そりア御案内しないこともございませんが、その強井先生といふのは、それは〳〵名の通り強い先生で、賭勝負をなされますが、誰れ一人彼處へ行つて勝つたものはございません……、九「ナニ、賭勝負……、神聖たるべき武術に賭けでといたすとは不埒な奴ぢや、賭けといつてどんなことをいたすのぢや……、亭「一ト勝負いくらつて……私しも元來勝負ごとが好きで、度々強そうなお武家をみると、勸めて勝負に出かけますが相手には多くの浪人衆が居られ、中には首尾よく浪人衆は打ち負しても肝心の強井先生が出てくると、一遍に苦もなくやられて皆さられてしまひます……

新「フム、では貴様もさられたのか……、亭「ヘイ〳〵、これまでいくらさられたか分りません……、新「フム、ヨシ〳〵、ではこれから乃公がのり込んで一度にとり返してやる……、亭「ヘエ、貴君様が……、新「そうだ、妙な顔をするな、乃公がこんな風をしてゐるから妙に思ふだらうが、乃公は日本一の武藝者ぢや、仇討ちをして金子儲けが出來るとこの上のことはない、亭「ヘエ……して先生のお名前は何んと仰しやいますので……、新「乃公の名か、矢鱈勝之助さいふのだ……、亭「ヘエ……妙な名でございますな……、新「名なぞはどうでもいゝ、屹度とり返してやるから安心して從いて來い、然しこの者を此處へおいては、もしや入れ違ひに仇の奴等でもくると不可ん、何處か隱しておくところはないか……、亭「ヘイ、では私しの住居がこの先きにでございますから、其處へお連れ申しておけば大丈夫で……、新「そうか、では平太郎殿さやら、今その島田剛太夫さいふ奴を引ッ張んできてゆ

ろから、少しの間待つてゐられい、してこの金子を以つて着物を一枚も着てゐる様に……」と、五兩の金子を與へる、山田平太郎は涙を流して禮を述べ、亭主に案内せられて立ち出でた、後に新八郎は獨酌でグイ〳〵飲つてゐた、ところへ亭主の喜八急いで立ち歸つて參り、亭「先生、お待ち遠ふでございました、漸やう五十兩の資本を持つてきましたが、もしやこれをさられさる、私し等夫婦は夜逃げをしなけりアなりませんが、大丈夫でございませうが……新「ハッハ……大丈夫〳〵、向ふにはいくら金子があるか知らんが、根こそぎ分捕つてやる……、亭「ヘエ、向ふには大阪屋六兵衛さいふ質屋がついて居りますから、金子はいくらでもございますが、此方が負けたらさんだことになるので……、新「心配するな〳〵、サアポッ〳〵參ろう……」と、新八郎は亭主喜八に案内させて急ぎ足に鰻谷へと歩つてきた、亭「先生〳〵、彼處でございます〳〵……」指さす方をみると、立派な門構への門の柱には、

「東軍流劍道指南、强井大雲齋」と、記した看板がかけてゐる、新「フム此處か、貴樣は一寸此處で待つて居れ、乃公がくるまで這入つてはならんぞ、亭「ヘイ〳〵、オヤ〳〵〳〵、何處かへ、今此處にもゐたのに……妙な人だな……」と、キヨロ〳〵してゐる、新「ハツハ……亭主、何をキヨロ〳〵してゐる、乃公は此處に居るぞ……」と、スツクと姿を現はした、亭「ウヲーツ……、喫驚りした……、新「ハツハ……、驚ろかんでもいゝ、待つて居れ〳〵……」と、又もパツと姿が消へた、亭「オヤツ……又……、フ……ム……、いよ〳〵妙な人だな……」と、亭主は呆れ返へつてゐた。

○目を丸くせんともいゝ

此方新八郎は忍術を以つてズカ〳〵玄關から上り込んだ、道場では門弟らしき奴が十二三人、類りに稽古をしてゐる、奥の方で笑ひ聲が聞へるので、スカノ〳〵入り込むと、七八人集まつて酒宴を催ふしてゐる、中で四十前後惣髮の男立派な風体をして、○「ナニ如何なる奴が加勢しても、拙者の道場に居れば手出しをすることが出來るものか、然し貴公等二人もゐて、多寡が町人か武士か知らねど、負けをとることは余り意氣地がないではないか……、甲「それで……、縞の着物に一本差し、編笠といふ……、武士とも町人ともつかぬ奴だが、ナカ〳〵の小力のある奴で……、のう齋藤氏……、齋　左樣〳〵……、○「ハツハ……別に心配することもない、此度出會つたら返り討ちにしてしまへばそれで濟むではないか……、□「それもそうだけれど、彼奴

が生きてゐては油斷も出來ん、本人は別に恐るゝに足らんが、もしや加勢が出來たときは……、拙者は永らくお世話になつたが、これから何處へか參ろうと思ふ……。　○「ハツハ……貴公には似合はぬことぢや、今此處を立ち退いたところが、そんな奴なら又貴公の後をついて行くに違ひない、そうすれば何時までも枕を高く寢られぬといふもの、それより寧そ返り討ちにしてしまつた方が安心ではないか……、島イヤ、そう思つたが意外に邪魔ものが出たので……ではもう一度引ツ返して……、△マア〳〵急くことはない。一杯くれ〳〵……」と、後は一同酒宴に耽つてゐる、姿を隱して聞いてゐた新八郎、新「ハヽア島田といふ奴は此奴だな……、此奴を逃がさんやうにしなれば……」と、何やら考へながら外へ出て、姿を現はした、新オイ〳〵亭主……、亭「ヘエ……、新「もしや先刻の男と思はれ、金子儲けをしてゐる間に、仇の奴を逃がしてはならん、よつてこの邊に古衣屋はあるまい

か、一つ風体を變へてのり込もうと思ふから……、亭「ヘエ……、古衣屋ならこの先きに澤山でございます……」其處で兩人は一軒の古衣屋へ這入り紋服一枚買ひとり、早速着込み、新「どうだ、亭主、これなら立派な先生さみへろでわろう……、亭「ヘエ、どうも縞の衣物では……、だが太刀は一本で……、新「一本で不可けなればこれを……」と、短刀を一本差し込み、悠々〳〵と歩つてくる、亭主が這入つて案内を乞ふ、藁ねて知つてゐるので直樣道場へ打ち通つた、少時待つてゐると、惣髪の强井大雲齋門弟を伴れて、悠〳〵と出てきたり大「オヽ丹波屋か、よふきた……、亭「ヘイ、先生、今日は……、どうか一つ又お願ひ申したいんで……、大「ヨシ〳〵その方か、亭「ハイ、この先生で……、兩「アイヤ、貴公が强井大雲齋先生といはれるか、拙者は九州の濱人矢鱈勝之助と申すもの、どうか一本の手合はせが願ひたい……一その時代は變名で歩くのが大いに流行した、殊に賭勝負にくるも

のに滅多に本名名乗つてくるものはないから、承知してゐる、大「申し遅れた……拙者が當場の主人、强井大雲齋と申すもの……、萬事は丹波屋から聞いてゐられやう……、新「如何にも聞いて居ります、劍術の賭勝負とは面白いと存じ、些少なれど五百兩ばかり持參いたしたが、どうか勝負を……」五百兩と聞いて大雲齋始め一同は大喜び、大「左樣でござるか、それは承知いたした、然しまづ門弟二三人から如何手願ひたい……、新「如何にも承知いたした……、門「して最初は如何でございます……」と、側から門弟がいふ、新「まづ最初は五十兩位い……、門「エッ……五十兩……、新「左樣……拙者はチビ〳〵出すのは大嫌ひ、サア喜八、出せ……、喜「ヘエ……先生、最初から五十兩……、新「目を丸くせんでもいゝ……、後にはまだ四百五十兩あるではないか……、喜「ヘエ……」と、亭主も仕方から五十兩出す、すると門弟は五十兩出し、百兩の金子が三寶の上に堆高く

積まれた、大雲齋始め一同は顔を見合はせてゐたが、やがて一人の門弟立ち上り、×「アイヤ矢鱈氏、拙者がお相手いたそう……」と、後鉢巻き袴の殿立ち高くとりあげ、木太刀をつて道場の眞ン中へ進み出でた、新八郎も一本の木太刀を借り受け、二三度ビユー〳〵ッと打ち振つて、同じくズカ〳〵進み出で、新「アイヤ方々、拙者は幼少のとき耳を患らい、少し耳が遠い、されば勝負中ハツキリと參つたさいはれぬと、粗忽をいたすかも知れんから其處は御注意……」相手に出たのも、書通の門弟ではない、道場の高弟佐々木源五郎といふ人物、相當に腕前も出來る、佐「汝れッ、素浪人、小癪なことを吐かす奴……」と、思つたが、瓦ひに一禮して、エイヤッと左右に分れて身構へた、腕前勝れた新八郎の目からみると赤兒の手を捻ぢるやうなものだ、然し一時に負かしては後に差し支へると思つたので、相手が急き込んで打ち込んでくるを、パン〳〵と辛ふして受け流すやうにみせかけて、十六七合も渉り合つた

頃、小手をポンと一つ殴つた。△「參つた……」と、叫ぶところを、續いて肩口をポカーリ、△「マ、、參つた……」と、いひながらペッタリ尻餅つく

新「サアお代り〳〵……」「みてゐる亭主喜八は大喜こび、喜「ヤア先生、豪い〳〵、では又五十兩……」、「新「イヤ、その儘だ〳〵……、喜「エッ……

……、その儘……」と、喜八は惜しそうな顏をしてゐる、その間に相手は代つて水野左内といふ高弟が出た、これも同じやうに、小手をさつて肩口を打ち込んで打ち負かす、大震齋はチッとみてゐたが、此奴ナカ〳〵の奴と思つたか、三番目には入れ代つて出たのは島田剛太夫、島井兵太夫と名乘つて、互ひに左右に分れてキッと身構へた、流石は一流の使ひ手、今までの門弟等とは違つて構へた太刀先きに隙がない、新八は此奴どうしてくれやうと思ひ、少時は受けつ流しつパン〳〵と打ち合つた、彼方にある三寶の上には四百兩の金子が山と積んである、剛太夫、負けては一大事と一生懸命、秘術を盡して打ち込む

新八郎はヒラリ〳〵と飛鳥の如く体を躱し、パン〳〵太刀を引つ拂つた、剛太夫大いに急せり、ヤッと大喝一聲諸共ピューッ大上段より打ち込んできた、ヒラリ体を躱して空を打たせ、横にピューッ、利腕をヒシーリ、剛「アッ……參つた……」と、叫ぶを構はず、二度目に拂つた木太刀は右馬の關接を打つたから堪らない、剛「痛いッ……」ドスンと打つ倒れた、みるに見兼ねて門弟の一人、○「アイヤ矢鱈氏、相手が參つたといふのに打つ法があるか、新「ハッハ……、拙者は前にもいつた通り耳が遠いので分らなかつた、もう少し大きな聲をいはんと分らん……」それとみて大震齋は大いに怒り、大「イデこの上は拙者が相手いたさん……」と、四五尺もあろうかと思はれる餓棒を持つてメイッと立ち出でた。

○貴様等に降參して堪るか

丹波屋喜八はニコ〳〵顔、喜「先生、此度は半分位いに……、新「イヤ、もう一人だ……その儘におけ〳〵……、喜「でも此度は大罰、一度にされてしまつては大變ですぞ、新「イヤ、心配するな。大丈夫〳〵……」と、いつてゐると、彼方では門弟二三人島田剛太夫を抱へて奥の間へ連れて行く、

新「サアお代り〳〵……」門弟は立ち出で、△「此度は大先生がお相手すると仰しやる、金子は何程……、新「何程といつて……四百兩其處にある筈それだけぢや……、△「一度に四百兩……、新「左樣……」如何に强井先生の道場でも四百兩も五百兩も金子は貯蓄してはない、少時經つと門弟の一人四百兩の金子を持つてきた、それはこの强井の後押しで隣の質商大阪屋六兵衛、始めは賀入れで剛染となつたが、六兵衛といふ老爺は至つて强慾一天

張りの男、强井大雲齋の强いのをみて、この頃では自分から進んで資本主となつてゐる、早やくも八百兩の金子は三實の上に盛られ、大雲齋はスツカリ身支度して現はれ、大「ヤア貴公はナカ〳〵の腕前、如何にも感心いたした、イデ拙者が相手をいたさん、然しどうも木太刀の勝負では氣乘りがいたさぬ、眞劍で一勝負いたさん、拙者はこの鐵棒を以つてお相手いたすから、貴公は眞劍で願ひたい……、新「イヤ、それは面白い、然し拙者はこの木太刀で澤山……、大「然し貴公の方が木太刀ではどうも氣乘りがいたさぬ、どうか眞劍で……」と、いふ注文、新八郎此奴猪口牙な奴と思つたので、スラリ太刀引き抜き、新「イヤ、よろしい、然らばこれで相手いたさうか、拙者の勝負は殊の外荒い、もしや傷を負ふてもケズ〳〵いふことはあるまい……、大「イヤ眞劍勝負を望む以上は素より承知、イザッ……」と、大雲齋パッとさび下つて鐵棒をバラリ振り被つた、新「サア來いッ……」と、新八郎も太刀をつ

て正眼にピタリ構へた、水太刀とは違つて鐵棒と太刀との勝負、ナカ〳〵易々とは打ち合はない、それに流石は名代の强井大雲齋だけわつて、構へ方に隙がない、少時はヤツエイッと睨み合ひの姿、門弟等はこの勝負どうなるかと片唾を飲んでみてゐる、やがて大雲齋はヤッと一聲ヒシーリ打ち込んでくると、ヒラリ体を躱して斬り返しにズバーリ斬り込むと相手もさるものガチーンと受け止めた、ハッと手許へ引かうとする と、這は如何に、太刀は鐵棒に引ッついて離れない、流石の新八郎もアッと驚ろき、引けども押せども動かばこそ、その内に大雲齋は鐵棒を以つて上から押し付けんとした。大「サアどうだ、若者、降參したか……、新「ウム、貴樣は怪しなことをやり居るな、誰れが貴樣等に降參して堪るかッ……、大「オヽ吐かしたりな、それまでにいへば是非もなし、イデ引ッ潰してやるから覺悟せいッ、ヤッ……」と、力一杯打ち下した、如何な新八郎も鐵棒のために打ち据へられ、腦骨も碎けたかと思ひの

外、その姿はパッと消へた、同時、大雲齋、鐵棒持つたまんま、ドスーンとセンドリ切つて打つ倒れた、早やくも起きあがらんとしたとき、スックと姿な現はせし野々村新八郎、ケイッ……と大雲齋を押へつけて動かさず、新「ヤイ弱井、サアどうだ、降參したかッ……」それと同時に多くの門弟等は總立ちとなり、□「ヤア先生なッ……、△「それッ……」と、太刀の柄に手をかけ、一齋に新八郎目がけて斬りつけんとした、新「オヽ勝負に負けて師匠の仇なぞゝ申せばよし、此奴の首から先きへ抜いてやるぞッ……」と、新八郎は大雲齋の首筋へ諸手をかけ、今にも引き抜かんとした、流石の大雲齋も怪力無双の新八郎にかゝつては堪らない、痛さ苦しさに堪へ兼ね、大「マヽヽ參つた〳〵、皆の者、靜かにせい〳〵……」門弟等は師匠の言葉に斬りつける闘にもいかず、互いに顔と顔とを見合はせて、目ばかり、パチ〳〵させてゐる、新「參つたとあれば生命だけは助けて遣はすが……、貴樣は怪しき勝負

をいたすのであらう、大「イ、エ……怪しいなどゝ申して、そんなことは……、新「馬鹿をいへ、太刀が鐵棒に引ッつくなどゝは心得ん……白狀いたさぬか、白狀せんとあれば素ッ首を容赦なく打ち拔くぞ、大「ハ、白狀いたします〳〵、實は鐵棒の先きへエレキを少し通じさせてあるので……、新「フム、それでワザと眞劍勝負を望み居つたのだな、かゝることをいたして人々を苦しめ、金子を捲きあげ居つたのか、大体武術の師範の身でありながら、弄びにいたして金錢をかけるなどゝは不埒な奴、以後の懲らしめ、斯うしてやるぞ……」力に任せて右の手をグイッと拔いた、大「痛いッ……、新「痛いも絲瓜もあるか……」と、左手も拔き、その上頭を外した、大「アウ〳〵……」と、垂涎をだらしてゐる、新「サア以後は氣をつけいッ……」サア門弟の奴輩、師匠の仇と思はゞ遠慮なくかゝつて來いッ……」と、大雲齋の帶際と首筋引ッ摑んでドスーンと投げつける、門弟等はその恐ろしき勢ひにアッと驚ろいて誰れ一人向はうとするものもない、新「サア喜八金子を持つて行け〳〵……、喜「へ、へイ……、新「どうした、早やくせい〳〵、喜「へイ、一寸拔けましたので……、新「何が拔けたのだ……、喜「あの腰が……、新「ナニ、腰が拔けた……、意氣地のない奴だ……シッカりしろ……」と、ポーンと腰を蹴あげると、喜「ヒエッ……、おたゝお助け……、新「どうだ、腰は立つたか……、喜「へエ……、どうやら立ちましたやうで……、新「早やく金子を持つて行け、喜「へエ〳〵」と、喜八はガラ〳〵小判を懷中へ捻ぢ込みその儘早やくも表の方へとんで出た、新「サア門弟の奴等、もう手出しをする奴はないか、ないとあれば貰つて行くものがある……」と、奥の間へとび込むと、島田剛太夫はウム〳〵唸つて髭込んでゐる、新「ヤイ島田剛太夫、汝は國許仙臺に於いて山田平左衛門なる者を暗討ちにした覺へがあろう……、剛「エ、ッ……」と、驚ろ

いてとび起きると、新八郎は猿臂を延してグッと引ッ摑む、剛太夫は藻掻く、エイッと脾腹を當てるとウムーン氣絶した、忽ち横抱に引ッ抱へ表の方へ立ち出でる、□泥棒〳〵……人間泥棒……」と、門弟等は叫ぶ、新八郎は聞き流して表へ立ち出で、十五六間もくると、喜「先生……、この金子、どういたしませう、エッ……それァ何んで……、新「それか、これは彼の非人の仇といふ奴だ……、ついては亭主、乃公は日本橋一丁目の大和屋吉助といふ宿屋へ泊つてゐるから、貴様がこれから家へ歸つて大急ぎで彼の乞食を大和屋へ連れてきてくれ……、喜「へイ〳〵……」兩人は左右に分れて駈け出した。

○助けて遣らねば相ならん

大和屋方では新八郎が人間を引ッ抱へて立ち歸つてきたので、アッと驚ろいてゐたが、新「イヤ〳〵、決して驚ろくことはない、この者に少し用があるから連れてきたのだ、今云々の者がくるから早速通してくれ、そうして直ぐに酒肴の支度をしてくれ……」と、いひながら二階へあがつた、女中は仕方がなく早速酒肴を持つて行く、新八郎は獨酌でグイ〳〵飲つてゐる、暫時すると トン〳〵足音高く丹波屋喜八は山田平太郎を連れてきた、喜「へイ、先生、連れてきました……」みると小ザッパリした衣物を着てゐる、新「オ、きたか平太郎とやら、其方の仇といふは此奴か」島田剛太夫は活を入れ、ギリ〳〵卷きに縛しあげてある、平太郎みるより、平「オ、島田剛太夫ッ……汝よくも我が父を飛道具を以つて討ちとり……」と、いひながら、竹杖に仕込んだ太

刀スラリ引き抜き、今にも斬ってかゝらんとした、新「イヤ、待て〳〵、もう斬うなったら急くには及ばぬ〳〵……、ときに喜八、なんだ、その背中に背負つてゐるのは……、喜「ヘエ、あの八百兩のお金子でございます……、新「ウム、そうか、然らば此處へ出せ、この内から二百兩貴様にやる……、亭「エッ……、二百兩……、新「以後は決してこんな勝負ごとはするなとはならんぞ……、喜「ヘイ〳〵有難うございます……」と、いつてゐるところへ、宿の番頭慌ただしく上つて參り、番「旦那様、大變でございます、新「どうした……、番「只今お役人様がお出でになりまして、云々斯々の者が居ろうと……アレ〳〵……もうあがつてお出でになりました……、喜「エッ……役人……」と、喜八は隣りの室へ逃げ出す、新八は大盃をあげて〳〵飲つてゐる、役人は早やくも部屋の前へ突立ち、役「アイヤ、それなる武士、汝は只今饅谷の强井の道場へ暴れ込み、金子及び人間を引ッ

攫つて逃げたそうであるが、事實であるか……、新「默れッ、その方は何者なるぞ、如何にも我れは人間及び金子は分捕つてきたが、決して暴れ込んだのではない、役「扣へい、我れてそは當地町奉行下役人、安藤友十郎と申すもの、只今强井の門弟等の訴へによつて汝等を召し捕りに向ふたり、イザ尋常に御縄頂戴いたせ……、新「ハッハ……役人であつたが、只今當方より訴へ出やうと思つてゐたところ、我れ等は決して不淨の縄を受ける覺へはない、云々斯々……此處にゐるものに親孝道の仇討ちをいたさせんと連れ參つたのである……、役「フム、それに相違ないか……、新「如何にも……」山田平太郎は主君伊達陸奥守よりの仇討ち免狀をとり出してみせた、其處で役人は是非一應役所へ參るやうとおり、新八郎はむ得て、改めて島田同道町奉行所へのり込んだ、その當時大阪剛太夫を役人の手に渡し、平太郎は井上河内守城代を勤め、奉行所は南北に分れ、南町奉行は安田隼人が

勧めてゐた、新八郎、平太郎は委細を申し出でた、其處で奉行は直ちにこのことを主君に申しわげ、一應兩人を宿に下げた、河内守殿も相手は浪人、殊に親孝道の仇討ち、伊達家よりの免狀を持つてゐるので、日を定めて住吉街道で島田剛太夫と山田平太郎と尋常の勝負をさせた、島田剛太夫も東軍流の劍客者でゐつたが、既に新八郎のために右足と肩の骨を打ち折られてゐるので十分の働らきが出來ない、遂に剛太夫は平太郎のために打たれ、平太郎は天へも登る心地して、その髷を切り落し、喜こび勇んで新八郎と共に一ト先づ宿へ立ち歸つた、新「首尾よく仇を打つた上は一日も早やく歸國いたすがよかろう、平「ハイ、有難うでいざます、これといふのも先生の御恩、決して忘却いたしません」其處で新八郎は百兩の金子を路銀として與へ、平太郎は涙を流して厚く禮を述べ、即日大阪表を發足した、新八郎に於いても最早や大阪にも用もないので、宿の支拂をなし、鰻谷の强井の道場へ參り、新「頼も

う……、△「ドーレ……」と、出てきてゐると、過日の恐ろしい武士であるから、△「ヒエ……」プル〳〵震へてペッタリ座り込んだ　新「アイヤ强井大雲齋はゐるか……、△「ヘエ……先生はお臨みで……、新「然らば大雲齋によく傳へよ、以後必らず卑怯な惡事をいたして惡事をいたすな、島田の死骸は丁寧に葬むつて遣はせ、金子は四百兩余つたから返して遣はす、二度と不埒な噂さを聞かば、容赦なく讐ッ討き拔きにくるぞ……」と、いひながら、屋敷に包んだ四百兩の金子を投げ與へ、悠々とその場を立ち去り、八軒屋より夜船で伏見へ出で、郷に入り、三日見物した、母の仇は傳助さいふ奴に聞いたら分る、その傳助の故郷は江州とのみで少しも分らない、都を立つてブラ〳〵彼方此方と聞き合はしながら、何時しか彦根の城下へ這入つてきた、その當時彦根は三十五萬石、天下の大老職井伊掃部頭の居城地であつた、新フム此處が德川四天王隨一の井伊の城下か、フム……、何んとか一

つ驚ろかして遣りたいものだ」と、ノッシ〳〵歩いてゐると、三々五々、ワイ〳〵話しながら大勢の人が歩る、どうやら大きな喧嘩でもあつたやうな様子、

新「コラ〳〵町人、何か喧嘩でもあつたのか、」町「イエ、喧嘩どころではございません、只今召し捕りがあつたので……、」新「ハヽア召し捕りと申すと何か悪者か、」町「イエ、お武家で……、然かも若いお武家で……、恐ろしい強い人で……、何んでも原因は御城下のお武家に喧嘩したのが始まり、大阪殘黨とかで只今召し捕りになりましたが、お役人が七八十人かゝつたがナカ〳〵手に合ひませんでした、然し大勢に無勢、とう〳〵召し捕られました。」

新「フム……、して名は何んといふ男だ……、」町「名ですか、名は何んで和泉大八……、」新「エッ……、和泉大六……、」町「へエ……、旦那は御存じなので……、」新「イヤ、知らんが、召し捕られるとは可哀想に……。」と、その儘立ち去つて、その日は江州屋善助といふ

宿へ泊り、翌日ブラリ宿を立ち出で、それとなく噂さを聞くと、茶店で井伊家の若武士と喧嘩して、揚句の果てに徳川家を罵しさまにいつたので召し捕られたと分つた、新和泉大六とあれば助けてやらねば相ならん」と、宿の者には二三日滞在すると觸れ、その夜身支度いたして、町奉行の裏塀越へてヒラリの宿へ飛び込んだ。

○徳川の奴等を威嚇しつけて遣る

大膽不敵にも悠々島方牢の前へくると、牢はズラリ並んでゐる、新「コラ〳〵、この中に昨日召し捕りになつた和泉大六といふ奴がゐるか、」△「ヘエ……、旦那何御用で……、」新「貴様が和泉大六といふか……、」△「イエ……、私しは横兜の仙太といふので……、」新「そんな奴に用はない……」と、だん〳〵聞いて行くと、一番外れの牢に、四人ばかりゐるが、□「なんだ、和泉

大六は乃公だが、何んの用がある……」と、ムク〳〵ッと起きあがつたのは髪は散ばらに亂れ、年頃十は八九才の屈強の若者、新「フム……貴様が大六か……、和「コラッ……、人もなげに大大なとゝ呼びつけにするとは怪しからん……」と、いつてゐると、牢番は早やくも見咎め、番「コラ〳〵、貴様は何ものだ……、新「何んでもない、この和泉を助けにきたのだ……番「ナニ、和泉を助けにきた、第一何處から這入つてきたのだ……、新「彼方からきたのだ……、番「怪しからん奴だ、ナア怪しの奴が來居つたぞ〳〵……」と、呼はると、五六人の役人バラ〳〵ッと駈けきたり、物をもいはず新八郎をとつて押へんとすると、新八郎は何時の間に口中に水を含んでゐたかプーッと霧を吹いた、役人はアッと思ふと、その姿はパッと消へた、番「ナ、ッ……怪しの奴ッ……」と、一同キョロ〳〵ウロ〳〵見廻したが、早や新八郎の姿はみへなかつた、○「ウワーッ……、コリア、妙だ、人間が消へるとは……、△「妙だな……」と、油斷なく張番をしてゐたが、その後は少しも變つたこともなかつた、此方新八郎は一度和泉大六といふものゝ顔をみておき、助けるのは何日でも助けられるから、一つ井伊家の奴等を驚ろかして立ち退いてやろうと、奉行所を立ち出で、何か老がへながら、彦根城の大手門前の濠端まできた、その當時城主井伊掃部頭は江戸詰め、留守は城代井伊支藩が支配してゐると聞いてゐる、新「どうも城主が居らんでは、一寸面白くないが……ヨシ〳〵、この邊で通りかゝりの武士を一々〳〵濠の中へ投げ込んでやろう、オヤッ……來居るな……」身輕な新八郎、側の松の木の上へヒョ〳〵ととび上がつて待ち受けてゐる、すると此方から四人の武士、酒の機嫌か大聲に語りながら歩つてくる、△「和泉大六といふ奴は年若に似合はぬナカ〳〵強い奴ではないか……、○「ナアニ、多寡の知れたものよ、今更ら豊臣殘黨位いとび出したつて……、△「で彼奴をどうするのだ……、

○「サア何んでも彼奴のために多くの怪我人もあり、且つ死人もあるから、重き刑に處してしまはうといふ評判ぢや……、□「なる程、あんな奴は早やく首を打ち切つた方がいゝ……」と、いひながら件の松の木の下を通りかゝつたとき、ヒラリとび下つた野々村新八郎、突然二人の奴を引ッ捕んで、お濠の中へドブーン……、殘る二人の奴も驚ろいて逃げ出さんとするを、追ひ縋つて、ドブーン〳〵、四人の奴はアプ〳〵ヂヤプ〳〵藻掻き廻つて、遂か離れて這ひ上りホッと息を吐き、○「なんだ、あれは……、△サア急に襟ッ首引つ摑まれたと思つた　お濠の中へ拽り込まれてゐたから、サッパリ分らん、□「なんでも大きな〳〵六七尺もあらうといふ大男だ、あれりア人間ぢやないぞ……、○「フム、殊によつたら鞍馬山邊りの天狗かも知れんぞ……、△物騒〳〵、人間ならどんな奴でも懲れはせんが、天狗なんぞは眞ッ平御免だ……」と、一同身を震はして逃げ出した、此方新八郎は通る奴〳〵容赦なく投げ込む、それが殊の外素早やい、翌日になると大評判、誰れいふとなく、お濠に天狗が出るといふ噂さが擴まつた、中はに世の中に天狗などゝいふものがあるものが、それは何者がの惡戯に遂ひない、乃公が退治てやる、腕前自慢の若武士はノコ〳〵出かけるが、何れも苦もなく投り込まれ、濡れ鼠の如くなつて震へて歸る、誰れもロク〳〵天狗の正体をみたこともない、夜になると、ロク〳〵お濠端を通るものもないので、天狗も大手門近く出没する、井伊家の老臣等はいとも安からぬことゝ思つて、家中屈指の武士を撰んで天狗退治を申しつけるが何んの利目もない、彦根城下は天狗の噂さで大騒ぎであつた、もういゝ加減によかろうと新八郎はノコ〳〵奉行行へ出かけ、牢前へと忍び込んだ、番人の目を晦まして大きな牢が三つある、それを恐く開いて罪人を逃がした、そうなると役人等は驚ろいてとり押へんとするが、その十分の一も捕へることが出來ない、家中の騒動は又格別であつた、新八郎は早やくも大六を助

け出して、大膳にも宿へ引きあげた、大六はいたく妙に思つて、和「拙者を斯く助けて下すつた貴殿は一体何人でござるか……、新「ハッハ……、マアユックリ飲みながら、話すとしやう……、誰れでもない乃公は野々村新八郎さいふものだ、和「エッ……野々村新八郎……ではあのもしや大阪七手組の野々村伊豫守の御子息で……、新「如何にも……、和「オヽでは貴君が若様でございましたか……、新「ウム、其方のことは其方の親なり妹から悉く聞いた、してどうして其方はこの邊にゐるのだ……、和「エッ……では父や妹にお會ひで……、それは何より……父の命によつて貴君をお尋ね申し、三丹州から中國邊まで參りましたが、少しも知れず、この儘父の許へ歸るのも面目なしと、東國邊を彷徨ねんとして此處まで參りましたが、圖らず茶店に於いて井伊家の武士が噂りに德川家の威勢を自慢してゐたのが癪にさわつたので、豊臣秀吉殿下の武勇を述べて聞かせろうとしたところが、此奴豊臣

家の殘黨なと、役人が召し捕りにきたのでございます……、新「ハッハ……、酒の上の爭そひか、大「イヤ、不埒極まるは德川幕下の奴等で、中國邊で、何かと申すと豊臣の殘黨などゝ申して、厳しき詮議に及び、入牢、追放或ひは打首なとにいたして居ります、新「フム、如何にも不埒な奴ぢや、ヨシ〳〵これから一つ德川の奴等を威嚇かしつけてやる、餘し云々斯々……、まづ第一にその傳助といふ奴を探さねばならぬ……」と、いろ〳〵話しながら酒酌み交してゐる折りしも、何時の間に忍び込んだか多くの捕手の役人、役「御用だ〳〵……」と、矢庭にとびかゝつてきた、剛士も少しも怯がず、大「蒼様、初お目見得の印し、私しが追つ拂つて御覽に入れます」と、群がりくる奴をチョイ〳〵引ッ掴んでブン〳〵投げ出した、役ヤア手剛いぞ〳〵、油斷するな〳〵……」と、いふ内に役人方はます〳〵殖へてきたり、表障子を開けると、家の前には高張提灯や松明を輝らしヒシ〳〵と押し寄せた、

大「オ、押し寄せ居つたな井伊家の雑兵輩、天下の豪傑和泉大六の腕前みよッ……」と、大音に呼はりながら、二階から身を躍らして大勢の頭の上へヒラリとび下つた。

○斯う見ねても魔法遣ひだ

それとみて野々村新八郎も、新「オ、大六、ぬかるな、シッカリせい……」と、續いてとび下り手當り次第に暴れ廻つた、井伊家の人々も何んの相手は二人位いと勢ひ込んで打ちさらんとしたが、大六が暴れ廻つてゐる間に新八郎はパッと姿を隠して散々に追ひ捲るので、役人等もワア〳〵ッと逃げ足立ち、新「オイ、大六引きあげろ〳〵」と、夜にまぎれて彦根城下を落ち延びた、井伊家に於いては遠く追手を出し、且つ近邊の諸大名に兩人の召し捕方を頼んだ此方剛士は圖々しくも近邊の百姓家で夜を明かし、ブラリ歩つてきたのが道中

名代伊吹山の麓、最早や七ッ下りの頃、茶店の老爺は山賊がゐると止めたが元より血氣の兩人、却つてその方が面白いと酒の機嫌でブラ〳〵登り始めた、その内に四邊は薄暗くなつてきた、新「オイ居るぞ〳〵、大ェッ……何が居ります、新「どうやら山賊が張番してゐるやうだ、話し聲が聞へる、大「へエ、何處に……、私しには少しも聞へませんッ……、新「ハッハ……如何に武術が出來ても、てればかりは聞へまい、一丁程も先きだ、どうやら二三人ゐる、だが余り無益な騒生するのも可哀想だ、云々斯々にせい……、

大「よろしうございます、オヤ、もう何處かへ……、フム、てれば驚ろいた……」和泉大六は新八郎と何やら打ち合はせトス〳〵登つて行くと、なる程三人の山賊が焚火に暖つてゐる、足音忍ばさせ近より、大「オイ〳〵、少し暖らしてくれ」と、ヌッと割り込んだ、山賊の方では驚ろいて、○「何んだ、手前ねは……、大「拙者は人間だが、貴様等を泥棒と見込んで少し頼みがあ

る、どうだ聞き入れるか……、○「オヤ、此奴、泥棒と見込んでとはどうだ大「どうだといつて何處からみても泥棒面をしてゐるが、泥棒ではないのか、○「何を吐かすぞ……、して乃公達に盲めといふのは何んだ……、大「外ちやないが、乃公を泥棒の仲間に入れてくれ……、○仲間に……、大「そうだ、だが貴樓等の仲間は何人位いゐる、○「先のお頭のときには四五十人だつたが、此度の伊吹太郎と仰しやるお頭は四十貫の鐵棒を自由自在に振り廻すといふ豪い人だ、手下もズツと殖へて百五六十人はゐる……、大「そうかそれは丁度い、乃公は武士の家に生れたが、劍術や何かは大嫌ひ、人の物を盗るのが大好きだ、何んでも搦ばん、人の物とさへみたればとりたくなる……、……、△「イヨ……、そりア感心した、して何か手前ェ得意なものがあるか、大「ある〳〵、乃公は斯うみへても魔法遣いだ……、○「エ、魔法遣ひどんなことをするのだ……、大「マア一寸其方にゐる奴の頭を殴ろうと思へば、眞ン中にゐる髯モヂヤの頭を一つ……」と、いふと、姿を隠してゐる新八郎平手でピシヤーリ、□「痛いッ……」と、頭を抱へる、大「どうだ、その右隣りの奴の鼻を一シヤリ……、新八郎はグツと捻ぢあげる、△「痛ゐ〳〵……、もう澤山だ〳〵、手前ゐ妙なことを知つてゐるな……、大「ハツハ……どんなことでも出來る……、□「然し少しは荒療治をしたことがあるか、大「あるとも〳〵、人殺しなんかは毎日二十人宛やつてきた……、△「ウム……、年は若そうだがナカ〳〵話せる、ヨシ〳〵、お頭は豊臣家の浪人で、當時、伊吹太郎といふんだが、これから連れて行つて賴んでやるから來い……、大「そいつは有難い……、△「オイ、手前ゐ等は此處で張番してゐろよ……」手下の一人は大六を遇れ由寨へ戻つてくる、新「豊臣家の浪人といふがどんな奴だろう……、大「サア……、何んでも四十貫からの棒鐵を振り廻すといふからには少しは小力のある奴でせう……」この話しを

聞きつけた手下の奴、　△「オイ〳〵手前ゐ誰れと話しをしてゐるんだ……、
大「イヤ、誰れとも話しをしちやアゐない……、　△今ゴテ〳〵何んかいつてゐたぢやねゐか……、　大「ナアニ、四十貫からの鐵棒を振り廻すといふから豪い頭だろうといふてさだ、　△「フム、では手前ゐの獨り言か」と、いひながら歩いてゐる内に戻つて參り、大きな巖をコツ〳〵叩くと、眞ン中が割れて左右に開らく、　△「サア這入れ……、　大八新八郎は仲へ這入る、然し新八郎は姿を隱してゐるから分らない、中は廣い、ズン〳〵這入つて行くと、今しも奥の室と覺しきさところで、頭といふ奴は多くの手下を集めて酒宴最中だ、
△「お頭、只今……、　頭「オ、蟾平か、昨夜の仕事でみへなくなつて心配してゐたが、サア飲め〳〵……、　△「ヘエ、頭だきやす、ところでお頭、今日は珍無類の掘出し物を連れてきやした也……、　頭「阿鬼か……、　△「イエ野郎でげす、　頭「どんな奴だ、野郎なら連れて來なくつて、途中でスッサリや

つ付けてしまやアいゝのに……、　△「ところが面白い魔法遣ひ〳〵、妙なことをしやアがるので、是非手下になりたいと申しやすから……、　頭「フム、どんな奴か此方へ連れてきてみろ……」と、話してゐる、此方新八郎は早くも這入つてゐると、眞ン中に座つて頭と威張り返つてゐるのは何處かでみたやうな男、よく〳〵考がへると、過日丹後宮津で出會つた渡邊大角齋といふ男であるから、低聲で何やらヒソ〳〵大六と話してゐるところへ先刻の手下が歩つてきた、　△「オイ、此方へきねゐ〳〵……」和泉大六はノッコリ這入る、大角齋の伊吹太郎はチッとみてゐたが、　頭「手下になりたいといふのは貴樣か……、　大「ハヽア……、何んだ、頭といふのは貴樣か……、　頭「ナニ、貴樣は乃公を知つてゐるのか、乃公はッイそみたこともないが……、
大「貴樣は丹後宮津の遊藝で、試合に負けて逃げ出してきた渡邊大角齋といふ奴であろう、　山「エヽッ……、　大「もう少し強そうな奴かと思つたら貴樣

か、これでは退治甲斐がないわい、渡「ナニ、此奴ッ……退治甲斐がない、小癪なことを吐かすな、如何にも乃公は渡邊大角齋ぢや、丹後宮津を逃げたのではない、用があつたから立ち歸つたのだ、あめときは鐵棒が少し輕かつたので勝負は止めたが、この鐵棒は四十貫あるぞッ、グズ〳〵吐かさず手下になればよし、さもないときには打つ潰すぞッ……」側に立てかけてあつた鐵棒をグイッと引き寄せた、新「ハッハ……鐵棒るな〳〵、貴樣は負け惜しみをいつても、確かに乃公に勝負を負けて、何時の間にか逃げ居つたではないか、白狀せい〳〵……」と、いひながらスッと新八郎姿を現はした、大角齋も大いに驚ろき、山「オノそういへば貴樣は過日の矢鱈なんとか吐かした奴よくも圖々しく此處まで來居つたな、ヨシッ先年の仇、幾度でも打つ潰してやるから覺悟せい……、大「ヨシッ、サア來い……、御主人、此奴は私しにお任せを……、新「ウム、ではシッカリ遣れ……、大「吐かすな、この野

郎、それッ遣つ付けろッ」と、いひながらスックと一座惣立ちとなつた。

○まだギタバタいたし居るか

五六十人の手下共、二人目がけてドッと打ちかゝり斬りつける、和泉大六親議りの備前兼光の太刀大上段に振り被り、大「サア來いきたれッ」と、左右に容赦なく斬つて落す、新八郎はパッと姿を隱して群がる中へさんで入り、畢丸を引ッ掴む、毆る、蹴るといふ有樣、痛いキャッとゝび廻るを、大六ズバ〳〵斬り廻る、渡「ヨシッ、乃公が打つ潰してやるぞ……」と、大角齋四十貫と誇る鐵棒を振り被つてビシーリ〳〵大六望んで打つてかゝる、大「サア來いッ」と、大六大角齋相手に斬り結んだが、ナカ〳〵勝負が決しない、それとみて新八郎はスックと姿を現はし、新「ヤア〳〵大六、貴樣は手下を追ひ卷れ、乃公が此奴を討ちとつてやるから……、サア水膨れ、用心せいッ……」と、

云ひながら、大角齋が勢ひよく振り下した鐵棒の先きをグッと引ッ摑んだ、

渡「オ、此奴ッ……、ウム……」と、大力を絞つて捻ぢ合つたが、新八郎忽ち大角齋の利腕引ッ摑んでグイッと捻ち伏せ、グイ〳〵押へつけた、怪力無双の新八郎に押へつけられては流石は大角齋も堪らない、渡「ウム……、コヽ、此奴ッ……、」新「まだチタバタいたし居るか、この上は容赦なく素ッ首捻ぢ切つてやるぞ」と、両手をかける、渡「ウヌ……待て〳〵……、」新「待てといふからは降參したか、」渡「ウム……、仕方がない……參つた、

新「ナニ、仕方がないとはどうだ、」渡「イヤ、ほんとに參つた……、」新「オイ〳〵大六待て〳〵、ヤア〳〵手下の奴等、貴樣等の頭と頼む大角齋は降參いたしたと申すが、まだ貴樣等は手向ひ致すか……」と、いはれて、多くの手下共は互いに顔見合はせ、眼ばかりパチ〳〵させてゐる、渡「ヤア一同待て〳〵、どうかこの手を放してくれ、」新「御主人、こんな奴は素ッ首打ち落し

てしもうが世の人々のため、拙者が……、」新「待て〳〵、降參したとあるからは、生命だけは助けてやれ」と、手を放す、剛情我慢な大角齋もホッと息吐き、渡「どうも貴樣は余程強い奴だ、乃公も斯う易々と組み伏せられたことも ないに……、どうも貴樣には苦手とみへる、」新「何を吐かすぞ、貴樣は武術家と誇りながら、山賊となつて往來の旅人を苦しめるとはどうだ……、」大「第一貴樣は豊臣家の浪人などゝいふが、一体何人の味内ぢや、」渡「阪方七手組の一人野々村伊豫守の幕下に居つた渡邊源太左衛門の一子ぢや、」大「ナニ、七手組の野々村伊豫守の組下、渡邊源太左衛門の……、」渡「ウム、貴樣も豊臣家の浪人か……、」大「如何にも……我れは同じく伊豫守殿の臣和泉大八郎の一子大六といふものぢや……、」渡「オ、和泉大八郎氏の悴か、してこの男は……、」大「この男とは何をいふ……これぞ野々村伊豫守殿の御妾腹なる新八郎殿ぢや……、」渡「エッ……ではあの伊豫守殿の……イヤ、こ

れは知らなんだ、どうも早や失禮を……、新「ハツハ……イヤそう分つてみれば何も謝まるには及ばぬ、して大阪没落後は何處に居つたのぢや、渡「ハイ、それについてはいろ〳〵お話しもでございます、マア何もなけれど御酒なりと……、オイ〳〵野郎共、このお方は乃公の御主人だ、皆お詫び申してその邊の死骸を片づけて酒肴の用意をしろ、△「ヘイ〳〵、どうも知らぬてさゝて御無禮いたしました」と、一同詫びをいたしてその邊をとり片づける、大六のために斬られたのが、二十五六人、新八郎のため氣絶させられたものが三十余人もゐる、然し大勢で片づけるから直ちに掃除が出來た、大角齋は一同に指圖して、手下の奴等にも酒を飲ませる、此方には三人、十八九才の美人が三人酌をする、渡「私しは彼の戰ひの節殘念にもまだ十二才の幼年、父に出陣の供を願つてもどうしても許してくれず、仕方がなく、母と共に一時雲州松江の城下近きさとろに逃げ延びてゐたが、戰は遂に大阪方の敗北、殘黨の詮議

嚴しく、私しは近所の金性院といふ寺へ坊主にやられました、だがどうも抹香臭い坊主になつてゐる氣もしないので、隱れて武術を習ひ、丁度二十才の當時母が病死したのを幸ひ、寺を立ち出で、武術を修業して九州路に入り、柳川の巖上寺太左衛門といふ一刀流の先生について永年修業、遂に一刀流の免許を得、九州の道場を打ち破り、中國に渡り、丹後宮津の城下で貴君に出會ひ苦もなく敗をとつたのを殘念に思ひ、ます〳〵武術を磨き、始めは二十五貫の鐵棒でゐつたが、この頃では四十貫のさゝりかへ、此處までくると、伊吹太郎といふ山賊がゐたので、打つ潰して、今ではその儘伊吹太郎といつて、實は德川家の處置が癪にさわるので、軍用金を集め、時機を見計らひ旗をあげんと圖つて居りましたが、貴殿方に出會はうとは思はぬことでございました、新「フム、そうか、然し目的を達するまでは手段を撰ばずといふこともあるが、みればかゝる婦女を引ツ攫つたり、罪もなき旅人を苦しめるのはよくないではな

いか、渡「イエ……ホンの二三人……、新「二三人でも一人でもよくない
てんな女は早やく歸してやれ、渡「ハイ……、して貴殿方はこれから何處へ
お出でになりますので……、新「これから、實は云々斯々、一方傳助さい
ふ奴を探しながら、一度江戸表へ行つてみやうと思ふ、渡「では是非とも私し
をお供を……」と、いふので、いよ〳〵主從の約を結び、それより手下一同
を集め、盜み貯めた金子が五百余兩もあつたので、二百兩殘して、殘金と品物
とを悉く分ち與へ、再たび惡事をせぬやうにいひ聞かせ、それ〴〵山を下らせ
た、女は五人ゐたが、これにも手當てを與へ、それ〴〵家へ送り屆けさせ、大
角齋は二度の敗北クルリ坊主頭に剃り落し、坊主姿となつた、その翌朝
新八郎は再たび山賊の住ばぬやうにと山寨へ火を放ち、大六、大雲坊の兩人を
引き連れて山を下り、加納の宿より道を折れ、大垣の宿より名古屋へ出で、東
海道を江戸へ下ることゝなつた、主從三人は殊の外仲がよい、渡「オイ和泉

斯う無事にブラ〳〵歩いてゐるのも詰らんでないか……、大「そうだ、何か
事件がないと宿についても酒が旨く飲めん、渡「そうだ、この邊を歩いてゐる
奴は皆德川に緣故ある奴ばかりだから小口から喧嘩を吹つかけてやろうか、
大「ウム、それも面白かろう」と、二人は頻りに相談をしてゐる、新「オイ
〳〵二人とも詰らぬことをするな、今に暴れることが出來てくる、マア〳〵溫
和しく歩け〳〵……」と、新八郎は二人を制しながら、岡崎の宿も通り過ぎ
濱松の宿までくると日が暮れたので、日高屋藤助といふ宿へ泊り込んだ。

○前後は乞食の供ぢや

翌朝起き出でゝみると、どうやら曇つてゐるので、別に急ぐ旅でもないから、
その日一日は滯在と定め、腰を据へて主從三人はグイ〳〵と飲み出した、やが
てはグツスリ寢つて一同ゴロリと寢込んだ、やがてムツクリ目を覺ました和泉

六、大「オイ〳〵坊主、起きろ〳〵……、渡「何んだ……、大「なんだではない、大將がみへんぞ、渡「ナニ、太將がみへない、ハヽア又一人で、ノコ〳〵出て行ったんだな、大「どうもそうらしい、ヤア雨もどうやら降らぬやうだ、一つ城下見物と出かけやうか、渡「フム、それもよからう、待て〳〵、もう一つ飲んでからぢや……」と、盃をあげてゐるところへ、亭「ヘイ、お客様、お調べでございます、渡「なんだ、調べとは……、亭「ヘイ、お役人様がお出でになりましたので……、渡「フム、役人か」と、いってゐると役人らしき男二三人連れ立って參り、○「アイヤ、それなる武家、姓名は何んと申される、渡「他人の姓を聞かんと欲せば何故自分から姓名を名乘らぬ、○「拙者等は當地町奉行所のものであるが、姓名は何んと申して何處へ行かれる、渡「フム……役人か、拙者は九州の涙人渡邊大角齋……、此處にゐるは門弟イヽ今井大次郎と申すものである、これより武術修業のため東國邊へ

參らると存じてゐる……、○「オヽ高名なる渡邊大角齋先生で……、して今一人お生でと承はりましたが……」一時武術修業者間でも九州の涙人渡邊大角齋といへばその名を轟ろしてゐた、從がって役人も至極く丁寧だ、大角齋意氣揚々として、渡「ウム、今一人も門弟ぢや、野村新太郎といふものぢや……、○「アヽ、左樣でござるか……」と、丁寧に禮をして立ち去った、渡「どうだ、大六、貴樣が幾何威張っても乃公には敵ふまい、役人でもペコ〳〵して引き退つたろう……、大「然し門弟とはどうだ、いくら御主人が姓名をいふなと仰しやっても……、渡「怒っても始まらん、渡邊先生でございますかと最敬禮をいたしてゐるではないか……、大「何を吐かぞ、あの役人が餘程毫祿をしてゐるのだ、誰れが貴樣等に最敬禮をする奴がゐる、貴樣は御主人まで門弟などヽ……、渡「御主人といっても、武術に於いては乃公の方が一枚上だ、御主人はチョイ〳〵怪しいことをやるが、われさへ

なければ乃公の方が上手よ、丹後宮津でも乃公は逃げたのではない、御主人が鐵棒ではどうも貴様には叶はん、木太刀で勝負をやろうといつて互角になつたのだ……」と、いふ折りしも、大角齋の頭をポカーリプン毆つたものがある

渡　痛いッ……」と、振り向くと、何時の間にか新八郎が突立つてゐる、

新　時何貴様に叶はんといつた……、渡、イヤ……、何時の間に……、

ウヲーッ……、どうも……、大「ハッハ……それみろ、最敬禮などゝ威張つて居つてもカラ意氣地がないではいか……、渡　どうも……御主人は人が悪い、怪しい眞似をして突然頭を毆るとは……、新　イヤ、餘り貴様が熱を吹いて居つたから……、マア〳〵熱冷しに……、渡　熱冷しとは驚ろいた……、大　然し御主人、今役人が調べにきましたが、一体何事でせう……、新　それは譯があるのだ、大「ヘエ、譯といふのはどんなことで……、渡　泥棒か何かを探してゐるので……、新　イヤ〳〵そうではな

い、實は明日この街道筋を伊勢津の太守藤堂和泉守が往來するので、もしや狼藉者でも出はせぬかと役人が注意してゐるのぢや……、渡　フム……あの高虎の行列に……、新　そうぢや、何んでも藤堂には大阪殘黨の士もときゝ狼藉をしかけ、殊に此度は何か德川家より密使を受けて京都まで行くそうぢや……、渡　フム、そいつは面白い、彼奴如きは大名……天下の大老などゝいはしておくのは勿体ない、どうぢや大六、一つ高虎の行列を暴らしてやろうではないか、大「ウム、よかろう、彼奴は一人の土百姓から三十五萬石とは異數の出世、その恩義も打ち忘れ大阪方へ弓引きした大名……、新　コレ〳〵、大きな聲を出すな……、渡　大きな聲を出すなと仰しやるが、藤堂奴がそんなに威張つて通るのを……、新　ヨシ〳〵、分つた〳〵、それについては只だ暴れても面白くない、此方も行列で途中で衝突をやらかしたら面白からう……、渡　行列……、只つた三人で……、新　イヤ、三人では

面白くない……、渡「ぢやといつて外には……、新「ある〳〵、何處かの邊に乞食が居ろう、少しの金子を遣はせば喜こんでくるに違ひない……渡「乞食……、新「左樣……、眞ン中に駕籠にのつて一人扣へ、前後は乞食の供ぢや……、渡「なる程、それも一興ぢや……、新「その手段は云々斯々……、ついては大六、早速乞食の群れを集めておけ、大「ハッ……畏こまりました……」和泉大六ノコ〳〵出かけ、濱松城下の外れまできて、ウロ〳〵探してゐると、松並木に二人ばかりの乞食がゐる、大六眺めてズカ〳〵と近寄り、大「コレ〳〵乞食〳〵……、○「お有難うございます、足の不自由な體……、どうか一文やつておくんなさいまし……、×「どうぞや〳〵……、大「やる〳〵、金子はやるが一つ相談があるのだ、○「ヘエ……、私し共に相談といつてどんなことで……、大「外でもないが、貴樣等の仲間は何人ゐる……、○「ヘエ……、仲間は三十八人居ります……、大「

ナニ、三十八人……、たつたそれッぱかりか……、○「イエ、人數がお入用なら外に五十人でも百人でも居ります……、大「ウム、百人もゐるか、○「そりァ女子供を集めればこの街道に三百人程居ります、大「そうか、それは有難い、では百人ばかり人數を集めてくれ……、□「ヘエ、それをどうなさいますので……、大「實は我れ等或る大名のお方のお供をしてきたのだ、○「ヘェ……、大「ついては明日東を差してお出でになる、○「でも明日は伊勢の藤堂樣の御通行だといつてお役人樣が喧ましくいつて居られますが……、大「その藤堂の以前の御主人筋に當る方だ、それでこの頃藤堂が急に出世して威張つてゐるから一つ威嚇かしてやろうと思ふについて行列が入るそれで貴樣等の仲間に頼むのだ、尤とも只だではない、一人に一兩づゝやる、又も！行列が衝突して、藤堂の家來を一人でも田の中溝の中へ落し込んだものには一人に付き一兩づゝやる、逃げたいものは逃げても搆はん……、○「一

人に一兩づゝ……、何處までゝでございます……、大「マア懸川までといひたいが、もし途中で出會つたら、都合によつたら其處までぢや、然し貴樣のやうな躄しはどうも困るな、○「イエ、ナニ……オーイ……、皆來い〳〵……」と、今までの躄はスツクと立ち上つて大聲に呼ばる、すると彼方此方の水かげから、多くの乞食がゾロ〳〵集まつて、×お有難うございます、□「どうぞや〳〵……」その臭いてさゝいつたら鼻もちもならない、大「ウワーツ……臭い、其方へ行け、側へ寄るな〳〵……」それから今の通りにいつて聞かせると、一兩の金子儲けと聞いて大喜こび、×「では旦那、明日の朝早やくお間違いのないやうに……、乞食だつて二人や三人田の中へ投げ込む位いなんでもありません……」と、ワア〳〵騒いでゐたが、なるだけ内密にしてゐるやうと、酒代として十兩の金子を與へてその日は立ち歸つた。

○生意氣なことを吐かすな

金谷の宿を發した藤堂和泉守高虎公の行列が、正々堂々と懸川の宿を通り過ぎて、袋井、見付、天龍州も打ち渡り、濱松城下近く橋場の縄手に差しかゝつてくると、行手から、下に〳〵と制止の聲をかけて行列ではない、一團の人數が悠々と歩つてくる、藤堂家の先供連中は驚ろいた、それもその筈、人數は百人前後でもあり、何れもボロ〳〵の着物を着た非人風の男、それに女もさき〳〵交つてゐる、眞ッ先きにはみあげるやうな坊主武士が太い〳〵鐵棒をズドン〳〵と杖に突きながら、△「下に〳〵……」大音に呼ばりながら進んでくる、甲「オイ、何んだ、あれは……、乙「サア何んだかサッパリ分らん……、甲「何にいたせ、天下の大老の行列先きに恐れもなく威張り返つてくるとは怪しからんではないか……、丙「左樣〳〵、一つ咎めて追拂つて

しまへ……」そのうちに彼方は下に〳〵とだん〳〵近寄つてくる、早やくのパラ〳〵ッと、駈けつけ、甲「アイヤ、全体この同勢は何者であるか、何れもものの名は何んといふぞ」と、怒鳴りつけた、このとき眞ッ先きにあたのは例の渡邊大角齋だ、渡ハ、ア我れ〳〵の姓名を聞かんといふのか、人の姓名を聞かんと欲せば、何故自分等の姓名を名乘らぬ、此處を御通行なさるを誰れ樣かと思ふぞ、阿呆者奴ッ、片寄れ、下に〳〵……」これを聞いて藤堂家の先供連中もだん〳〵と集まつてきた、みると行列といつても乞食が竹切れ棒切れを引つ擔ぎ、眞ン中頃に一挺の駕籠があるばかり、仁輪加の行列よりも酷い、甲「默れッ、我れ等の行列は既に先き觸れがいたしてある筈だ、當時天下の大老職をお勸めなされ、伊勢の津に於いて三十五萬石を領せられる藤堂和泉守高虎公なるぞ、殊にこの度は上樣の命を受け、都へ登られんとするところ、みれば乞食共の行列、早やく片寄らつしやい……、波ホヽヽ……

……藤堂和泉守高虎の行列か、それでは尙ほ寄ることは出來ぬ、貴樣の方で土下座いたして我れ等の通行を待て、此の行列の主人を誰れかと思ふ、前大和大納言秀長公の落胤、豊臣秀春さいふお方なるぞ、貴公共の主人には舊主に當るお方であろう、その旨傳へて土下座せいッ」大和大納言秀長さいへば豊臣太閤殿下の御舍弟で、藤堂和泉守が仕へた舊主人で、元來高虎さいふ人は、初めは名もなき一介の土民であつたが、至つて大量の人物、緣あつて秀長公に仕へ、その器量を認められ、累次出世して八千石、佐渡守にまづ任官した、然るに秀長公は突然發狂して自から割腹して果てられ、お家は斷絶となり、高虎公も浪人してゐたところを、秀吉公の見出しに預かり、重く用いられ、運よく、だん〳〵異數の出世をしたのである、さればその落胤さいへば舊主に當る、家來の者は一時はハッと思つたが、何んにしても怪しい、又たとへそれにしても當時は天下の大老職、殊に將軍家の御命を受けて都へ

登る途中でわるから、退け〳〵と怒鳴りつけた、渡「イヤ、退かぬぞ、乙「ウム、強つて退かぬとあれば我れ〳〵に於いても所存があるぞ……、渡「何を生意氣なことを吐かすなッ……」と、先きに立つたる一人の奴の横ッ面をポカーリ、ブン毆つた、大力な大角齋に毆られては堪らぬ、×「痛いッ……」と、叫んで打つ倒れる、渡「オイ皆、早やく通れ〳〵、手向ふ奴等はての鐵棒で打つ拂つてやるから……、大「サア來い〳〵……、下に〳〵……」と、和泉大「先きに立つて乞食の一隊は遠慮なくも藤堂家の行列の中へ割り込む、先供連中はこれを制しやうとすると、大角齋は下に〳〵と、ビユー〳〵鐵棒を振り廻すので近寄ることも出來ない、その中に藤堂家の行列はヒタリ止まる、乞食の奴は一人田の中へ突き落せば一両の金子になるといふので逃げもしない圖々しく割り込む、乘物の中に居られた藤堂高虎公は行手が餘り騒々しいので近侍の者に聞かれると云々斯々の事と、藤「ナニ、大納言

秀長公の落胤……、秀長公に落胤はない筈、何ものか僞はり申すに相違ない、且つての旧上様の使命を受けて都へ登る予の行所に向つて狼藉働らく不埒な奴、遠慮なく打ちさつてしまへ、△「ハッ……」と、答へて近侍は供頭の安井主膳にてのことを傳へる、供頭は相手も舊主人の落胤といふので、少しは遠慮をしてゐたが、それと聞いては容赦もない、安「それッ者共、狼藉者を打ちされ、手に餘らば飛道具を以つて打ちさつてしまへッ」と、馬上に突立ち大音に下知を下す、大勢の供人は心得たりと、乞食の一隊を押し包んで打ちされ〳〵と犇めき騒ぐ、乞食の奴等もそれ始まつた、一兩だ〳〵と中には打ち向ふ奴もある、渡邊大角齋に和泉大六、暴れるのはこんなときだと、大角齋は鐵棒、大六は側の松の大木を根てぎに引き抜き、両人とも荒獅子の如き勢ひでビユー〳〵無二無三に暴れ出し、一度に三五人づゝバッタ〳〵と打つ倒す、僅か二人に散々に藤堂家の人數は追ひ廻はされる、それとみて供頭の安

井主膳は、安「ヤア〳〵相手は多寡の知れたる人數……それッ鐵砲組、容赦なく討ちされ〳〵……」と、下知を傳へると、鐵砲組五六十人火縄に火をつけて打ち出さんとすると、早やくそれとみた、野々村新八郎、口中に何やら唱へて九字を切ると、側の小川の水はサッと空中に舞ひ上り、バラ〳〵ッと鐵砲組の頭の上から、雨の如くバラ〳〵降つてきた、○ヤア雨だ〳〵……

△「コリアどうもならん……」と、マゴ〳〵してゐるところへ立ち寄つた新八郎、小口から火縄を採み消す、ところへ早やくも大角齋、大六の二人は立ち寄つて小口からピュー〳〵、新「それッ、早やく馬を分捕れ〳〵」スッカリ手筈が決めてゐるので、二人は馬にのつてゐる奴を追ひ廻して馬を分捕つて暴れ廻る、そうなると乞食共は早やくもバラ〳〵逃げ出す、この樣を遠くからみてゐられた、和泉守高虎公、藤ヤアいひ甲斐なき者共かな、馬引けッ」と、大音に呼ばれたる折りしも、彼方の方から一匹の荒馬、ドッとゝびきたつた、

家「ヤア危ない、とり押へろ〳〵」と、急ぐ内に、馬は高虎公の側へ近よつたかと思ふと、突然高虎公の身体はスーッと宙に吊られた、家ヤア、御主君が……」と、立ち騒ぐ間に、馬は彼方の方へタッ〳〵……、家ヤア怪しの奴なるぞ、それッ……」と、バラ〳〵と追ひかける、ところへ渡邊和泉の二人も馬をとばして、藤堂家の家來を四方に刎ねとばし、今や綱手はときならぬ大騒動が始まつた。

○一二遍往復させて遣る

藤堂家の家來は主君を攫はれたので狂氣の如くドシ〳〵駈けつけると、それを二人が遮ぎつてバッタ〳〵毆りつけろ、そうなると飛道具を放す譯にもいかず只だアレヨ〳〵と騒ぐばかり、高虎公を引ッ攫つたのは野々村新八郎だ、天龍川の堤坊近くまでくると、馬よりヒラリとゝび下り、高虎公を放した、高虎公

も怪力無双の新八郎に、然かも忍術を以つて引ッ摑まれたのでどうすることもでき出來ない、藤「コリヤ下郎、予を何んとするぞ……、新「イヤ、下郎でない假りにも大和大納言秀長公の落胤といへば汝の舊主であろう……、藤「いふな秀長公には落胤などのわらう筈がない、新「如何にも眞實、我れは落胤ではない、然し我れ等は飽くまで豊臣家に緣故深きもの、又貴殿の身に害せんとするものではない、然し貴殿も今でこそ三十有余萬石の太守、天下の大老職などゝ權威を振つてゐられるが、これと申すも太閤殿下のお取立てによつてゞあろう、聞けば德川家に於いては、豊臣家の殘黨といへば尙ほ嚴しき刑に處すとやら、何故そのとき貴殿はそれ等の者のために辨じてやらぬ、强ち德川天下に對して無反でも企むものならまだしもなれど、世を忍び、涙々して憐れな生活をいたしゐるものまで引き出して詮議に及ぶとか、それを貴殿が傍觀して一言も發せぬといふは、實に言語同斷なり、これを一言貴殿にいはうと思つて

圖らず無禮いたした、されば以後さる場合にば必らずそれ等の者のために辨じその身の立つやうにしてやられい、もし飽くまで豊臣家の恩を忘れ、殘黨詮議などゝ仰せられるときには、お氣の毒ながら直ちに首級を申し受ける、確かと御承知あられい」と、いふかと思ふと、その姿はパッと消へてしまつた、高虎公は怡かも狐にでも摘まれたやうにキョロ〳〵してゐるところへ、早やくも駈けつけきたつた近侍の面々、近「我が主君、御無事でございましたか、藤「イヤ、下郎奴、如何にも不埒千萬な奴、予を此處まで連れ參つたのは忍術遣いである、そう〳〵手を廻して彼奴等を召し捕れ……」と、殊の外不機嫌、癇やう其處にあつた馬にのせて、彼方へ引ッ返し、行列を立て直して、濱松城下まで急ぎ、濱松の城主高力攝津守にてのことを申し込れて援助を賴む、高力家い於ては大いに驚ろき、早速人々を遣はして曲者を召し捕らんとなし、懸川の城主朝倉筑後守へもてのことを傳へて曲者召し捕り方を賴んだ、然

し狼籍者は何處へ逃げ込んだかサッパリ分らなかつた、其處で藤堂家に於いては三人の者を召し捕つたら千両のお禮をすると觸れ出した、サアそうなると慾に目のない町人百姓等までも驅ぎ出し、摑にもなく召し捕つてくれんなどゝ力味返つてゐる、早やくも秋葉街道へ逃げ込んだ三士はこれを聞き、渡「ハッハ……、いよ〳〵面白いことになつてきた、これからは德川加擔の大名を片ッ端から荒膽を挫いてくれん……、大「ウム、この上は江戸へのり込み、飽くまで將軍と威張つてゐる奴等を遣つ付けやてらう……、新「然しそれもいゝが、第一に傳助といふ奴を探さねばならぬ……、大「それもそうでございます、然し三人千兩とは、藤堂家でも大分怒つたとみへるわい」と、何しろ何れも血氣者揃ひ、恐れ氣なく大膽にもノッシ〳〵と金谷の宿へ出てきたり、桝屋平助といふ宿屋へ泊り込んだ、湯に這入つて一同悠然と酒を飲んでゐた、下では亭主に番頭善吉、善「どうです、旦那、あの二階の三人連れのお客樣は

怪しいではございませんか、この頃お觸れの藤堂樣のお行列に狼籍を働らいた奴に違ひありませんぞ……、亭「何故だ……、善「何故といつて、世の中にあんな鐵棒を突いて歩いてゐるものは滅多にありません……、亭「然しその三人ならいくら圖々しくつてもこの邊にマゴ〳〵してゐまい、善「然し三人の年頃といひ人相といひよく似て居ります、三人捕へたら千兩といふ話し、私しが一つ……、亭「馬鹿ないへ、相手はお武家、然かも恐ろしい強そうな人だ、やり損なつたらそれこそ大變、それより お役所へ訴たへて往け、百兩や二百兩の御褒美は下さるだらうから……、善「イ〳〵畏こまりました……と、番頭は直ちに表の方へ驅け出し、金谷の代官所へ、その旨を屆け出でた、代官池田太郎左衛門は大いに驚ろき、池「ウム、よくぞ申し出でた、然らばさり逃さぬやうにして、酒でも十分飲ましてグッスリ醉はしておけ……」と申し付け、直ちに下役人の中で心利きたる一人を遣はしてそれとなく樣子を窺

がはせると、どうやらそれに違ひないといふので、代官は直ちに召し捕りの人數を集めた、此方桝屋の二階では主從三人頻りに酒酌み交してゐたが、急に野々村新八郎の姿がみへなくなつた、

渡「ハツハ……驚ろくこともない、御主人は怪しな眞似をする、マア〳〵飲め〳〵……」二人は献しつ献されつやつてゐると、新八郎はスツクと姿を現はした、

大「ヤア御主人、何處へお出でゝした、」

新「イヤ、今便所へ往かうと思つて下へ降ると云々斯々、番頭が訴たへに行き居つた、今し召し捕り役人がくるから油斷するな……、渡「番頭か……太い奴だ……、」

大「一つ締めあげてやらう、」

新「待て〳〵、一つ番頭を弄つてやるから……」パン〳〵手を叩くと、折よく番頭が、

善「ヘイ、お呼びでございますか」と、歩つてきた、

新「ヤア番州か、よくきた、マア此方へ這入れ、今は又御苦勞であつた、役人は何んと申した、直ぐに參るからさり逃さぬやう……酒を十分飲ま

してグツスリ醉はしておけと申したか、

ハツハ……、御苦勞〳〵、どうかドシ〳〵酒を持つてきてくれ……、

善「ヘエ……」と、番頭は呆れ返つて下へ降り、

善「旦那、大變〳〵……、

亨「どうした……、

善「どうしたではございません、あの三人連れの奴は云々斯々、立ち聞きしてゐやうなことをいひます……、

亨「フム、妙な奴だな……早やくお役人さまがきてくれゝばいのに……、氣の毒だが、もう一度往つてくれ、

番「ヘイ〳〵……」と番頭は又役所へ駈つけたが、忽ち歸つてくると、又二階でパン〳〵手が鳴ろ、番頭あがつて往くと、

新「イヨ……、番州、御苦勞、どうした、急ぎに往つてもまだ來んか……、

善「ヒエ……、

新「早やく來んと、乃公達も睡くなる、どうだ、もう一度催促してくれんか……、

善「ヒエ……、

新「そうして酒がなくなつた、一本や二本づゝでは便りがない、一度に五六本づゝあげてくれ……」

番「頭ます〳〵驚ろき、

善「旦那、いよ〳〵薄ツ氣味の惡い奴

でございますぞ」その内に此方代官所に於いては大切な捕物であるから、代官池田太郎左衛門馬上で先き立ち、七八十人の捕手の役人を引き連れ、ドシ〳〵桝屋方を差してのり込んできた、新「イヨ……どうやら來居つた樣子だぞ……、大「フム、きましたか……、渡「ウム、ヨシッ……」と、片側の鐵棒を引きよせる、新「ハッハ……沈着け〳〵、乃公が一二遍往復させてやせてやるから、みて居れ〳〵……」と、いひながら立ち上つて椽へ立ち出でた。

○此の鐵棒喰つて往生せい

その内にカポ〳〵と馬蹄の音、續いて大勢のガヤ〳〵騒ぐ聲が聞へ、御用提灯を高々振り廻しドシ〳〵のり込んできた、野々村新八郎天を仰いで九字を切ると、何處よりともゴー〳〵水でも出るやうな大音、忽ち桝屋の前は一面の水

となつた、○「ウワーッ……、水だ〳〵……、△「フム……、こんなところに川のある筈がないのに……、□「ないといつても……、二三日前の大雨で大井川から水が出たのかも知れん……、代「早やく進め〳〵……」代官先きに進む、△「イヨ……深いぞ〳〵……、○「ウワーッ……馬鹿に水が出たものではないか、コリアどうちや……」七八十人の役人、狐にでもつまゝれてゐるやうに、川を渡るやうな恰好して、抜足差足で歩いてゐる渡「イヨ……、馬鹿奴、あの態はどうだ……、大「ホヽオ……コリア妙だ、これから御主人、どうなりますので……、新「サア一つ驚ろかしてやれと、又も九字を切ると、彼方の方パーッと明るくなつた、何處からみても火事の樣にみへる、一人の役人ヒョイッと氣がつき、□「ヤヽッ……火事だ〳〵どうやら役所のやうだ……」と、いふ聲に、一同エヽッと驚ろいて後方をみると、遥は如何に、炎々天を焦さんばかりの火勢、代官もこれを眺めて、池

ヤア火事ッ……、捨ておきにならん、それ一ト先づ引ッ返せ……」と、命を傳へると、一同火事だ〳〵と彼方を差して引きあげ、役所間近くきてみるとどうも火事らしくもない、△「オヤ、コリア妙だぞ〳〵……、□「お代官様何處も火事らしくはございません、池「ウム、もう鎮火いたしたのかも知れん一應門番に聞いてみろ、△「ハッ……」と、答へて一人の下役ドシ〳〵門のところまで駈けつけ、△「アイヤ門番衆、只今火事の樣子であつたが、最早や鎮火いたしたか、門「ナニ、出火……何處がでございます……、△「お役所が……、門「冗談おつしやつては不可ません、只今私しが夜廻りに廻つたばかり……、△「フム……コリア妙だ……」と、下役人は此方へきたつて代官にいふ、池「ハテ妙なこともある、この間に三人をとり逃しては一大事……それ往けッ……」と、又も桝屋を差してドシ〳〵駈けつける、早やくも二三丁手前までくると、又も後方の方が赤々として、さも大火のやうにみ

へる、○「ヤア大火だ……、×「オヤ又火事らしい……、池「イヤ、捨ておけ〳〵、曲者をまづ引ッ捕へろ……」と、尙はも駈け出さんとする折りしも、近所の半鐘がヂヤン〳〵と亂打ちし、池「ヤア此度こそは眞實の火事らしい、それッ引きあげッ……」と、ドシ〳〵引ッ返してみると、何んの變つたこともない、マサカ野々村新八郎が忍術の極意を以つて火事とみせ、大水さみせてゐるのは氣がつかない、二三度駈け廻らされて何れもフー〳〵いつてゐる、それでも大切な曲者逃がしてはならぬと、又も桝屋を差して駈けつけると、又も前にも倍した大水、池「早やく渡れ〳〵、△「早やくといつても斯う深くなつては……、○「どうして今日はてんなに水が出たのだろう……」と、ヤア〳〵いつてゐると、番「お役人樣〳〵、貴君がたは何をしてゐらつしやるので……、□「イヨ……、番頭か……どうだ……急にてんなに水なんか出て……、番「冗談仰しやつては不可ません、何處にも水なんか出て

はゐません、此處から川までは間がゐります、早やくきて下さらんと三人は逃げてしまひます、○「でもこの水……オヤ〳〵どうぢや、あんなに水があつたのに、△「フム……、コリア、妙だぞ……、池「ハヽア狐狸の仕業かも知れん……不埒な奴だ、それ早やく進めッ……」と、番頭の案内によつて桝屋へのり込み、二階へゐがらんとして梯子段の下まで往くと、野々村新八郎が姿を隱して控へてゐて、チョイ〳〵引つ攫んでブヽン〳〵二階へ投りあげる、すると上には和泉大六が控へてゐて、ドスヽン〳〵座敷へ投げ込む、座敷でも表障子を開け放ち、十角齋がゐて、渡ヤア、面倒臭い奴等だ」と、一度に二三人づゝ引ッ攫んで大道へ投げつける、役人は驚ろいたの驚ろかないのぢやない、大道へ轉がり落ちて足腰痛く打ちウム〳〵唸つてゐる、池「コラ〳〵どうした〳〵、……○「ヒエ〳〵何んだか分りませんが、二三度投り出されると此處へ落ちたんで……」余り手早やくやられるから向ふ喰もない

これではならぬと代官はその邊に加勢の人數を募らせ、自身眞ッ先きに、馬よりとび下り、代「續け〳〵……」と、ドン〳〵這入り込んだ、又も新八郎の忍術にかけられて、ドス〳〵廊下を通つて裏庭へ通り抜け、池「ハテナ……此處は裏庭でないか、早やく二階へあがれ〳〵……」と、何時か戸外へとび出してゐる、池「オヤ〳〵……」と、あがつたかと思ふも、渡「ヤア〳〵水ッ棄役人共、この鐵棒喰つて往生せいッ」と、大角齋、大音に呼はりながら、二階からヒラヲ身を躍らして大勢の役人の頭の上へとび下つた、役「それッ曲者だッ……」いふ間もなく、大角齋は四十貫からの鐵棒をビュー〳〵振り廻すから堪らない、一度に三四人づゝ打つ倒れる、その内に加勢の人數が百余名もドシ〳〵駆けつけ、得物〳〵を振り廻して討つてかゝる、和泉大六、野々村新八郎もとび下つて散々に荒れ廻り、新八郎は小口から提灯や松明を消して廻る、四邊は眞ッ暗さなる、代「ヤア油斷するな〳〵」と

いふ内にスーッと四邊は明るくなつた、一同ホッと息を吐くと、代官始め役人二人は氣絶して、のつてゐた馬がみへない、一同まず〳〵不思議に思つてキョロ〳〵見廻すと、三人は馬にのつて逃げ出す樣子、一方代官等の介抱なし、此方は三士を追ひかけ、鐵砲組はドヽン〳〵と後方から浴せかけながら追ひかけた、何しろ一人引ッ捕へたら二百兩といふ仕事であるから、大井川の河人足共まで集まつてきて追ひかける、忽ち三士は大井川の堤防までくる、新八郎面倒と思つて九字を切ると、水煙ゾー〳〵と音を立てゝ追手の前に流れ出した

□「ヤア水だ〳〵、○「ナコ、水位い驚ろくな、彼奴等は怪しいことをするのだ、水なんかありアせんぞ、追ひかけろ〳〵」と、ヂャブ〳〵〳〵這入り込む中には急流に押し流され、○「ウワーッ……、タヽ苦しい〳〵、△「此度はどうやら眞實の水らしいぞ〳〵」と、ワア〳〵ヂャブ〳〵、やつてゐる内に、早や東の方は白み渉り、ハッと思ふと眞實の水の筈だ、一同追手は大井川へ這

入り込んで苦しがつて、何時しか三人の姿はみへなかつた。

○いよ〳〵怪しい寺だぞ

三士は早やくも遠く逃け延び、渡ヤア面白かつた〳〵……、大「然し御主人の妙術には驚ろき入つた、新ハッハ……多寡が田舍の代官……術を施こすまでもないが、術の稽古をしてやつたが、なる程旨く行くわい、渡ハッハ……役人も稽古臺にされては堪つたものではない、然しどうやらポッ〳〵腹が空つてきたやうだが、何處か飯を喰ふさてろはなかろうか、新そうぢや、昨夜ロク〳〵寢もせんから、睡いのと腹が空るので……、然しての馬も思ひ切り驅けらされてフー〳〵苦しがつてゐる、オイ、皆、降りてやれ〳〵……、渡でこの馬をどうするので……、新此處へこの儘にしておいたら、百姓が養であろう、渡「それは、餘り勿体ない、も少しのつてやろうで

はありませんか、新「イヤ〳〵可哀想に……歩け〳〵……」と、三人はそれよりその邊を歩き廻つたが、どうしたことか人家らしいところもない、此度は大角齋先生フー〳〵いひ出した、新「オイ〳〵渡邊、どうした、大分餓棒を荷厄介にしてゐるではないか、渡「ハイ……別に荷厄介にしてもゐません が、オイ大六、少し代つて持つてくれ、大「馬鹿奴、平生の大言に似合はず、弱音を吹くな〳〵、そんなに邪魔なら捨てろ〳〵……、渡「友達甲斐のない奴だ、命から二番目の餓棒が捨てられるか」大角齋プツ〳〵いひながら餓棒を引つ擔ぎながら歩いてゐる、いくら歩いても人家らしいものはない、新「フム……コリア余程の深山らしい……、ヤアこれが噂さに聞く富士の裾野であろう……、新「アッ……、そういへば向ふに富士山がみへます、新「なる程……、イヤ、富士山といふのは始めてみるが、靈山といふだけあつて、ナカ〳〵美事なものだ……、大「左樣でございます……、渡「オイ〳〵もう

腹が空つて堪らん……、一歩も歩けん……、新「ハツハ……、弱音を吹くな、歩け〳〵……」と、いつてゐる内に、早やくも四邊は夕暮れの景、ウツスラと暗くなつてきた、尙ほく彼方此方を歩いてゐると、彼方森陰げに寺の門がみへた、大「オヽどうやら寺があるらしいではないか、渡「ヤツ……、寺ッ……旨い〳〵、寺でも何んでも構はん、往つて兵粮を一つ賴もう、新「待て〳〵てんなところに寺がある……、殊によつたら坊主のお仲間かも知れん……、渡「私しの仲間とは……、新「山賊の住家かも知れん……、渡「山賊、結構……、寺では精進理料ばかりで酒もロク〳〵あるまいが、山賊の住家なら酒は飲み放題だ、新「待て〳〵、ユクリ來い……」と、いふかと思ふと新八郎の姿はパッと消へた、大六と大角齋は寺を差して悠々と歩む、近くくると新八郎はスツクと姿を現はした、大「ヤア御主人……矢ッ張り山賊の住家ですか、新「サア寺には違ひないが、不思議なことには尼寺かも知れ

ん……、大「へエ……尼寺……、新「何んでも二十五六の素敵な美人、その他十七八の小娘がゐる……、渡「エッ……美人……そいつは何より だ……、大「助平奴、女といふと直ぐに目を光らしてゐる……、して御主人、其奴は皆坊主ですか、新「イヤ、坊主ではないか、何んだか得体の知れぬ奴等だ、渡「然し斯う腹が空っては口もロク〳〵利けん、怪しくつても構はん一つ行つて食物にありつきませう、大「女ばかりで外に男はゐませんか、新「男もゐる……何にしても怪しい寺だが、一つ往つてみやうと、三士は門を這入つて、玄關らしきところに突立つた、新八郎は大六に何やら耳語してその姿をパッと消した、大六は大音に、大「頼もう……」と、呼ばると、女「ハイ……」と、清らかな聲、やがて障子を開けて、十七八の美しき小娘が現はれ、娘「何處からお越しでございます……、大「斯く描者等はみらるゝ通り武術修業者、當國邊を遍歴する中、山路に踏み迷い甚だ難澁い

したてゐる、ついては今夜一宿を願ひたいものである、娘「それはお氣の毒樣……、どうぞ少時お待ちを……」と、いつて奥へ這入つた、渡「イヨ……なる程素敵な別嬪だ……、大「別嬪はいゝが、コリアどうやら酒にありつけそうもないぞ」と、いつてゐると、件の娘は出てきて、娘「只今住職は居りませぬので、何んとも申しわけ兼ねするが、定めしお困りだろうと存じてお泊りだけなら……、何しろかゝる山寺でございますから、お構ひ申すことも出來ませぬか……、大「イヤ、何も構ふてくれないでもよい、一夜宿さへ貸して下されば結構で……、娘「ではどうぞお上り下されまし……、コレ〳〵珍安〳〵、珍「ハイ〳〵」十三四才の小坊主が出てきた、娘「お二人をお案内申しあげよ、珍「ハイ〳〵どうぞ此方へ……」本堂の側四畳半の間に通した、珍「少々〳〵お狹もうございますが、どうぞ御辛抱下されまするやう……、大「アゝよい〳〵……、新「ときに坊主、此處は何んさい

ふところだ、珍「ハイ〳〵山中村と申します」と、いひながら立ち去つた、間もなく膳部を持ち出してきた、勿論寺であるから精進理料、珍　地酒でお口には會ひますまいが、どうかお一つ……」と、一升ばかり還入つた德利をおいて立ち去つた、渡ウム、洒落てゐる〳〵……〳〵」大角齋　早速飲もうとする、大「オイ、渡邊待て〳〵、得たいも知れぬ山寺、殊に酒はよくない、今に御主人が來られるであろうから、それまで待て〳〵……」と、いつてゐるところへ新八郎はスツクと姿を現はした、新「オイ、いよ〳〵怪しい寺だぞ、油斷するな〳〵……、渡ナニ、怪しい……、新「そうだ、臺所へ往くと目付きのよくない奴が頻りにケイ〳〵やらかしてゐるところをみると、穩やかではない……、渡「怪しからん、此處へは精進料理に地酒なんか持つて來居つて……、新然し待て〳〵、その酒は飲んだ積りで、返せ、此處に二升ばかり分捕つてきたから、これを飲め……」と、樽を出した、二人も大喜で

び、瞬く間に二升の酒を平らげ、飯も皆平らげてしもうと、人の足音、新八郎はハツと姿を隱すと、二人坊主がきて、膳を下げ、○「お早やうでございますが……」と、煎餅のやうな蒲團を敷いて立ち去つた、同時に、ピチーンといふ音、大「ハテナ……怪しいぞ……」大六立つて戸を開けやうとすると開かない、渡「オイ大六どうした……、大「どうやら錠でも下したやうだぞ、渡「エッ……、錠……、新オイ、騷ぐな、錠どころではない、天井をみろ〳〵……」と、新八郎が姿を現はしたので、二人は上をみてアッと驚ろいた、それもその筈、殆んど四疊半一杯もあろうといふ平石が、太い綱で十文字に縛つて上から吊してあつた。

◎蜘蛛の妖術を遣ふか

思はず二人もピタリ壁へ引ッついた、渡「ヤッ……、プル〳〵……、コリアどうぢや……、新「シッ……靜かに……」新八郎はヂーッと耳を澄まして居たが、新「實に危ないところであった、大「氣がつかずにその儘寢て居ればこの大石のために一ト潰しになるところであった……、渡フム、矢ッ張り山賊の住家であったか、大「ハッハ……山賊でも貴樣より一枚上らしい、渡「なんの……乃公がこの戸を打ち破って……」怖わ〳〵鐵棒をとる大「イヤ、何んとも薄氣味が惡い……、新「待て〳〵、戸などをこわしては面白くない、それより相手の裏を搔き、一人も逃がさず退治てやろう……、一寸その鐵蹄を貸せ……、渡「どうするので……」新八郎は鐵棒をとって天井をコッ〳〵やる、尤とも西の隅の方が漸やう人一人這入れる位いの隙があ

つた、新「靜かにわがれ〳〵……」と、其處から三人は薄氣味惡ろ〳〵天井へ這ひあがつて、新「待て〳〵、乃公が一つ樣子を窺がつてきてやるから、貴樣等は靜かにしてゐろよ……」と、氣輕な新八郎天井を傳ふて本堂の方からヒラリとび下り、だん〳〵此方へきてみると、一室の内には先刻の二十五六の女が、十七八の小娘二人を相手に酒を飲んでゐる、ところへ一人の坊主、坊「頭〳〵、どう〳〵旨くやりました……、頭「ウム、どう〳〵入れ込んでしまつたかい……、坊「ヘエ、二人とも押し込んでしまひました、頭「フム、そうかい、そんなら大丈夫だ……、娘「然しお頭、二人とも大きな奴で一人の奴は恐ろしい太い鐵棒を持つてゐる奴でございます……、頭「フム、修業者とあれば、殊によつたら手下ともしてやらうが、グズ〳〵吐かせば、あの石で打つ潰してしまへば譯はない、では一つ出かけてみやう」と、女はソロ〳〵出てくる、新八郎此奴いよ〳〵怪しとみてとつて此方へ隱れてゐる、そ

れとも氣が付かず、件の女は七八人の奴等を引き連れ、件の部屋の前までくる、何か一人に囁やくと、□「ヤア〳〵この部屋の中にゐる修業者、此處を只だの山寺と思つて泊り込んだか、この寺こそ女ながらも山姥お仙といふ山賊のお頭樣だ、キリ〳〵懷中物は申すに及ばず、大小刀まで差し出し、手下になるといへばよし、さもないときには天井に吊つてある大石で打つ潰すぞッ」と呼ばつたが、中からはウンともスッとも返事がない、△「コリア妙だ、馬鹿奴よく寢込んでゐるのかしら……、○これだけ怒鳴つたら聞へそうなものだ……」と、いひながら壁のところの小石を拔き、穴から覗いてゐたが、△「オヤッ……、コリア妙だ、中には居りませんぞ……、○「ナニ、中にゐない、では緣の下にでも隱れたに違ひない、どうせ修業者といへば、手下になる氣遣ひはない、繩を切つておしまひ〳〵」と、いふと、一人の奴は心得て繩を切るとドスーン、寺も崩れるやうな物音、どんなものでも下にゐては堪らない

確かに潰れてしもう、女「ハッハ……これで大丈夫だ……」と、心地よげに笑つてゐた、ところへヌッと姿を現はせし野々村新八郎、新「ヤア山賊、貴樣等如きの計略にかゝつて押し潰されるやうな我れ〳〵でない、イザ首差し延べて渡してしまへッ……」と、太刀の柄に手をかける、手下の奴等は驚ろいたやうな顏付きをしてゐたが、流石女ながらも山賊の頭だけあつて、山姥お仙はヂロリと眺め、仙「さてはお前は今度泊り込んだ三一かい、今もいつた通り、降參して手下になればよし、さもないときには、素ッ首打ち落すぞッ新「吐かすな毒婦奴ッ、貴樣等の手に合ふものと思ふかッ……」折しも本堂方からドス〳〵足音、大「ヤア怪しの女、よくも乃公達も押し潰さんとしたな……、渡「イデ、覺悟せいッ……」と、渡邊大角齋、和泉大六の兩人はとびかゝらんとした、手下共はアッと驚ろき、女賊お仙は、仙「オヽ小癪なッサア來いッ……」と、身構へる、渡「汝ッ……生意氣なッ……」と、大

角齋鐵棒振り被つて打つてかゝる、山姥お仙はパッと庭前へとび下る、戸外は十三夜ばかりの明月煌々と眞晝の如く輝らしてゐる、新汝れッ……」と、新八郎とびかゝらんとすると、お仙は手を十字に打ち振ると、這は如何に何時しかその姿煙の如くボーッと薄くなつたと思ふと、一疋の大きな蜘蛛が現はれ、蜘蛛の糸をフワリ〳〵投げかけると、三士の身体はグル〳〵巻きつき刀で拂へど斬れゝばこそ、大角齋は鐵棒を持つたまんまキリ〳〵舞ひをしてゐる、新「ヤア汝れッ、生意氣なッ……蜘蛛の妖術を使ふか、斯うしてやるぞッ……」と、エイッと矢聲諸共印を結ぶと、今までキリ〳〵巻きついた糸は、此度は反對にギク〳〵仙の身体に巻きつく、それとみるよりヤッと一聲、新八郎持つたる太刀投げつけると、キャッと叫んでパラリー、新汝れッ、逃がしてなるものかッ……」と、新八郎隙さず追ひかける、それと同時に大勢の手下共、○「お頭を助けろッ……」と、三四十人ドッと三士に斬つ

てかゝつた、その場は二人に任してきた、新八郎はドシ〳〵後を追ふ、此方お仙はバラ〳〵奥の室へ逃げて參り、床の間の疊を剝いだと思ふとその姿はパッと消へた、新八郎續いて開けやうとするがナカ〳〵開かない、怪力を以つてドス〳〵踏みつけると少しく端が破れたので、メリ〳〵パリ〳〵ッと引つ剝し、中へ這入ると四邊は眞ッ暗闇、然し其處は平氣の平左、新八郎は暗い縁の下へ降り、だん〳〵と往くと下は廣い座敷になつてゐて、今まで大勢の人がゐたとみへて、酒徳利や皿小鉢が轉がつてゐる、新「ハテナ……、何處へか逃がしたかしら……」と、側の岩をドーンと押してみると、大岩はドンデン返しになつて、中はズーッと道になつてゐる、だん〳〵と行くとどうやら谷間らしいところへ出た、四邊は眞ッ暗だが、新八郎チーッと透かしてみると、山姥お仙は打つ倒れてウム〳〵唸つてゐる、パラリ躍りかゝつてグッと引ッ掴むと、流石のお仙も驚ろいて、仙「ナッ……此奴ッ……」と、忽ち隠し持つた

る懐剣引抜き、切り拂つて逃げやうとする、新汝ッ……、逃げやうとしても遁げられるかッ」と、ゲイッと締めあげると、ゲッタリとしてしまつた、直ちに引ッ抱へて此方へ戻つてくると、渡邊、和泉の兩人は、手當り次第に、バッタ〳〵と打ち殺してゐる、新「オイ坊主……、大六、頭さいふ奴は打ちとつたぞ〳〵……、渡「ヤア御主人、頭さいふ奴を……」頭を打たれたと聞いて多くの山賊の手下共はバラ〳〵逃げ出した、後には大勢が死骸を其處此處に轉がつてゐる、大「ヤア女の分際で不埒千萬な奴だ……、新「その邊に隠れてゐる奴は居らぬか……、渡「御主人〳〵、私しが引っ捕へてきました……」と、大角齋血塗れになつた鐵棒を片手に持ち、片手に一人の手下をブラ下げて出てきた、新オヽ此處へ引っ据へろ〳〵……、渡「サア其處へ行けッ」と、ゴロ〳〵ッと投げ出す、○「ヒェッ……」と、手下の奴は驚ろいて逃げ出そうとすると、大六は足でグッと踏みつけた、○「ヒェッ……、

ヲヽ私しはナヽ何んにも存じませんので……、どうぞ命だけはおたす……新「ヤイ、木ッ葉泥棒、今乃公が聞くことを一々答へろ、この女は貴樣等の頭でゐろう、○「ヘヽヘイ……、お頭でございます、新手下はスッカリで何人程ゐる……、○「ヘエ、女二人を交せて七十五六人居りましたが、皆逃げだしてしまひました、渡酒はあるだろう、○「ヘエ……、酒ならいくらでもございます、渡「持つて來い〳〵……」と、酒を持つてきさせ毒味をさせ、三士はグイ〳〵飲りながら聞ひ糺すと、この寺は大法寺といふ山寺、始めは和尚一人に小坊主が二人ばかりゐたが、女盗賊山姥お仙が手下の者を引き連れてのり込み、坊主を打ち殺して、三圍人の坊主を作つて、普通の山寺とみせかけ、實は山賊の巣窟と定め、近隣で、仕事をして、この山寺に閉ぢ籠つてゐたと分つた、新「ヨシ〳〵、では、これから乃公達が頭となつてゐる、その邊に遁げ散つた奴を連れて來い」と、いふと、手下の奴は大喜びで、みる〳〵内に

三十餘人集まつてきた、其處で三士は少時此寺を根城として、その邊の樣子を窺がうと、三人の追極は跡めて烈しい、現にこの寺までも役人が調べにきたが例の通り三四人の坊主を出して山寺とみせかけ追つ拂つてしまつた、お仙が盜み貯めた金子が三四百兩があつたので、二月三月は遊び暮らしてゐたが、少しく餘炎もさめたやうであるから、新「サア大角・大六、何時までこんなさてゝろに居つても仕方がない、と、いつて三人揃つて歩いては人目に立つて五月蠅くつて堪らぬ、これから三人別々に漫遊するとせん、渡「して御主人は何處に……、新「サアこれは籤引きにして定めん、一方は東海道へ出て江戸へ、一方は甲州信州路より奥州路……殘る一方は飛彈路より加賀、越中越後より奥州に入り、落ち合ふ先きは奥州の會津と定めん、渡「それは面白い」其處で三本の籤をこしらへて名々に引くと、東海道より江戸へは野々村新八郎、甲州信州路は和泉大六、今一方は渡邊大角齋と定まつた。

○彦左衞門といふ馬鹿老爺か

其處で野々村新八郎は一同を呼び寄せ、いろ〳〵いひ含め、それ〳〵金品を與へて立ち去らしめ、渡邊、和泉の兩人に百五十兩づゝの路銀を與へ、新さて兩人さも、今までのやうに決して暴れて歩くことはならん、何んといつても經議殿しき我れ〳〵、決して油斷せぬやうに……、それに第一、何時も話す傳助といふ奴を探し當てゝくれ」と、いろ〳〵注意を與へ、その翌日、又も二度と山賊の住まれぬ樣に火を放つて、三人は後日の再會を約して三方に分れた此處話しは三方に分れるが、本編は野々村新八郎の身の上を先づ語ることゝする、何んといつても忍術家だ、いくら嚴しくつても平氣の平左、何時しか東海道の沼津へ出で、武術修業者といふ觸れで悠々戸江を差して下つた、その間別に變つた話しもなく、泊りを重ねて江戸の城下へのり込み、日本橋馬喰町、

苅豆屋藤兵衛方へ泊り込み、九州の浪人山野小源太と偽名して、その翌日から編笠深く被つて江戸の町を見物して歩いた、その當時徳川家も三代の名君家光公の時代、殊に活潑なる將軍家であるから、武術は大いに隆盛を極め、大小百有餘の道場があつた、大は將軍家の御指南番柳生流の開祖柳生但馬守、同飛彈守、又小野派一刀流小野治郎右衛門、その他町道場取締では小石川白山下石川巖流の堂々たる道場があつた、然しこれ等の道場では他流試合を申し込んでもナカ〳〵相手にしてくれない、新八郎は傳助といふ奴を探しながら、毎日〳〵道場破りをしてゐた、何んといつても無双の腕前、その名はパッと擴がつた、新八郎は江戸の繁昌をみるにつけ、新徳川の威勢は大したものだ、然しこの儘江戸を立ち退くも殘念、切めては一ト太刀なりと豊臣家のためも又父、兄のために恨みたいものである」と、ときく〳〵千代田城の邊りへきてはゲイと睨みあげてゐた、その當時徳川家にも多くの忍術家が抱へてあると

いふ噂さであるから、滅多に城内へ忍び込むことは出來ない、何時しか時節もあろうと、廣い江戸の町を傳助は居らぬかと探しながら絶へず歩いてゐた、或る日のこと、上野の方よりブラ〳〵萬世橋のところまで歸つてくると、横合から一人の魚賣りが出てきて、ドスーンと新八郎に衝突して荷を引ッ繰り返した

魚「ヤイッ……、唐變木、氣をつけろいッ……」と、怒鳴りつけられ、新八郎大いにムッとして、新「ヤイ下郎、自分から突き當つておきながら、武士たるものに悪口吐くとは無禮な奴、もう一度申してみよ、手はみせぬぞッ之ッ……」と、刀の柄に手をかけて威嚇かした、定めし震へあがつて逃げるだろうと思ひの外、魚何をコン畜生、田舎三一奴、マゴ〳〵しやアがると土手ッ腹蹴破つて、鰹節押し込んで猫を嗾しかけるぞッ……、新「なんと……魚「何んとも絲瓜もあるか、乃公を誰れだと思やアがる、泣く子も默まるといふ一心太助のお兄哥さんを知らねねか、コン畜生ッ……」と、突然

天秤棒振りあげてハッシと打つてかゝつた、新八郎は亂暴な奴と思つたが、ヒラリ体を躱してその利腕グッと摑みあげる、魚痛ね〳〵、ぢやねね、……、イヽ痛くもなんにもねねや、この野郎ッ……、新武士たるものに向フて飽くまで無禮いたすかッ、魚野郎、放しやアがれ、イデ……」物見高いは都の常、殊に大江戸の地は烈しく、喧嘩とみてパラ〳〵ッと大勢の人が集まつてきた、その邊魚賣や俠客連中、一心太助がみも知らぬ武士のために酷い目に會はされてゐるので、□「ヤア一心の兄貴ぢやねねか、どうしたんだ、太「どうしてもねねが、一寸加勢してくれ、△「ヨシ〳〵、ヤイ田舍武士一心の兄貴をどうしやアがるんだ、やつ付けろ〳〵」と、パラ〳〵ッと早やくも十五六人の勇み男、天秤棒を持ち出してハッシ〳〵と打つてかゝる、その當時一心太助といへば男の中の男一疋、神田駿河臺の大久保彦左衛門を親分〳〵と呼んで、至つて義俠に富んだ活氣のある男、その人氣は素晴らしいも

のであつたから、加勢も頗ぶる多い、みる〳〵内に勇み肌の男が、集まつてきて新八郎に打つてかゝる、新ェヽイッ……下郎共、何んといたすぞッ」と太助を犬つころ投げに、投げつけ、チョイ〳〵引ッ摑んでブーン〳〵投げつけろ、太「ヤイッ皆、シッカリ遣つてくれ、一寸親分呼んでくるから……」と、太助はドシ〳〵駈け出した、少時すると太助は一人の老人の馬の轡をとつて、太「親分、此方だ〳〵」と、引つ張つてきた、これぞ余人ではない、德川家第一の忠義者四代の將軍に仕へ、天下の御意見番といつて、祿は僅かに三千石ではあるが、百萬石の大名……、否將軍家でも曲つたことでは容赦はせぬ、駿河臺の御老公と呼ばれた大久保彦左衛門忠敎、彦「コラ〳〵、太助、何をするる〳〵……、太「何をするではない、親分一寸きてくれないと納まらねねんだ、彦詰らぬところへ引ッ張つて行くな、予は今屋敷へ歸るのだ……

……ハテ大勢の人集まり、何事ぢや、太「あれだ〳〵、オイ〳〵退いた〳〵

親分がきた〳〵、親分、彼奴だ、私しが云々斯々、利腕引つ摑みアがつて投げつけアがつたんだ、一寸加勢してくんねヱ」彦左衛門馬上よりヂッとみるさ、深編笠を被つたまんま、素町人を手玉の如く前後左右に投げつけてゐる、

太「サア早やく、親分〳〵、彦「コラ〳〵待て〳〵……、アイヤ、それなる武家、如何なる仔細でこの者を手込めにいたす、この者は予の屋敷へ出入りの者なるか……、新「黙れッ、何奴か知らねども、無禮な素町人に加勢いたすか、挨拶なら馬を降りて姓名を名乘れ……、太「それッ親分、あの通りの田舍武士だ、グワンと一つ威嚇しつけてやつて下せヱ、彦「馬鹿をいへ……、見受けるところ貴公は田舍武士のやうでゐるが、私しは駿河臺の大久保ぢや、彦左衛門ぢや……」大久保彦左衛門と聞いて、素より高名な人物、流石の新八郎もハッと思つたが、新「ヨシッ、一つ威嚇かしつけてやろう……」と、思つたので、ワザと編笠もとらず、新「フム……、さては大久保彦左衛門と

いふ馬鹿老爺か、餘程貴樣ば老祿してゐるな、何しに參つた、町人のために詫びしにきたか、然らば馬を下りて突く這へい」傍若無人の大言に、並みゐる見物人は申すに及ばず、御本尊の彦左衛門は、彦「なんだ此奴……、彦左衛門を捕へて老祿してゐるさか、突く這へさか、さても〳〵も大言吐く奴、年は老つても彦左衛門、貴樣等如き田舍武士に負けはさらぬ、マゴ〳〵すると馬蹄に蹴あげるぞッ」と、怒鳴りつけた、新八郎はカラ〳〵と打ち笑ひ、新「ハッハ……老年の冷水、美事馬蹄にかけるかけてみろッ」と、編笠もとらず大手を擴げて立ちはだかつた。

○首なんか拔かれて堪るか

彦左衛門はカン〳〵に立腹なし、新「汝れッ、老年の冷水なぞゝ甘く見居るかヨシッ、望み通り蹴散らしてくれるぞッ……エイッ……」ピシーリ馬に一

鞭くれると、ドッと馬は荒れ立ち、今にも新八郎を一刎ねに蹴あげんとした、ヒラリ躰を躱して馬の反尾をグッと引つ摑んでズル〳〵ッと引き戻した、斯うなる、馬は蹴るどころかヒヽーン〳〵と高く嘶く、彦左衛門仕揉したりと、手に持つたる鞭でピシーリ、新八郎ヒョイと首を捻つたが、肩口をかすられ、クワッと怒り、新「汝れッ老耄ッ……」と、忽ち片手を延して彦左衛門の片足をグッと引つ摑んでズル〳〵ッと引き下した、太「ヤア親分を……、それッ遣つ付けろッ……」その内に役人もきてゐたものとみて、役「ヤア御老公に向つて無禮いたす奴ッ……」と、バラ〳〵ッとさび出でゝ打つてかゝらんとした、新「ヤアガラクタ共、狼藉いたすに於いては彦左衛門といはさぬ、直ちに首を引き抜くぞッ……、彦「ウワーッ……、首なんか抜かれて堪るかッい、新「然らば何故亂暴にも馬蹄で蹴あげんとした、これでも喰へッ……」と、左手でポカーリ、怪力無双の新八郎に殴られ〻は左手でも堪らない、頭の

皿もとんだやうに應へた、然し強情我慢な老人、痛いなどゝはいはない、彦「、豪いッ……、新「何が豪い……」ポカーリ、彦「ウム豪い〳〵ぞ……、

□「それッ……」と、一同爭そひかゝる、第一一同は編笠をとろうとする、新八郎も今此處で顔をみられては少し都合が惡いので、彦左衛門を側へ投げ出し、寄りくる奴等を左右に投げとばし、バラ〳〵ッと逃げ出した、□「それッ逃げたぞ、逃すな〳〵と、大勢バラ〳〵、新八郎は忽ち萬世橋の上から欄干に手をかけるよとみへたる間に、水中目がけてドブーンとさび込んだ、△「それッとび込んだぞ〳〵……」と、大勢の人々は黒山の如く、川中を見詰め、役人等若い者は彼方此方と探したが、早やその姿は少しもみへず、△「どう〳〵鐚ばつてしまつたのかしら……、□「それにしても死骸が上りそうなものではないか、△「イヤ、死んだら一寸は上らん……」と、ワイ〳〵ゐつてゐる、此方では一心太助は漸やう彦衛左門を助け起した、太「親分、恐ろしい

今日は弱いではございませんか、彦「馬鹿いへ、乃公が弱いのではない、あの位いの田舎武士、捻ちあげるのは何んでもないが、少しは小力のありそうな奴だつたから、どの位い力があるか一つ二つ殴らしてやつたが、割りに力があるわい、今朝から頭痛がして居つたが、どうやら癒つたやうぢや……、太「ヂヨ〳〵冗談いちつやア不可ませんせ……、彦「然しあの浪人者は如何いたした、太「今さても敵はぬと思つたが川の中へドブーンと遣つ付けました、彦「フム、それは惜しいことをいたした、役人に申し、もし浪人者を引っ捕へたら直ぐに屋敷へ引っ立てゝくるやうに申してくれ」と、いひおいて彦左衛門も這〳〵の体で屋敷へ立ち歸つた、此方一同は鵜の目鷹の目で探してみるが、少しも分らない、その筈だ、野々村新八郎は河中へさんでも例の水遁の術で、身体も濡れなければ水中へも沈まない、その儘悠々と茄豆屋へ歸り、獨酌でグビリ〳〵と飲つてゐるとは誰れ一人知るものもなかつた、此方一心太助は自分の喧

嘩に大久保彦左衛門を引き出して、威嚇し付けて貰はうと思ひの外、相手は凹まず彦左衛門の頭を二つも殴つて川の中へとび込んだが、死んだのか生きたのかその姿が分らないので、濟まぬてとゝ思ひ、それからは商賣も休んで、毎日〳〵萬世橋のところへきみるが死骸が上らない、生きてゐるとすれば餘程水泳が上手に違ひないが、何んでも引っ捕へて大久保の屋敷へ連れて行かねばならないと、江戸の町をウロ〳〵探してゐた、何時しかこの評判がパッと江戸中の大評判となり、役人等も容易ならぬ亂暴者とわつて、通行の浪人体の武士、又宿までも殿〳〵く尋ね、茄豆屋へも調べにきたが、新八郎は僞名して、然かも武術修業者といつて、暇さへあると、近邊にある一刀流の道場で宮田五郎兵衛といふ道場で、門弟相手に遊んでゐるから、分らない、五郎兵衛も山野先生〳〵といつて大切にする、何しろその頃は武術が隆盛であるか日々他流試合の者がくる、然し誰れ一人として新八郎に勝つものがないので、五郎兵衛もこれ

は何んでも少時山野先生を道場に足を止めさせておけば、どんな道場荒しがきても大丈夫だし、又門弟も殖へるに違ひないと、新八郎に向つて、宿屋住居は費用が多くかゝるとてであるから、寧そ手前の道場に御滞在なされては如何ででさいますと勧められ、新八郎も渡りに船だ、江戸の土地は廣い、傳助を探すといつても雲を攫むやうな話し、殊に時機あらばと狙つてゐるので、快よく宮田道場の食客になり、素より武術は至つて好きだ、暇さへあると道場へで出て門弟相手に稽古する、門弟も宮田先生よりも強いので、我れも〳〵と稽古して貰はう、それからそれへと聞き傳へて日々門弟になるものが殖へてきた、この頃では旗本の弟子も澤山ある、或る日のこと、門弟七八人集まつて頻りに話しをしてゐる、△大きな聲ではいはれぬが、山野先生は家の先生より餘程強いではないか、◎「そうだ〳〵、何んでも山野先生は、江戸の町道場を大概荒して廻られたそうだが、年は若そうだが豪い先生だ……、甲「對生も豪

いが、過日一心太助を捻ぢあげ、大久保御老公の頭を殴つたといふ田舎武士も豪いではないか、乙「そうだ、あれはあれッきり知れんのか、丙「サッパリ分らんそうだが、妙なこともあるもんだな」と、話してゐたが、どうやら全たく新八郎には氣もつかぬ樣子、新八郎は安心の胸を撫で下し、多くの人々に先生〳〵と立てられ、毎日〳〵酒を飲んではブラ〳〵と江戸の町を歩き、頻きに路傍の噂さに耳を傾けてゐると、それから半月ばかりも經つて、門弟等の話しに、將軍家はお忍びで目黒不動尊の近邊でお鷹野を催されるとチラリと聞いた、新ウム、將軍家のお鷹野とあれば、如何に嚴しく警固してゐても近寄れぬことはあるまい、千載の一遇……、この時を外して又何時か果さんと、大いに言てび勇み、その月の二十日、それまでには尚ほも三日もあるので宮田五郎兵衛には少しく用事あつて川越の城下まで行つてくると傳へて、ブラリ日本橋の宮田の道場を立ち出でた。